Léon de Rosny

レオン・ド・ロニーと19世紀欧州東洋学

二松学舎大学私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

「近代日本の「知」の形成と漢学」

企画展

レオン・ド・ロニーと19世紀欧州東洋学

展示期間　二〇一九年六月二七日～八月一九日

場　所　二松学舎大学九段一号館地下三階　大学資料展示室

企画展「レオン・ド・ロニーと19世紀欧州東洋学」の開催にあたって

二松学舎大学ＳＲＦ研究代表者　文学部教授　町　泉寿郎

フランス国立東洋語学校の初代日本語教授レオン・ド・ロニー Léon de Rosny の名前と共に、リール市図書館に残されているその旧蔵書のことを、ウィリー・ヴァンドゥワラ教授から聞いたのは、本学21世紀ＣＯＥプログラム（二〇〇四～〇九年度）採択早々の時期であったと記憶する。当時は海外漢文講座に傾注する一方、手間暇のかかる在外資料調査は殆ど行えなかった。ＳＲＦプロジェクトの採択後、気になっていたロニー旧蔵書の調査に着手し、数年がかりで一応の目途が立つところまで来た。ロニーの蔵書は彼自身が収集した和書（ピーター・コーニツキ教授による目録が備わる）とその師匠筋（レミュザやジュリアン）の蔵書を継承した漢籍からなるが、漢籍に残されたラテン語等の書入れからは欧州の東洋学の厚い蓄積が実感される。また近年、関連資料の収集にも努めた結果、ロニー書簡等の資料を通して、奇人扱いされることもある彼の学問が決して孤立した性格のものではなく、サンクトペテルブルクなど広範囲におよぶ欧州東洋学者ネットワーク（及び多くの日本人との交流）を背景に持つことが分かってきた。我々現代日本人にとって、日本学と東洋学の間にはかなりの径庭があるけれども、19世紀の欧州東洋学者においては必ずしもそうではなかった。従来低い評価にとどまるロニーが作ったゴッタ煮のように見える日本語教科書も、違う視点から新しい価値を見出すことができるかもしれない。ロニーと19世紀欧州東洋学への回顧が、日本漢学を含む日本学のこれからを考える上で資することがあるのではないかと考える。併せて、幕末明治期の海外情報や洋学者・対外関係諸家の資料も展示してみた。忌憚のないご意見をいただきたい。

令和元年六月二二日夏至

レオン・ド・ロニーと19世紀欧州東洋学

目次

はじめに（町 泉寿郎）

Ⅰ レオン・ド・ロニーとその周辺……5

レオン・ド・ロニー略伝

A レオン・ド・ロニー書簡……6

B レオン・ド・ロニー著作……15

『和漢字洋訳』

『養蚕新説』

『詩歌撰葉』

『中華古今採』

『実語教・童子教』

C クラプロート書簡……21

D 欧州刊行漢籍類……27

『大学和字旁訓』ライデン刊本

『千字文』ライデン刊本

参考：『世話千字文』一八三五年刊

『新増字林玉篇』ライデン刊本

参考：『新鐫校正増補字林玉篇大全』一八五六年刊

Ⅱ 幕末期の海外情報……30

林子平著『校正海国兵談』

清・七十一撰『西域聞見録』和刻本

参考：清・紀昀撰『閱微草堂筆記』

清・魏源撰『海国図志』和刻本

清・徐継畬撰『瀛環志略』和刻本

『朝鮮司訳院日満蒙語学書断簡』

佐藤信淵著『禦侮儲言』

古賀侗庵著『海防臆測』

田中万春著『禦虜策』

Ⅲ 幕末明治期の洋学者・対外関係者の筆跡……37

林子平書簡拓本

大槻磐渓書簡

林復斎七絶書幅

向山黄村七律書幅

原田一道墓碑銘拓本（三島中洲撰）

石川舜台書幅

福地桜癡七絶書幅

飯塚西湖五律書幅

附・レオン・ド・ロニー関連年表……46

凡例

一、本書に収録した資料のうち、二松学舎大学所蔵資料には、請求記号・整理番号等を略記し、それ以外（個人蔵）には☆を付した。

二、本書に使用する漢字の用字は、常用漢字体など通行の字体を基本とした。

三、人物の呼称は基本的に姓号を用いるが、汎用される姓名等を用いた場合もある。

四、図版解説は、5～26ページはヴィグル・マティアスが、27～29、32～36ページ、年表は清水信子が、30、31、37～45ページは町泉寿郎が分担執筆した。

五、本書は二松学舎大学の大学資料展示室の企画展「レオン・ド・ロニーと19世紀欧州東洋学」（展示期間二〇一九年六月二七日～八月一九日）の展示図録を兼ねるものである。

I レオン・ド・ロニーとその周辺

レオン・ド・ロニー略伝

レオン・ルイ・リュシャン・プリュノル・ド・ロニー（Léon-Louis-Lucien Prunol de Rosny, 1837-1914, 漢字では勤温羅尼、囉尼など）は、北フランスのロースに生まれた。初め植物学に興味を持ち、1850年に国立自然史博物館で開かれた植物学の講座を受講する。翌年、14歳のとき、製本工と植字工の仕事も学ぶ。1852年には東洋言語特別学校（École spéciale des langues orientales, 東洋語学校とも言う。現在は国立東洋語東洋文明学院と言う）に入学し、中国語、アラビア語、マレー語など東洋語の学習を始める。中国語の講座はヨーロッパで1815年にコレージュ・ド・フランス（Collège de France）で初めて開かれ、ジャン＝ピエール・アベル＝レミュザ（Jean-Pierre Abel-Rémusat, 1788-1832）が初代教授に就任し、1832年にレミュザから中国語と満州語を学んだスタニスラス・ジュリアン（Stanislas Julien, 1797-1873）がレミュザをついで教授となる。東洋語学校でも1843年に中国語の講座が加えられ、フランスで初めて北京官話の文法に関する本を出版したジュリアンの弟子のアントワヌ・バザン（Antoine Bazin, 1799-1862）が教授に任命される。

ロニーはジュリアンとバザンに中国語を学ぶ。1853年に「アジア協会」（Société Asiatique, 1822年に創立）のメンバーになり、1855年にこの機関誌にシャム語についての論文を載せている。当時、ロニーは18歳で、これが彼のフランス学界への初登場である。ロニーは最初中国語に没頭するが、ジュリアンに日本語の研究を勧められる。当時のヨーロッパでは、ドイツのヨハン・ヨーゼフ・ホフマン（Johann Joseph Hoffmann, 1805-1878）やオーストリアのアウグスト・プフィッツマイアー（August Pfizmaier, 1808-1887）などを除いて、日本語が知られていなかったので、ロニーはロドリゲスの『日本語文典』などイエズス会士の語彙集、シーボルトが復刻した『書言字考』などを参照しながら、独学で日本語を学びはじめた。1854年にロニーが出版した『日本語研究に必要な主要な知識の概要（Résumé des principales connaissances nécessaires pour l'étude de la langue japonaise）』と、1856年に出版した『日本語研究入門（Introduction à l'étude de la langue japonaise）』（表紙に『日本語考』とも書かれている）は、ヨーロッパで初めて日本語が全体的に紹介される機会となった。この時、『日本語考』の印刷に使用された仮名の活字（片仮名二体と平仮名二体）は、ロニーが製本工と植字工の経験を活かして国立印刷局の銅板師マルスラン・ルグラン（Marcellin Legrand）に彫って作らせたものである。

1862年に文久遣欧使節がフランスを訪問した際にはその通訳を務めて、フランス国内のみならず、使節団一行がヨーロッパを巡る時にライデン、サンクトペテルブルクなどまで一行の行く先に同行する。また、1867年に幕府外国奉行としてパリ万国博覧会に訪問した栗本鋤雲（1822-1897）とも交流する。1863年に東洋語学校で初代講師として日本語の講義を担当し、1868年には正式に教授に任ぜられ、1907年に東洋語学校を退職するまで日本語を教え続ける。日本ではロニーはフランスにおける日本研究の草分けとして知られているが、彼自身は民俗学者、東洋学者、アメリカ学者だと主張した。1859年にアメリカ・東洋民族学協会（Société d'Ethnographie américaine et orientale, 1864年に民族学協会と改名される）を創立し、当協会の終身書記（1873～1879年と1889～1891年会長）になり、1875年に第１回アメリカニスト国際会議に参加しマヤ語などについて研究報告もする。一方で、ロニーは人間的に問題の多い人物であり、著述は多いが雑駁な知識に基づく未完全なものが多く、フランス学界では第二世代の日本研究の専門家によって学者としてロニーに対して厳しい評価が下されてきた。しかしながら、日本語についての資料に乏しい時代において、一度も日本を訪れることなく、独力で日本語を学習したロニーは、フランスにおける日本学・日本語の研究の発展に努力し、大きな貢献をなしたと近年再評価されている。1914年にパリ南郊のフォンテネー・オ・ローズで78歳で世を去る。

A レオン・ド・ロニー書簡

二松学舎大学に所蔵されるこれらの書簡は、いずれもロニーからマリー＝フェリシテ・ブロッセ（Marie-Félicité Brosset, 1802-1880）へ送られたものである。ブロッセはフランスの東洋学者である。コレージュ・ド・フランスでギリシャ語、アラビア語、中国語を学んだ後に、アルメニア語とグルジア語の専門家となる。1836年には帝国サンクトペテルブルク科学アカデミーの会長であるセルゲイ・セミョーノヴィチ・ウヴァーロフ（Sergey Semionovich Uvarov, 1786-1855）に招かれ、東洋語の教授に任命され、アカデミーの書記にもなる。1880年フランスに帰り、世を去る。アルメニアとグルジアについて200点以上の作品を残し、その中、1848-58年に出版された『グルジア史（Histoire de la Géorgie)』が最も知られている。

＊＊＊

この書簡コレクションは、ロニー自筆の書簡が９通で、８通はフランスからサンクトペテルブルクへ送られたもので、１通は第3回国際東洋学者会議に参加するためロシアに来たロニーがサンクトペテルブルクのホテル（Hôtel de la Paix）から送ったものである。書簡の他に、ロニーとスタニスラス・ジュリアンとの連名で、1859年に創設されたアメリカ・東洋民族誌学会の名誉会員の称号をブロッセに贈った通知（1859年７月20日付）もある。

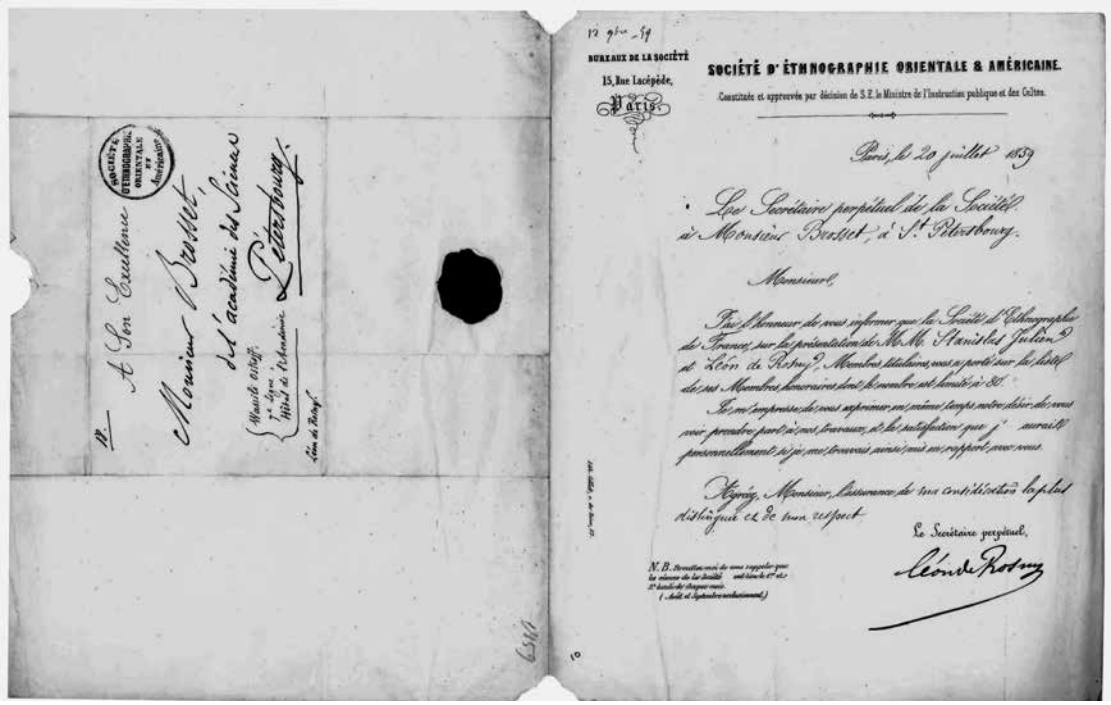
ロニーの筆による最初の書簡は1861年10月15日付、最後の手紙は1876年８月28日付である。いくつかの書簡には鉛筆で日付が書かれているが、ブロッセによる受領日の記入ではないかと思われる。また、書簡のうち８通にはロニーが附属した学会・学校の用箋が使われている（民族誌学会：５通、国際東洋学者会議：２通、東洋語学校：１通)。

書簡の内容はロニーによるゴシケーヴィチの『和魯通言比考』の評価報告書、ロシアにある和本のコレクション、または東洋語教育の現状、コーカサスにおける養蚕の導入についての情報を求めながら、民族誌学会の活動、第１回国際東洋学者会議の紹介と誘いを報告し、日本学・日本語に関する自らの研究活動（進歩、出版）なども伝える。

＊＊＊

先行研究はロニーとブロッセの学術交流、またロニーとサンクトペテルブルク科学アカデミーとの関係にほとんど触れていないが、この書簡コレクションから、ロニーにとっては東洋学について情報を求めるため、あるいは情報を発信をするため、サンクトペテルブルク科学アカデミーの書記であったブロッセとの交流が重要な意義をもったことが分かる。二人ともコレージュ・ド・フランスで東洋語を学習し、「アジア協会」のメンバーであったので、この書簡コレクションはフランスの東洋学者の海外ネットワークの現状とそのメンバーの活動も語るものと言えよう。

A－① 1859年７月20日付　ブロッセ宛　ロニー書簡（SRF）



12 9bre 59

BUREAUX DE LA SOCIÉTÉ
15, Rue Lacépède,
Paris

SOCIÉTÉ D'ETHNOGRAPHIE ORIENTALE & AMÉRICAINE.
Constituée et approuvée par décision de S. E. le Ministre de l'Instruction publique et des Cultes.

Paris, le 20 juillet 1859

Le Secrétaire perpétuel de la Société à Monsieur Brosset, à St Pétersbourg.

Monsieur,

J'ai l'honneur de vous informer que la Société d'Ethnographie de France, sur la présentation de MM. Stanislas Julien & Léon de Rosny, Membres titulaires, vous a porté sur la liste de ses Membres honoraires dont le nombre est limité à 30.

Je me empresse de vous exprimer en même temps notre désir de vous voir prendre part à nos travaux, et la satisfaction que j'aurais personnellement à ce que nous trouvassions ainsi mis en rapport avec vous.

Agréez, Monsieur, l'assurance de ma considération la plus distinguée et de mon respect.

Le Secrétaire perpétuel,
Léon de Rosny

N.B. Je vous prie de vous rappeler que les séances de la Société ont lieu le 4e vd. 2e lundi de chaque mois. (Joindre à l'envoi de vos travaux.)

A Son Excellence Monsieur Brosset, Membre de l'Académie des Sciences de St Pétersbourg.

Société d'Ethnographie Orientale et Américaine

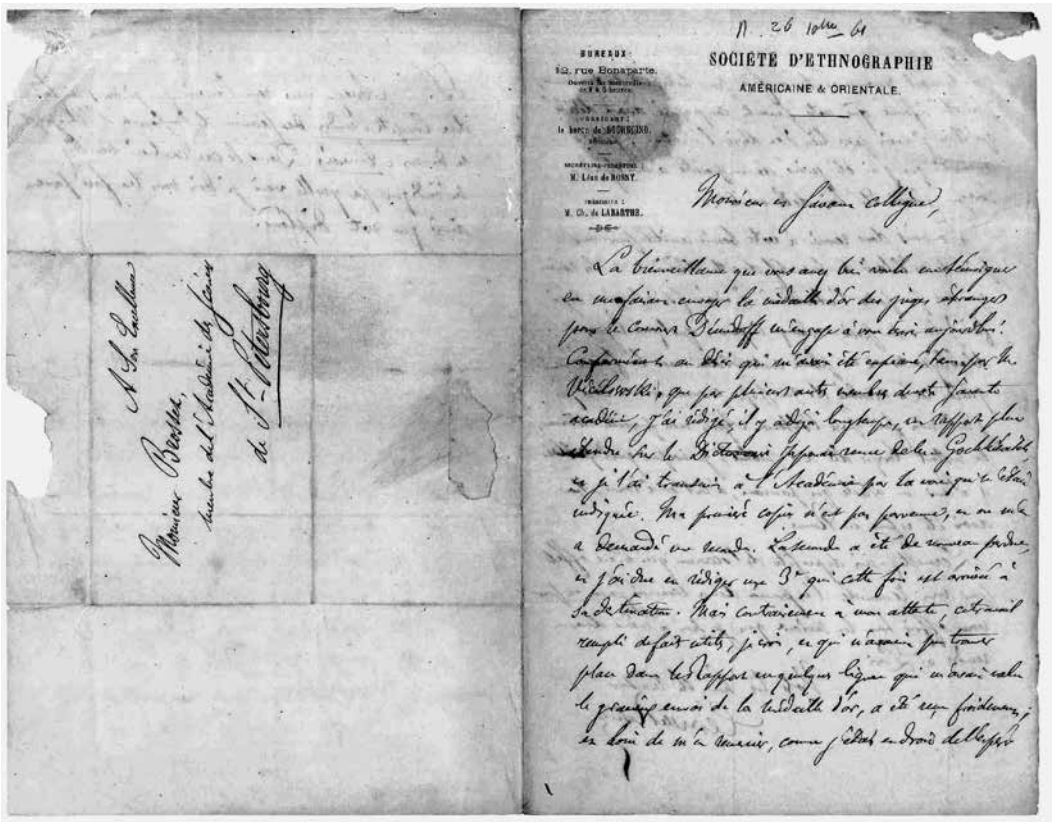
Mandat 6 roubles
1re Lettre
Hôtel de Détention
Léon de Rosny

6360

10

ロニーとスタニスラス・ジュリアンと連名で、1859年に創設されたアメリカ・東洋民族誌学会の名誉会員の称号をブロッセに贈った通知である。用箋はアメリカ・東洋民族誌学会のもので、当会の終身書記であったレオン・ド・ロニーがサインしている。

A－② 1861年〔10月26日受領〕　ブロッセ宛　ロニー書簡（SRF）



N. 26 10bre 61

BUREAUX
12, rue Bonaparte.
Ouverts les mercredis et V & S heures.

PRÉSIDENT :
le Baron de MONTREUIL.
Général.

SECRÉTAIRE-TRÉSORIER :
M. Léon de ROSNY.

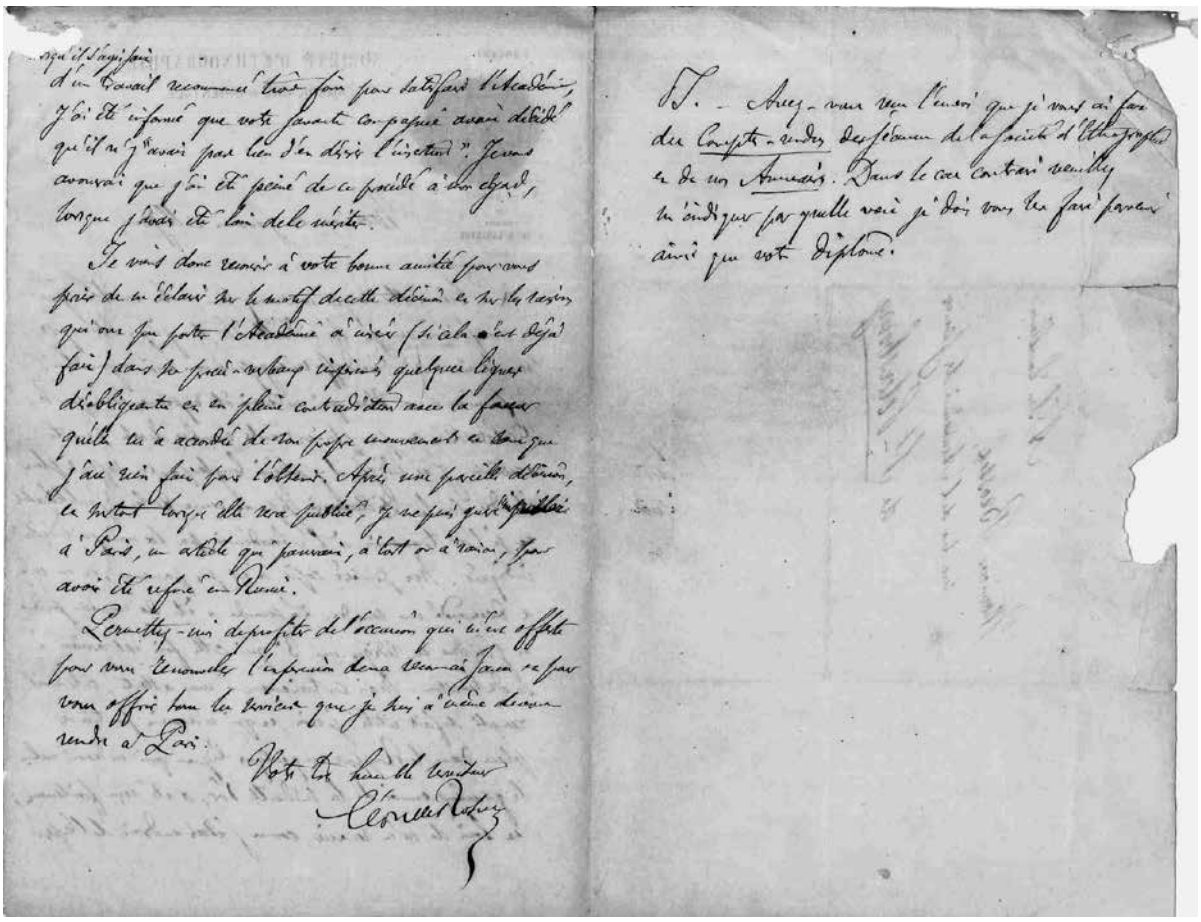
BIBLIOTHÉCAIRE :
M. Ch. de LAMARTHE.

SOCIÉTÉ D'ETHNOGRAPHIE
AMÉRICAINE & ORIENTALE.

Monsieur et savant collègue,

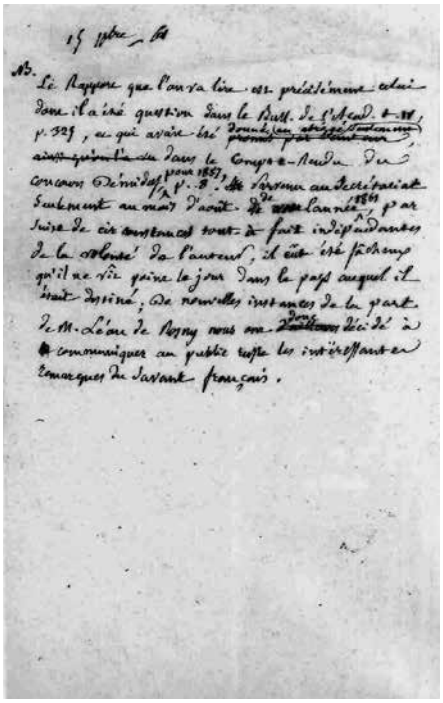
La bienveillance que vous avez bien vouloir manifester en m'envoyant la médaille d'or des juges étrangers pour le Comte Demidoff m'engage à vous voir aujourd'hui. Contrairement au désir qui m'avait été exprimé, tant par M. Vielhorski, que par plusieurs autres membres de votre savante académie, j'ai rédigé, il y a déjà longtemps, un rapport plus étendu sur le Dictionnaire japonais-russe de Goshkevitch que j'ai transmis à l'Académie par la voie que l'on m'avait indiquée. Ma première copie n'est pas parvenue, ou on m'a demandé un second. La seconde a été de nouveau perdue, je fus obligé de rédiger une 3e qui cette fois est arrivée à sa destination. Mais contrairement à mon attente, cet envoi rempli de faits utiles, j'ai vu, ce qui n'avait pas trouvé place dans le rapport en quelques lignes qui m'avait valu le premier envoi de la médaille d'or, a été regardé comme faisant le fond de mon mémoire, comme j'étais en droit de l'espérer

A-②つづき



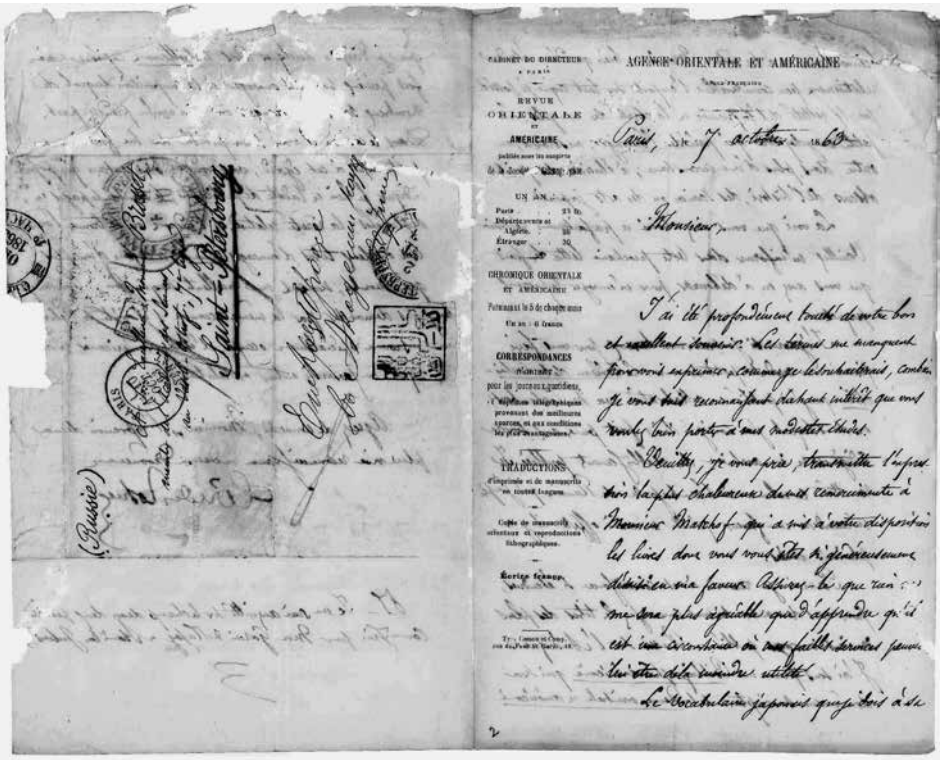
発信時の日付は書かれていないが、一頁目に鉛筆で「1861年10月26日」と書入れがあり、ブロッセが受領した日付を記述したのではないかと思われる。アメリカ・東洋民族誌学会の用箋が使われているが、住所は①とは違っている。帝国サンクトペテルブルク科学アカデミーのデミドフ賞に関する内容である。その背景は、1857年の科学アカデミーのデミドフ賞には、ゴシケーヴィチの『和魯通言比考』（初ての本格的な和露辞典）が提出され、科学アカデミーはロニーにこの辞典の評価を求める。ロニーの報告書に基づきゴシケーヴィチの『和魯通言比考』がデミドフ賞を受賞され、協力したロニーに感謝を表すために、科学アカデミーはロニーにもデミドフの金賞を贈る。しかし、ロニーは科学アカデミーの謝意が十分ではないと感じ、アカデミーの紀要にも『和魯通言比考』の評価報告書が収載されなかったとして、この手紙で不満をブロッセに伝えている。

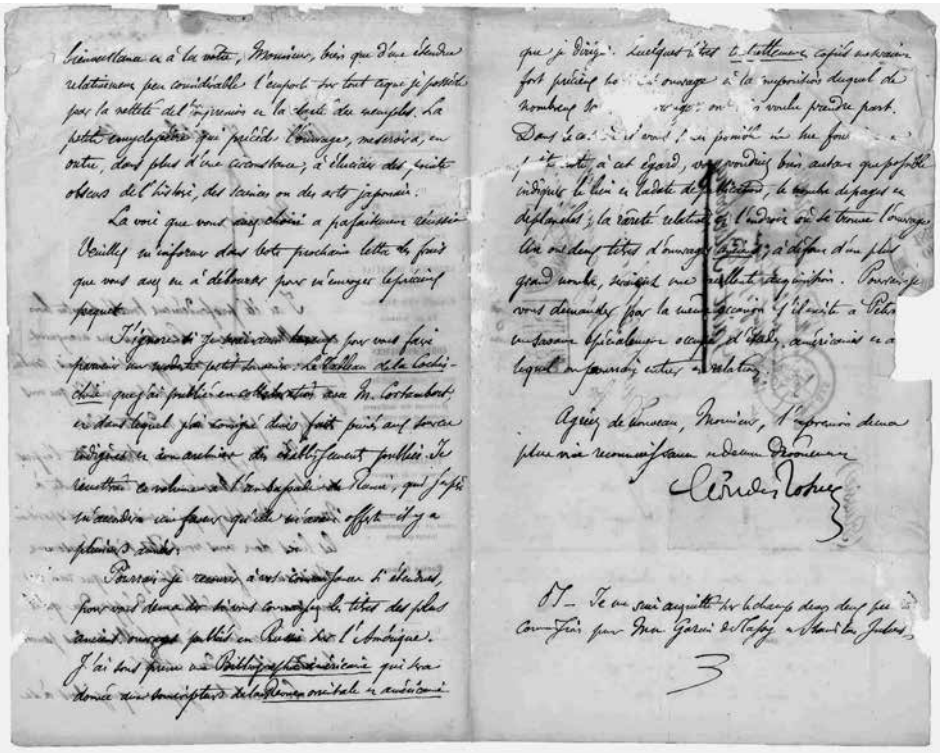
手紙に挟まれているブロッセの手書きメモには、ロニーの報告書をロシアで公開するべきであると書かれており、科学アカデミー紀要を確認すると1863年にロニーの評価報告書が収載されている。



◀ブロッセの手書きメモ

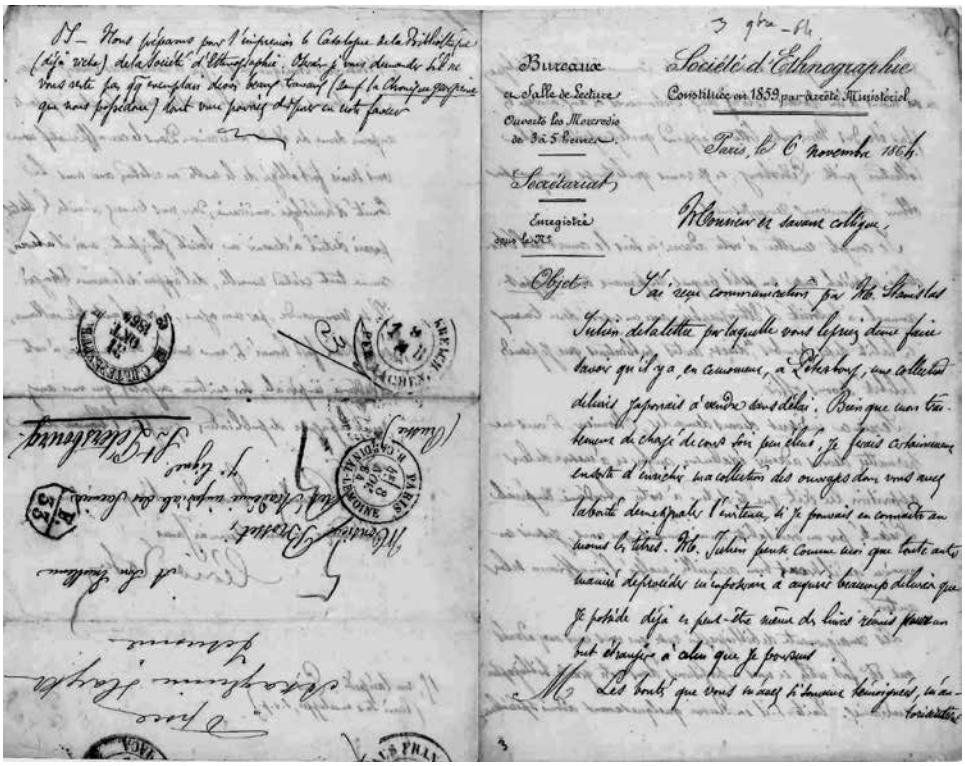
A－③ 1863年10月７日付　ブロッセ宛　ロニー書簡（SRF）





住所の下にロシア語で「帝国サンクトペテルブルク科学アカデミー」が書かれており、ロニーの印「羅尼」もある。ロニーはブロッセを介してマーホフ（Makhov）という人物から『日本語の語彙集（Vocabulaire japonais)』などの和本を手に入れたことに対する感謝を表す。返礼としてロニーは共著の『コーチシナ地誌（Tableau de la Cochinchine)』（1862）をロシア大使館経由でブロッセに送る。手紙の本文には、アメリカ・東洋民族誌学会に関する話もあり、ロニーはアメリカ学についての参考文献リストを作成して会員に送りたいので、ロシアにアメリカについての刊行物があるかどうか、またサンクトペテルブルクにアメリカ学の専門家がいるかどうかを訊ねている。

A－④ 1864年11月6日付　ブロッセ宛　ロニー書簡（SRF）



Bureaux
et Salle de Lecture
Ouverts les Mercredis
de 3 à 5 heures.

Secrétariat,

Enregistré
sous le N°

Société d'Ethnographie
Constituée en 1859 par décret Ministériel

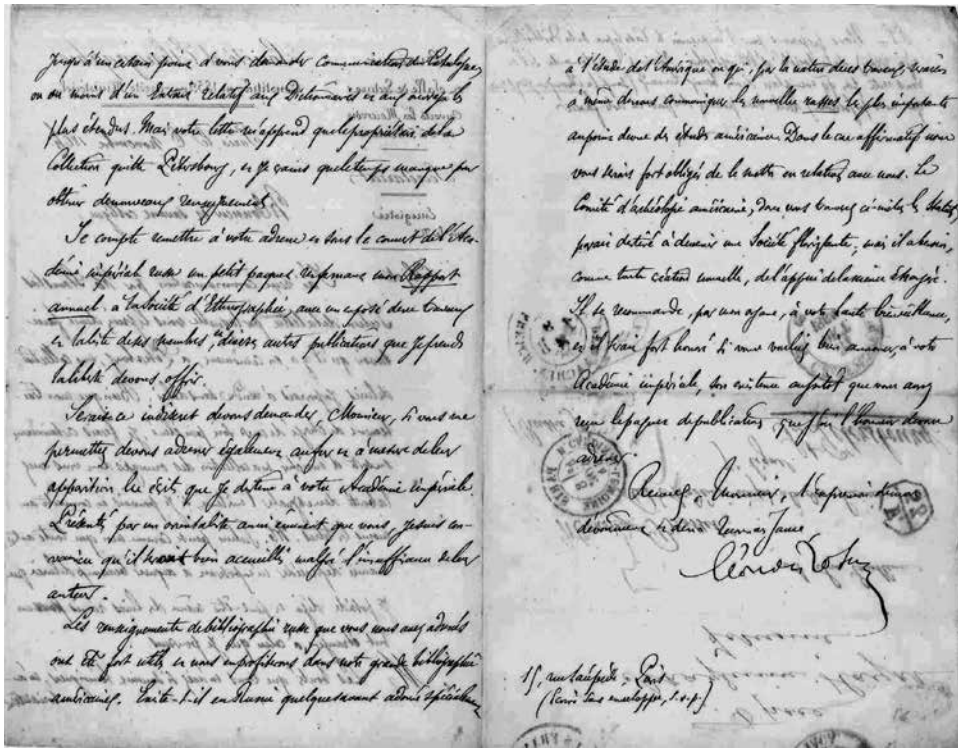
Paris, le 6 novembre 1864.

Monsieur et savant collègue,

Objet :

J'ai reçu communication par Mr. Stanislas Julien de la lettre par laquelle vous le priez de faire savoir qu'il y a, en ce moment, à Pétersbourg, une collection de livres japonais à vendre dans ce délai. Bien que mes très-nombreux de charge de cours soient peu élevés, je serais certainement tenté d'acheter sa collection des ouvrages dont vous avez la bonté de me parler, l'occasion, si je pouvais en connaître au moins le titre. Mr. Julien pense comme moi que toute autre manière de procéder est impossible à exposer beaucoup de livres que je possède déjà et peut-être même des livres réunis peut-être tout étrangers à celui que je poursuis.

Les bonts que vous avez témoignées, en ce-



jusqu'à un certain point d'avoir demandé communication de la bibliographie, ou du moins d'en donner extrait aux Mémorandés et aux archives le plus étendus. Mais votre lettre m'apprend que le propriétaire de la collection quitte Pétersbourg, et je cours quelques chances pour obtenir davantage renseignements.

Je compte remettre à votre adresse, en tout le comité de l'Académie impériale russe un petit paquet renfermant mon Rapport annuel à la Société d'Ethnographie, avec un exposé des travaux et la liste des membres, divers autres publications que je prends la liberté de vous offrir.

Serais-ce indiscret de vous demander, Monsieur, si vous me permettez de vous adresser exclusivement, après en avoir obtenu l'approbation du Comité, que je dirige à votre Académie impériale. L'obligeant, par un service aussi éminent que vous, je serais convaincu qu'il serait bien accueilli, malgré l'insignifiance de son auteur.

Les renseignements de bibliographie russe que vous avez eu la bonté de me faire, m'ont empêché de vous faire quelque bibliographie ambitieuse. Mais je vous en ferai quelques-uns d'autres spécialement

à l'étude de l'histoire en général, par la nature de vos travaux, vous à vous donner communication, les travaux les plus importants ou les plus intéressants dans le cas affirmatif vous vous serez fort obligé de le mettre en relation avec moi. Le Comité d'archéologie américaine, dans vos travaux si variés, s'est fait un devoir à devenir aux Société étrangère, ainsi s'est-il chargé, comme toute société savante, de l'appui de la science étrangère. Il le recommande, par son organe, à vos soins bienveillants, et il serait fort heureux si vous voulez bien examiner, à votre Académie impériale, des avantages que vous avez vous les pages de publications, pour les échanges avec.

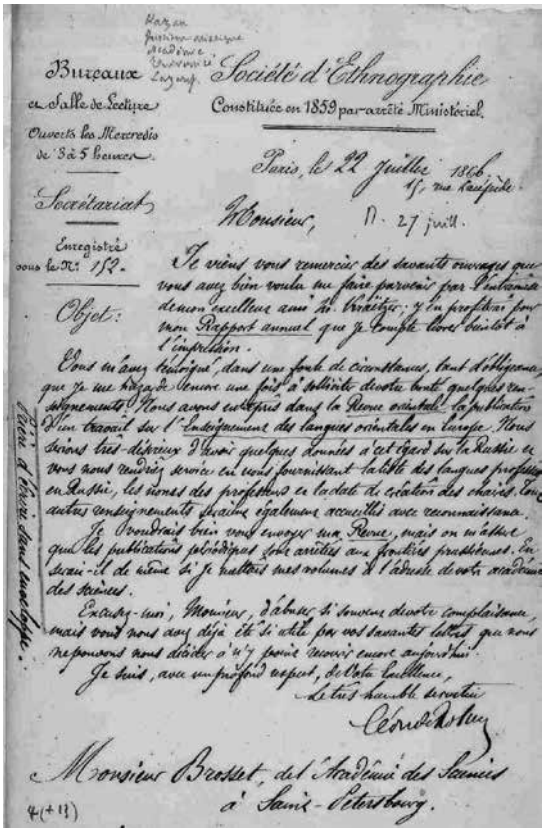
Recevez, Monsieur, l'expression de mes dévouement et de mes sentiments

Léon de Rosny

15, rue Lafayette, Paris
(Voir les enveloppes, 1 o.p.)

ロニーはスタニスラス・ジュリアンから、サンクトペテルブルクでは和本のコレクションを直ちに購入ができると聞き（ブロッセがジュリアンに送った手紙からの情報）、そのコレクションについて詳しい情報を求めている（文献のタイトルや辞典の有無など）。コレクションのオーナーがまもなくサンクトペテルブルクを去るようであると聞いたので、ロニーが焦っている。また、ブロッセに会員の報告書と会員名簿などを含む民族誌学会のアニュアルレポートを送るが、ロシアに届いたら科学アカデミーにも紹介してほしいと依頼している。追伸には、ロニーが現在民族誌学会の図書室の目録を作成しているので、ブロッセが書いた論文を送って欲しいと依頼している。

A－⑤ 1866年７月22日付　ブロッセ宛　ロニー書簡（SRF）



Bureaux
et Salle de Lecture
Ouverts les Mercredis
de 3 à 5 heures.

Société d'Ethnographie
Constituée en 1859 par arrêté Ministériel.

Secrétariat

Enregistré
sous le N° 152.

Objet:

Paris, le 22 juillet 1866
19, rue Rasipail

Monsieur,

N. 27 juill.

Je viens vous remercier des savants ouvrages que vous avez bien voulu me faire parvenir par l'entremise de mon excellent ami M. Kraïtzer, et en profiter pour mon Rapport annuel que je remplis chaque année à l'Empereur.

Vous m'avez témoigné, dans une foule de circonstances, tout d'obligeance que je me hazarde encore une fois à solliciter de votre bonté quelques renseignements. Nous avons entrepris dans la Revue orientale la publication d'un travail sur l'enseignement des langues orientales en Europe. Nous serions très-désireux d'avoir quelques données à cet égard sur la Russie et vous nous rendrez service en nous fournissant la liste des langues professées en Russie, les noms des professeurs et la date de création des chaires. Les autres enseignements seraient également accueillis avec reconnaissance.

Je voudrais bien vous envoyer ma Revue, mais on m'assure que les publications périodiques sont arrêtées aux frontières prussiennes. En serait-il de même si je mettais mes volumes à l'adresse de votre académie des sciences.

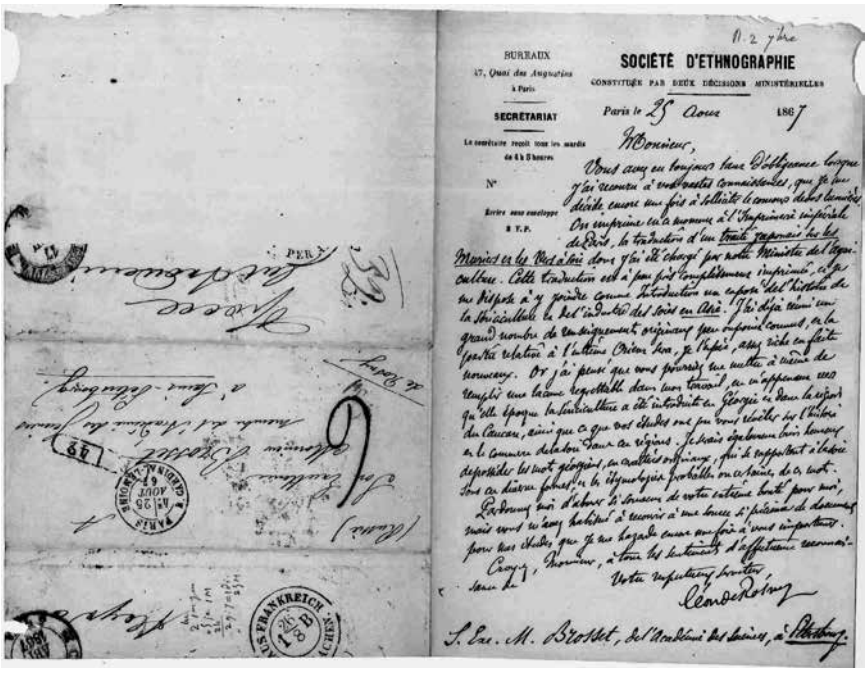
Excusez-moi, Monsieur, d'abuser si souvent de votre complaisance, mais vous nous avez déjà été si utile par vos savantes lettres que nous ne pouvons nous décider à n'y faire recours encore aujourd'hui.

Je suis, avec un profond respect, de votre bienveillance,
Le très humble serviteur
Léon de Rosny

Monsieur Brosset, del'Académie des Sciences
à Saint-Pétersbourg.

ロニーはクロイツア（Kraïtzer）という友人を介してブロッセからもらった文献について謝意を表する。また、民族誌学会雑誌にヨーロッパにおける東洋語教育について論文を載せたいので、ロシアで教えられている東洋語、教師の名前、講座の開設年などの情報を送ってほしいと依頼している。

A－⑥ 1867年８月25日付　ブロッセ宛　ロニー書簡（SRF）



BUREAUX
17, Quai des Augustins
à Paris

SECRÉTARIAT

Le secrétaire reçoit tous les mardis de 4 à 5 heures

N°

Écrire sous enveloppe à V. P.

SOCIÉTÉ D'ETHNOGRAPHIE
CONSTITUÉE PAR DEUX DÉCISIONS MINISTÉRIELLES

N. 2 7bre

Paris le 25 Aoûr 1867

Monsieur,

Vous avez eu toujours une obligeance bienveillante pour moi, et j'ai recours à vos vastes connaissances, que je me décide encore une fois à solliciter votre bonté.

On imprime en ce moment à l'Imprimerie impériale de Paris, la traduction d'un traité japonais sur les Mûriers et les Vers à soie dont j'ai été chargé par notre Ministre de l'agriculture. Cette traduction est à peu près complètement imprimée, et je me suis proposé d'y joindre comme introduction un aperçu de l'histoire de la sericiculture et de l'industrie des soies en Asie. J'ai déjà trouvé un grand nombre de renseignements intéressants, mais incomplets, et de la partie relative à l'histoire du Caucase, je n'ai pu, avec mes richesses, en faire un fait nouveau. Or j'ai pensé que vous pourriez me mettre à même de remplir une lacune regrettable dans mon travail, en m'apprenant ce qu'à cette époque la sericiculture a été introduite en Géorgie et dans la région du Caucase, ainsi que ce que vos études ont pu vous révéler sur l'histoire de la sericiculture dans ces régions. Je crois également bien nécessaire de déterminer les mots géorgiens, ou arméniens ordinaires, qui se rapportent à l'histoire sous un diverses formes, et les étymologies probables ou certaines de ces mots.

Pardonnez moi d'abuser de votre extrême bonté pour moi, mais vous m'avez habitué à recourir à une source si précieuse de renseignements pour mes études que je me hazarde encore une fois à vous importuner.

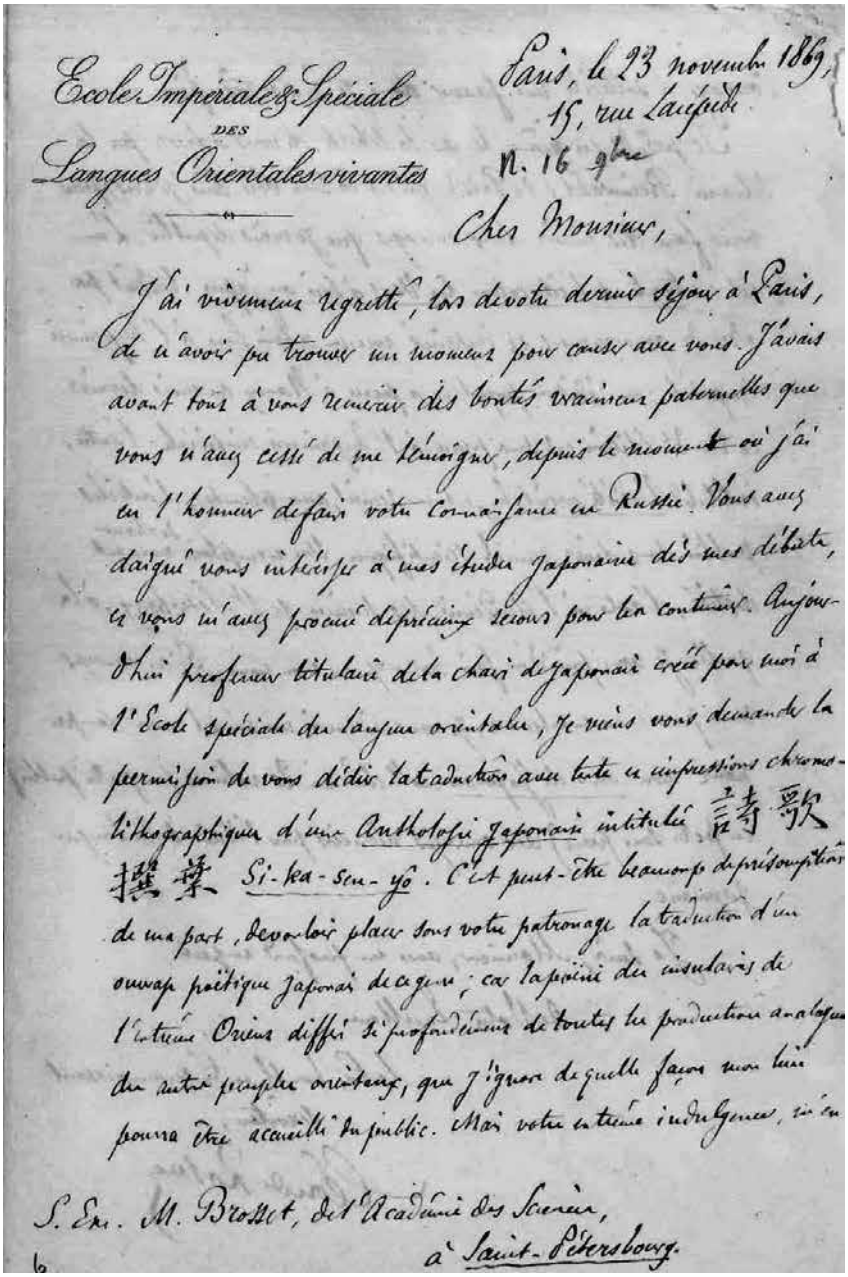
Croyez, Monsieur, à toute les sentiments d'affectueuse reconnaissance de

Votre respectueux serviteur,
Léon de Rosny

S. Exc. M. Brosset, del'Académie des Sciences, à Pétersbourg.

ロニーは養蚕についての翻訳書の刊行状況を報告しながら、「アジアにおける養蚕と養蚕業の歴史」についての序文を追加したいので、ブロッセにコーカサスにおける養蚕の導入、あるいは養蚕に関するアルメニア語とグルジア語の語彙などの情報を求めている。恐らくブロッセからのこの情報を反映して、手紙の翌年に刊行された『養蚕新説（Traité de l'éducation des vers à soie au Japon)』には、養蚕に関するグルジア語の語彙（XXXVI頁）と、コーカサスにおける養蚕の導入（XXXV頁）が説明されている。

A－⑦ 1869年11月23日付　ブロッセ宛　ロニー書簡（SRF）



Ecole Impériale & Spéciale
DES
Langues Orientales vivantes

Paris, le 23 novembre 1869,
15, rue Lacépède
N. 16 9bre

Cher Monsieur,

J'ai vivement regretté, lors de votre dernier séjour à Paris, de n'avoir pu trouver un moment pour causer avec vous. J'avais avant tout à vous remercier des bontés vraiment paternelles que vous n'avez cessé de me témoigner, depuis le moment où j'ai eu l'honneur de faire votre connaissance en Russie. Vous avez daigné vous intéresser à mes études japonaises dès mes débuts, et vous m'avez procuré de précieux secours pour les continuer. Aujourd'hui professeur titulaire de la chaire de japonais créée pour moi à l'Ecole spéciale des langues orientales, je viens vous demander la permission de vous dédier la traduction avec toute et impressions chromo-lithographiques d'une Anthologie japonaise intitulée 詩歌撰葉 Si-ka-sen-yô. C'est peut-être beaucoup de présomption de ma part, de vouloir placer sous votre patronage la traduction d'un ouvrage poétique japonais de ce genre; car la poésie des insulaires de l'extrême Orient diffère si profondément de toutes les productions analogues des autres peuples orientaux, que j'ignore de quelle façon mon livre pourra être accueilli du public. Mais votre extrême indulgence, m'en

S. Ex. M. Brosset, de l'Académie des Sciences,
à Saint-Pétersbourg.

6

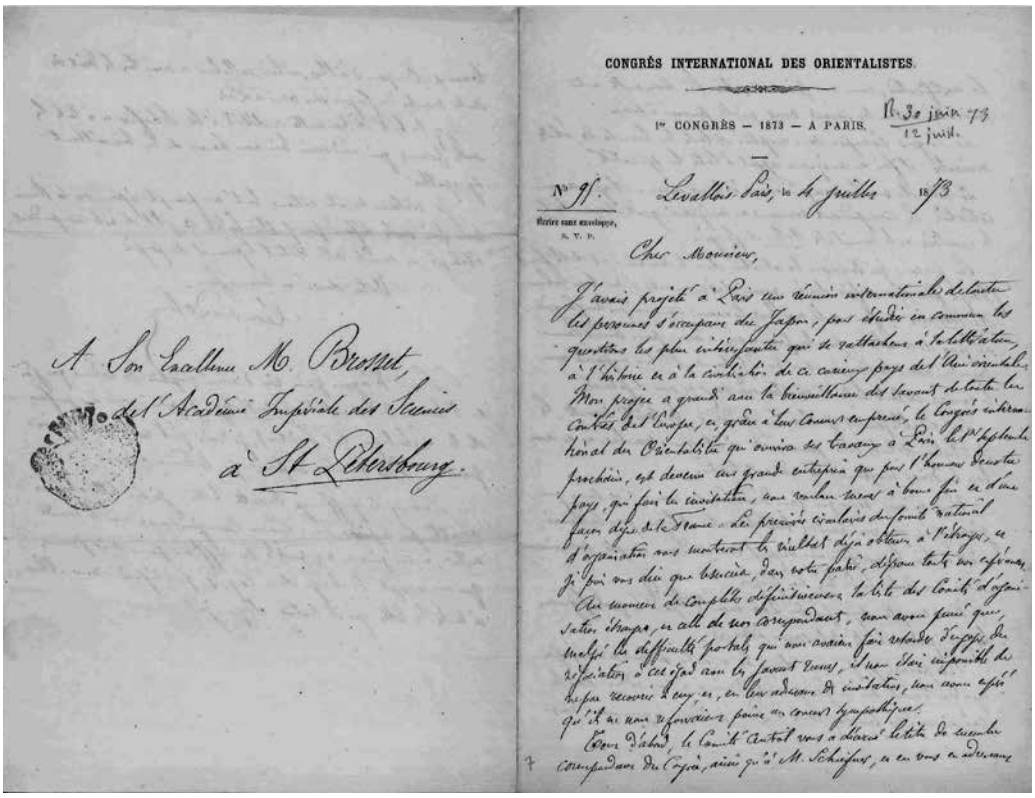
東洋語学校の用箋を使用している。ロニーが東洋語学校の日本語講義の教授になったことをブロッセに報告し、自著の『詩歌撰葉（Anthologie japonaise）』（1871）をブロッセに献辞したいと許可を求める。また、ロニーはパリのレインワルド（Reinwald）書店経由で、『養蚕新説』の高級版（王立印刷局による1868年に刊行された版）と、『東洋雑録（Variétés Orientales）』（1868）の２冊をブロッセに送るが、無事にロシアに届いたら、次回は自著の日本語教科書である『日本語講義（Cours de japonais）』（1869）も贈呈したいと書き送っている。

(Russie)

A Son Excellence
Monsieur Brosset,
membre de l'Académie des Sciences
à Saint-Pétersbourg

6

A－⑧ 1873年７月４日付　ブロッセ宛　ロニー書簡（SRF）



A Son Excellence M. Brosset,
de l'Académie Impériale des Sciences
à St Pétersbourg.

CONGRÈS INTERNATIONAL DES ORIENTALISTES.

1re CONGRÈS — 1873 — A PARIS.

R. 30 juin 73
12 juil.

N° 95.

Levallois Paris, le 4 juillet 1873

Écrire sans enveloppe, S. V. P.

Cher Monsieur,

J'avais projeté à Paris une réunion internationale de toutes les personnes s'occupant du Japon, pour étudier en commun les questions les plus intéressantes qui se rattachent à l'histoire et à la civilisation de ce curieux pays de l'Asie orientale. Mon projet a grandi avec la bienveillance des savants de toutes les contrées de l'Europe, et, grâce à leur concours empressé, le Congrès international des Orientalistes qui ouvrira ses travaux à Paris le 1er septembre prochain, est devenu une grande entreprise que pour l'honneur de notre pays, qui fait la invitation, nous voulons mener à bonne fin et d'une façon digne de la France. Les premières circulaires du comité national d'organisation vous montrent le résultat déjà obtenu à l'étranger, et je puis vous dire que beaucoup, dans votre patrie, discutent avec espérance la liste des Comités d'organisation étrangers et celle de nos correspondants, nous avons pensé que, malgré les difficultés postales qui nous avaient fait retarder d'abord la réalisation, il ne devait en rien être impossible de nous procurer à cet égard nos savants amis, et nous adresser de invitations, nous avons espéré que ils nous prêteraient pour un concours sympathique.

Tout d'abord, le Comité central vous a décerné le titre de membre correspondant du Congrès, ainsi qu'à M. Schiefner, et en vous en adressant la notification, nous vous prions de vouloir bien transmettre notre invitation à tous les savants russes qu'elle pourrait intéresser.

Le Congrès s'occupera sans exception de toutes les branches des études orientales : il fait en conséquence appel à toute la spécialité.

Le titre de membre correspondant n'entraîne aucune charge, aucune cotisation. Le correspondant recevra en conséquence gratuitement tous les circulaires et le recueil des Actes du Congrès.

Les personnes qui honoreront la réunion de leur présence et de leur finance (30 francs) une fois donné, auront droit en outre à un beau volume de Mémoires, renfermant les meilleurs travaux communiqués au Congrès. Le prix de ce volume, pour les personnes qui n'auront point voulu faire partie comme membres assez le Congrès, sera de 25 francs. Il sera imprimé avec le concours d'autant toute de savants orientaux et non orientaux.

Les établissements publics, les Académies, les sociétés savantes, les institutions d'autres toute personne qui n'est point comme membre ne en aura pas le droit à recevoir la même notification.

Vous m'avez témoigné vous d'intérêt ce matin circulaires que j'ai reçues que vous voudrez bien être votre délégué pour la France, c'est à dire le correspondant auquel nous adresser compte intéressant, de leur Actes ici de tous en projet.

Nous comptons déjà plus de 200 membres effectifs parmi les quels figurent les principales notabilités de toutes les Europes.

Nous pourrons peut-être vous demander encore d'avoir à vous adresser pour quelque travail sur la Géorgie ou l'Arménie à nos adhérents dans le cas où vous ne pourriez venir à Paris personnellement en personne à nos travaux. Un plus d'œillets, adhérés, collaborateurs et avoir tous le droit des autres membres du Congrès sans venir à Paris.

Agréez la bonté de bien mettre à détail à M. Schiefner et à toutes les autres personnes qui voudraient bien nous honorer de leur bienveillante sympathie.

Je réclame de votre extrême bonté un prompt réponse, car la Commission fait seul diffusion pour publier le texte complet de nos correspondances étrangers, je serais alors détaillé le programme du Congrès.

Votre dévoué en Orientalisme,

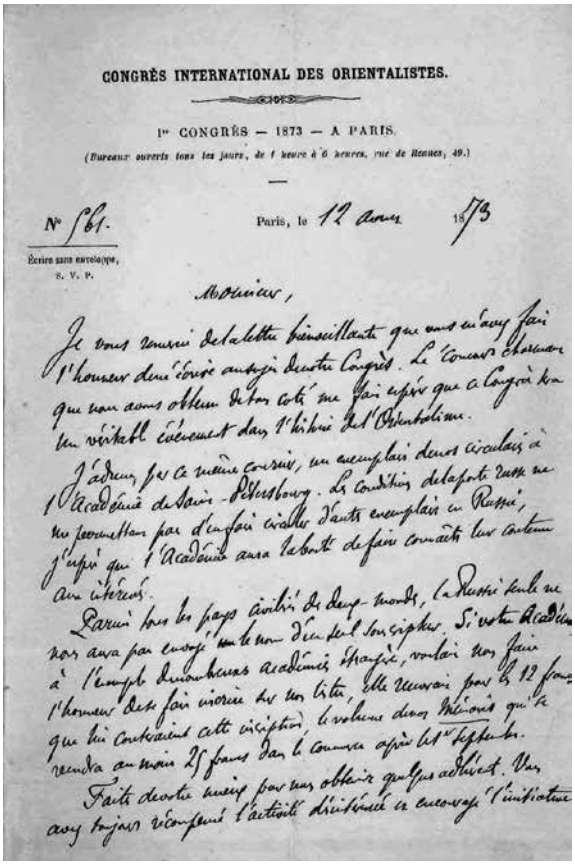
Léon de Rosny

PS — N'ayant point reçu d'avoir reçu le volume que j'ai eu l'honneur de vous dédier (Anthologie japonaise, avec une préface de M. Leboulanger, de l'Institut), je serais fort heureux que vous fussiez prévenu. Fait de vous informer par la même occasion.

Lorsque le griffonnage de cette lettre : j'ai été informé accablé par la perte d'une chère correspondance avec le monde entier, et les jours ne suffisent ne suffisent point aux personnes qui ont accepté la charge de ce Congrès, pour répondre convenablement à toutes les lettres qui m'arrivent chaque jour.

第１回国際東洋学者会議の用箋を使用している。ロニーは同年９月１日開催される第１回国際東洋学者会議について紹介する。第１回国際東洋学者会議の委員会は外国から来る学者、学院、アカデミーなどの名簿を作っているところなので、ブロッセを介して、ロシアの学者も会議に誘いたいと依頼している。また、会議の会費なども説明されている。追伸には、贈呈した『詩歌撰葉』がロシアに届いた受領通知をもらっていないので、確認をしてほしいと記している。

A－⑨ 1873年８月12日付　ブロッセ宛書簡　ロニー書簡（SRF）



CONGRÈS INTERNATIONAL DES ORIENTALISTES.

1re CONGRÈS — 1873 — A PARIS.

(Bureaux ouverts tous les jours, de 1 heure à 6 heures, rue de Rennes, 49.)

N° 561.　　Paris, le 12 aoûtre 1873

Écrire sans enveloppe, S. V. P.

Monsieur,

Je vous remercie de la lettre bienveillante que vous m'avez fait l'honneur de m'écrire au sujet du Congrès. Le concours charmant que vous avez obtenu de votre côté me fait espérer que ce Congrès sera un véritable événement dans l'histoire de l'Orientalisme.

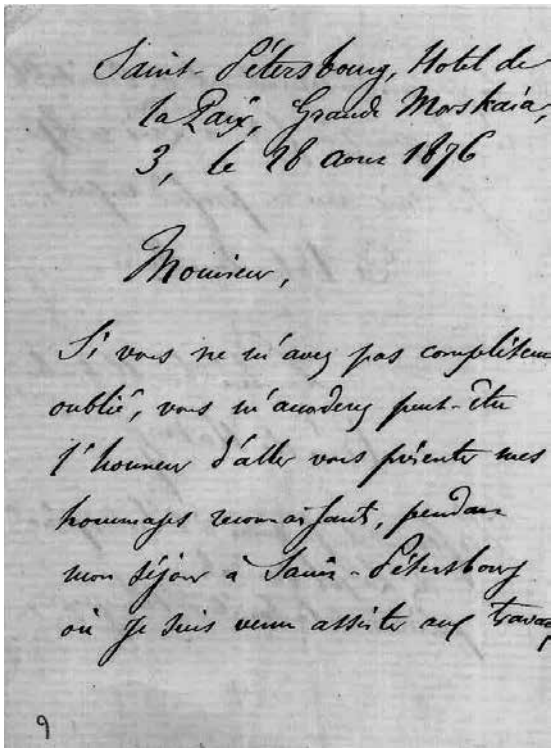
J'adresse, par ce même courrier, un exemplaire des circulaires à l'Académie de Saint-Pétersbourg. Les conditions de faveur faites aux savants en Russie, me permettent par d'un fait exceptionnel d'avoir exemplaire en Russie, j'espère que l'Académie aura l'obligeance de faire connaître leur contenu aux intéressés.

Parmi tous les pays civilisés de deux mondes, la Russie seule ne nous aura pas envoyé un seul souscripteur. Si votre Académie à l'exemple de nombreuses académies étrangères, voulait nous faire l'honneur de faire inscrire sur ses listes, elle recevrait pour les 12 francs que lui coûteraient cette inscription, les volumes dans mémoires qui se rendra au moins 25 francs dans le courrier après le 1er septembre.

Faite de votre mieux pour nous obtenir quelques adhésions. Vous avez toujours récompensé l'activité dévouée en encourageant l'initiative.

1873年7月4日日付の手紙に対してブロッセの返事が届いたので、ロニーが謝意を表する。第１回国際東洋学者会議のチラシも添付しており、同会議を科学アカデミーに伝えてほしいと依頼する。ロニーは「文明化された国々」の中から、まだロシアの学者のみ会議に登録していないので、改めてブロッセの協力を求めている。もしロシアの学者が会議に参加すれば、電車賃の割引特典（50%割引）があるなどと説明する。

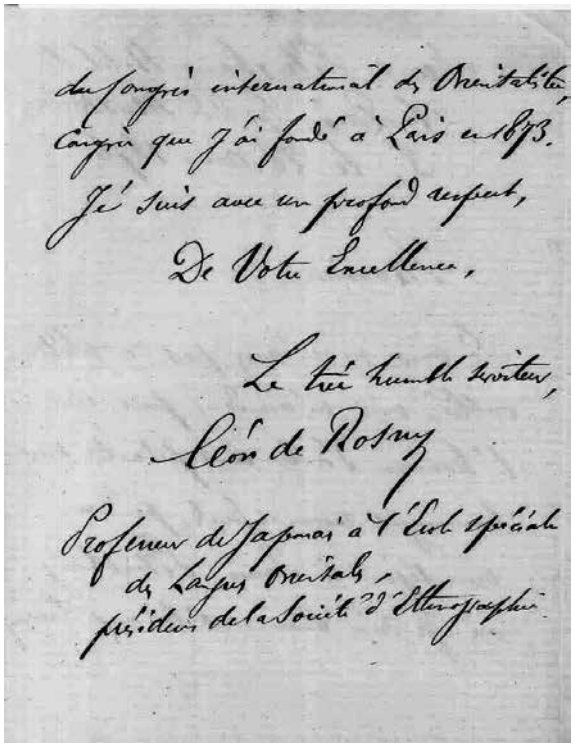
A－⑩ 1876年８月28日付　ブロッセ宛　ロニー書簡（SRF）



Saint-Pétersbourg, Hôtel de la Paix, Grande Morskaïa, 3, le 28 aoûtre 1876

Monsieur,

Si vous ne m'avez pas complètement oublié, vous m'accorderez peut-être l'honneur d'aller vous présenter mes hommages reconnaissants, pendant mon séjour à Saint-Pétersbourg où je suis venu assister aux travaux



du Congrès international des Orientalistes, Congrès que j'ai fondé à Paris en 1873.

Je suis avec un profond respect,

De Votre Excellence,

Le très humble serviteur,

Léon de Rosny

Professeur de Japonais à l'École spéciale des Langues Orientales, président de la Société d'Ethnographie.

サンクトペテルブルクのホテル・ドゥ・ラペ（Hôtel de la Paix）から送られたもの。ロニーは第３回国際東洋学者会議に参加するためサンクトペテルブルクにおり、都合が合えばブロッセに会いたいと書いている。

B レオン・ド・ロニー著作

1852年に東洋語学校に入学した同年、ロニーは初めての論文「インド半島の種々の聖文字について考察」を出版する。２年後、即ち17歳のときから『日本語研究に必要な主要な知識の概要』の著書を発表し、日本語・日本学について小冊子と、さまざまな分野の著作に関する翻訳を晩年までに次々に出版する。日本学・日本語に関するロニーの代表的な研究には、次のようなものがある。

『日本語研究入門（Introduction à l'étude de la langue japonaise）』（1856）

『日本の百科辞典ワカン・サンサイ・ヅエ〔和漢三才図絵〕（Notice ethnographique de l'encyclopédie japonaise Wakan-san-saï-dzou-yé）』（1861）

『日本文集（Recueil de textes japonais）』（1863）

『日本語会話案内（Guide de la conversation japonaise）』（1865）

『日本語講義（Cours de japonais）』（1869）

『日本語研究のための易しい、段階的な日本語作文（Thèmes faciles et gradués pour l'étude de la langue japonaise）』（1873）

『養蚕新説（De l'éducation des vers à soie au Japon）』（白川寅太郎原著の仏訳, 1868）

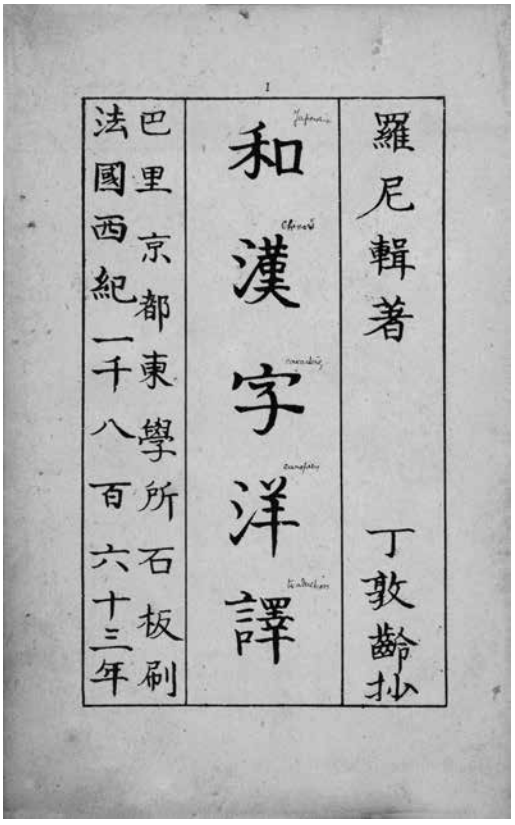
『日本詩歌－日本列島の古代、近代詩歌（Anthologie japonaise, poésies anciennes et modernes des insulaires du Nippon）』（1871）

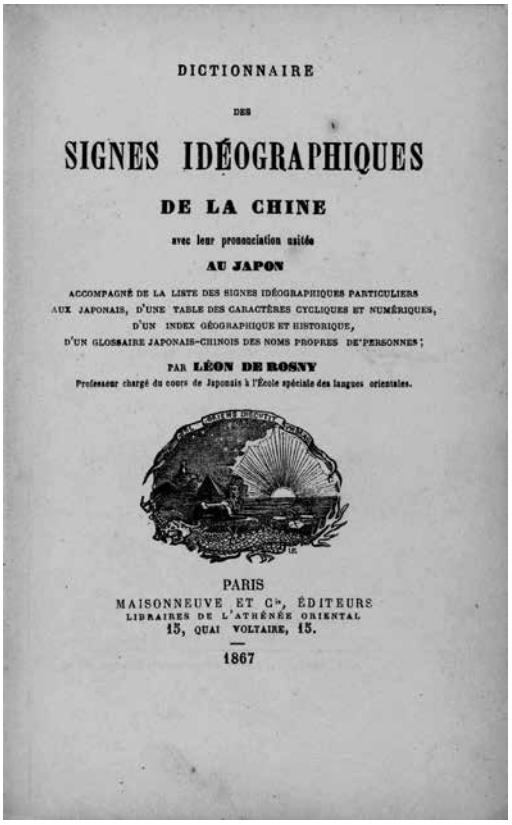
『「もみじの葉」日本人の歴史、文学、科学、芸術に関する研究（Feuilles de Momidzi; études sur l'histoire, la littérature, les sciences et les arts des Japonais）』（1901）

1852年から1904年までにロニーは著書約60点、論文約100点を発表しているが、しばしば題を変えて同じ内容のものを出すことも多い。

B－① レオン・ド・ロニー著『和漢字洋訳（Dictionnaire des signes idéographiqes de la Chine）』

1867年パリ京都東学所石印　1冊（SRF471700032）



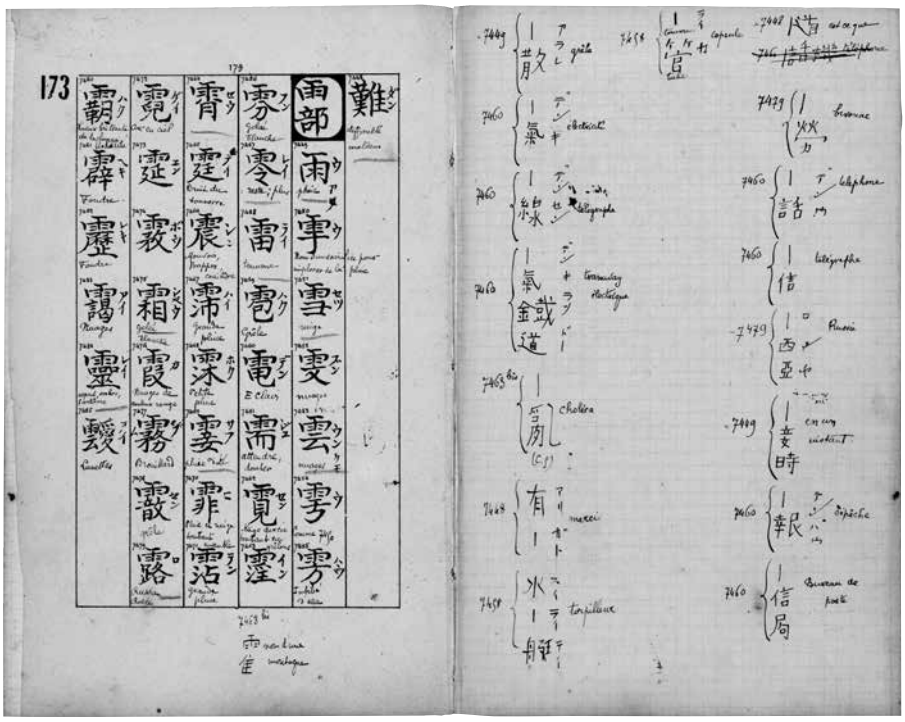


1867年パリ京都東学所石印『和漢字洋譯（Dictionnaire des signes idéographiques de la Chine）』は、1867年に刊行された石版刷の漢仏辞典である（22×13.5センチ）。表紙には漢字で「羅尼揖著　丁敦齢抄　和漢字洋譯　巳里京都　東学所　石版刷　法国西紀一千八百六十三年」と書かれている。丁敦齢という人物はマカオの司教カレー（Calley）の命によって中仏辞書編纂のためにフランスに派遣された中国人である。彼はフランスでテオフィル・ゴーティエ（Théophile Gautier, 1811-1872）に出会って、ゴーティエの娘と、フランスにおける中国針灸医学の受容に最も影響を及ぼしたジョルジュ・スリエ ・ド・モラン（George Soulié de Morant, 1878-1955）にも中国語を教えたという。ロニーはゴーティエの家を訪ねた時に丁敦齢に初めて出会い、日本語の教科書の編集の際に丁敦齢の協力を得た。

『和漢字洋訳』にはいくつかのバージョンが存在しており、ベンジャミン・デュプラ（Benjamin Duprat）出版社はロニーの辞典を2巻に分けて序文と付録が付いていないバージョンを1864年に初めて刊行し、同年は序文と付録が付いているバージョンも刊行する。1867年にメゾンヌーヴ（Maisonneuve）出版社によって『和漢字洋譯』が改めて出版される。展示品のバージョンは1867年刊行版で、仏語の序文と、「倭字」、「十干、十二支」、「地名」、「大日本年号索引」、「大数名」、「本朝通俗姓氏」などの付録があり、各頁にノート用の方眼紙を綴じ込んで製本してある珍しい学生用特別版である。

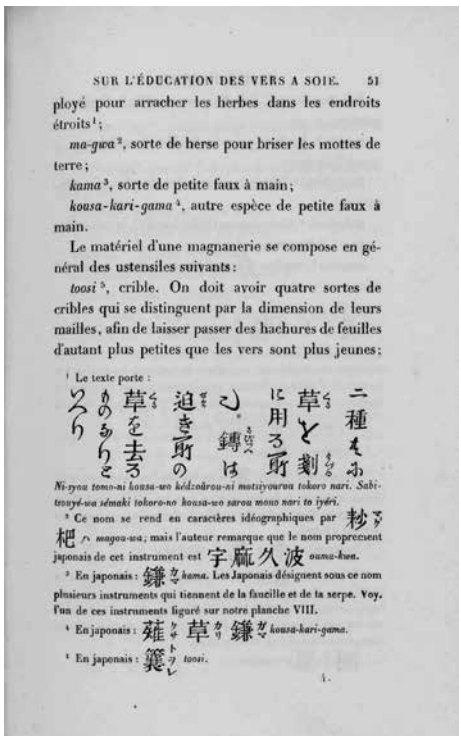
一つのページには「アンリ・リユイ（Henri Rouilly）」、「日本語講座（Cours de Japonais）」、「東洋語学院　リール通り（École des Langues orientales rue de Lille）」、「3年生（Élève de 3ème année）」と書いてあるので、この辞典の所有者は東洋語学院でロニーの日本語講座に出席した３年生だとわかる。

◀▼所有者アンリ・リユイの書入



各漢字には横に日本の通用字音をカタカナで書いてある。また、収録されている8159個の漢字のうち、最初の338個までの漢字の下にフランス語訳が印刷されているが、338個以降は所有者アンリ・リユイの手によってフランス語訳が書かれている（リユイが学んだ漢字のみ）。この二松学舎大学所蔵『和漢字洋譯』は19世紀後半のヨーロッパにおける日本語学習のプロセスを理解するための貴重な資料である。

B－② 白川寅太郎原著　レオン・ド・ロニー訳『養蚕新説（De l'éducation des vers à soie au Japon,）』1868年刊　1冊（SRF471700031）



SUR L'ÉDUCATION DES VERS A SOIE. 51

ployé pour arracher les herbes dans les endroits étroits[1];

ma-gwa[2], sorte de herse pour briser les mottes de terre;

kama[3], sorte de petite faux à main;

kousa-kari-gama[4], autre espèce de petite faux à main.

Le matériel d'une magnanerie se compose en général des ustensiles suivants:

toosi[5], crible. On doit avoir quatre sortes de cribles qui se distinguent par la dimension de leurs mailles, afin de laisser passer des hachures de feuilles d'autant plus petites que les vers sont plus jeunes;

[1] Le texte porte :

二種ともふ
草と刻る所
に用る所
ゑ
鏄は
迫き所の
草を去る
ものありと
ろり

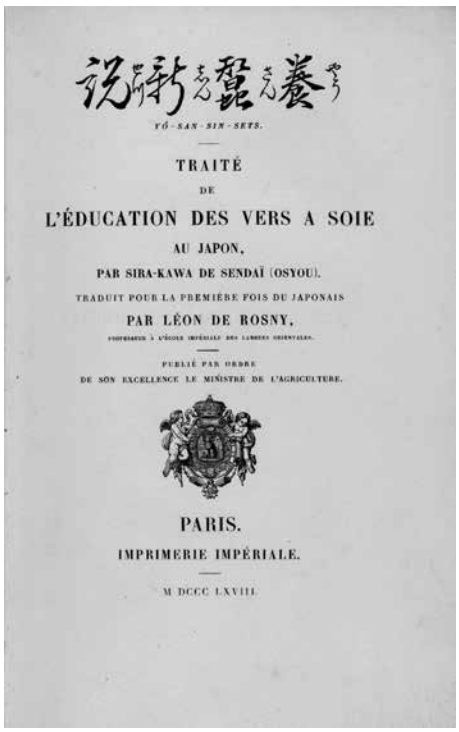
Ni-syou tomo-ni kousa-wo kédzourou-ni motiyourou tokoro nari. Sabitouyé-wa sémaki tokoro-no kousa-wo sarou mono nari to iyéri.

[2] Ce nom se rend en caractères idéographiques par 杷 *magou-wa*; mais l'auteur remarque que le nom proprement japonais de cet instrument est 秒 字 麻 久 波 *ouma-kwa.*

[3] En japonais : 鎌 *kama.* Les Japonais désignent sous ce nom plusieurs instruments qui tiennent de la faucille et de la serpe. Voy. l'un de ces instruments figuré sur notre planche VIII.

[4] En japonais : 薙 草 鎌 *kousa-kari-gama.*

[5] En japonais : 篩 *toosi.*



養蚕新説

YÔ-SAN-SIN-SETS.

TRAITÉ
DE
L'ÉDUCATION DES VERS A SOIE
AU JAPON,
PAR SIRA-KAWA DE SENDAÏ (OSYOU).
TRADUIT POUR LA PREMIÈRE FOIS DU JAPONAIS
PAR LÉON DE ROSNY,
PROFESSEUR À L'ÉCOLE IMPÉRIALE DES LANGUES ORIENTALES.

PUBLIÉ PAR ORDRE
DE SON EXCELLENCE LE MINISTRE DE L'AGRICULTURE.

PARIS.
IMPRIMERIE IMPÉRIALE.

M DCCC LXVIII.

140 RAPPORT

14.

INSCRIPTION EN CARACTÈRES ANTIQUES
DE L'ÉCRITURE APPELÉE *TCHOUEN.*

Transcription.

清田氏　請合撰

Ouké-ai drami. — Kyo-da ouzi.

« Choix garanti. — Le marchand Kyoda. »

15.

小泉　奥州　前田隆作

Yama-itsi. — Ô-syou — Ko-idzoumi. — Maé-da Ryou sakou

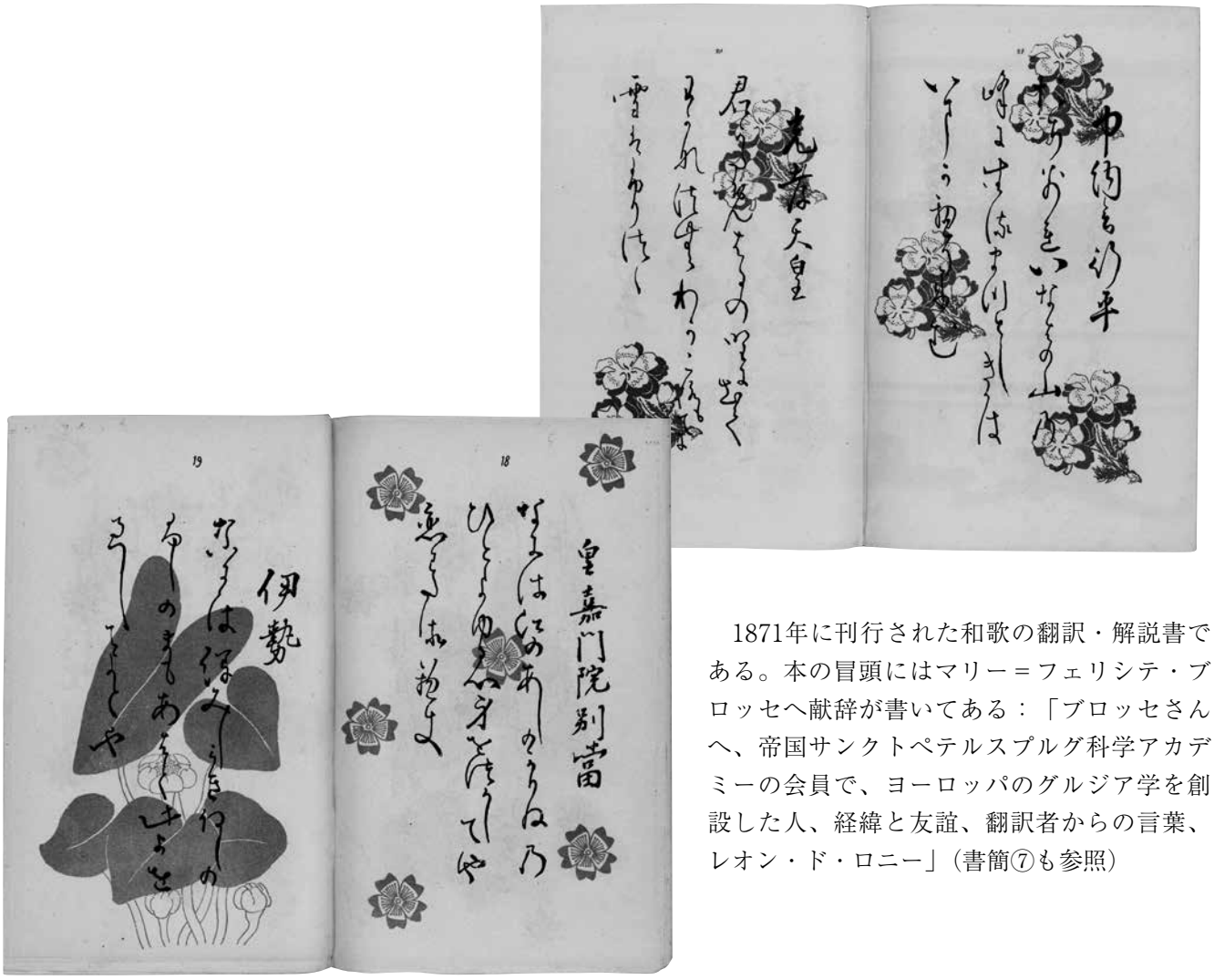
桑の葉を切る図

Pl. X

Manière de couper la feuille de mûrier.

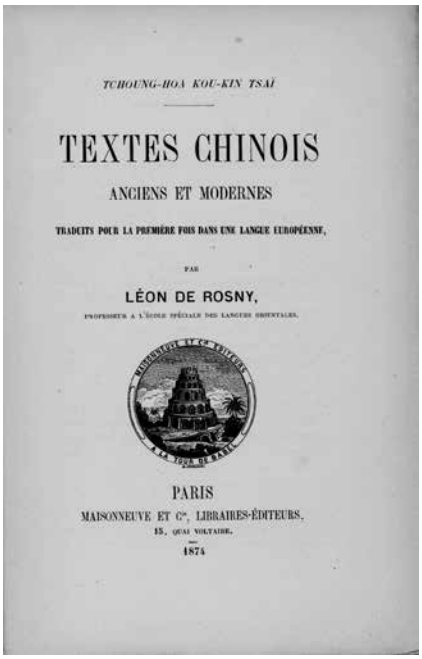
フランスの蚕業は13世紀ごろから始まるが、ドイツ人フランツ・フォン・シーボルトが持ち帰った上垣守国の『養蚕秘録』のフランス語訳は1848年に出版されたことによって、日本の養蚕技術がヨーロッパに紹介される。フランスの養蚕業の最盛期である1853 年には産繭額が 2.6 万トンに達するが、1860年ごろ、蚕病の防除は重要な課題となり、日本の養蚕業に再び注目を向けさせることになる。1866年にルイ＝ピエール・ルイエ・クールベ（Louis-Pierre Rouillé-Courbe, 1797-1883）の『日本の蚕飼育の教育に関する実践的手引き（Instruction pratique sur l'éducation des vers japonais）』が出版されて、蚕の品種と蚕の育成法など日本の養蚕が実践的に紹介される。同じ頃フランス国内の養蚕業の発展のために、フランスの農業商業省はロニーに白川寅太郎の『養蚕新説』の仏訳を要請した。『養蚕新説』の仏訳は1868年に刊行されて、標題紙にはフランス語書名が『日本に於ける蚕の飼育の説明（Traité de l'éducation des vers à soie au Japon）』と書いてある。内容は養蚕の世界史を紹介する序、『養蚕新説』の仏訳、原本と翻字（ローマ字化）、農業商業省への報告書、カラーの22図なども載せている。

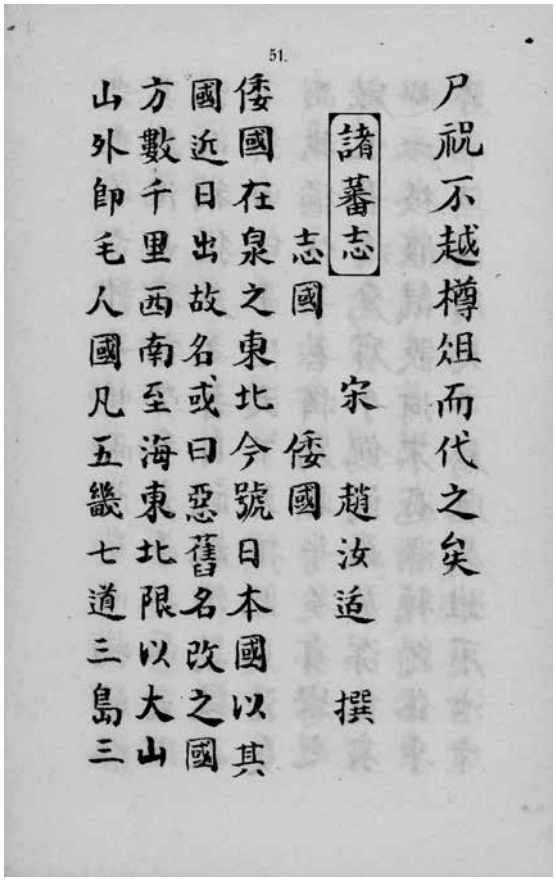
B－③ レオン・ド・ロニー訳『詩歌撰葉』(Si-Ka-Zen-Yô, Anthologie japonaise, poésies anciennes et modernes des insulaires du Nippon)』 1871年刊　1冊(SRF471700030)

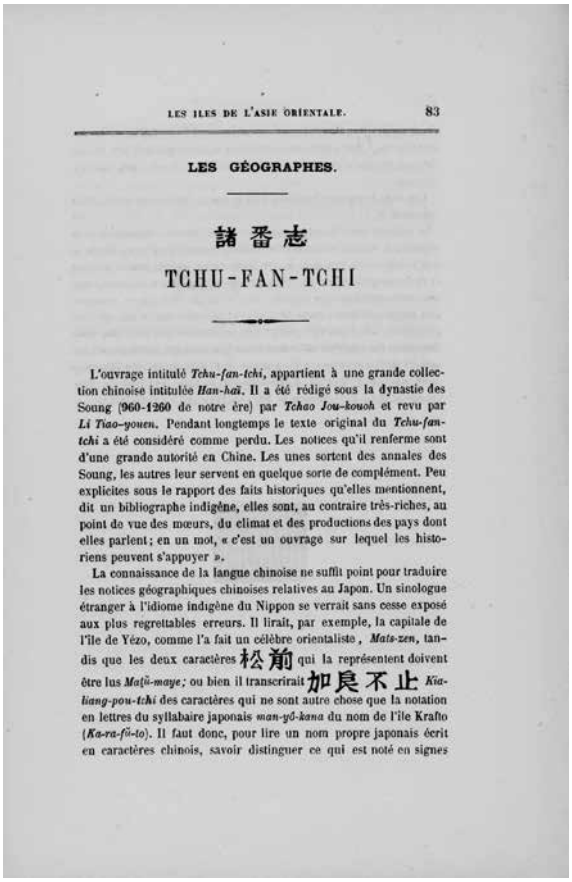


1871年に刊行された和歌の翻訳・解説書である。本の冒頭にはマリー＝フェリシテ・ブロッセへ献辞が書いてある：「ブロッセさんへ、帝国サンクトペテルスブルグ科学アカデミーの会員で、ヨーロッパのグルジア学を創設した人、経緯と友誼、翻訳者からの言葉、レオン・ド・ロニー」(書簡⑦も参照)

B－④ レオン・ド・ロニー訳『中華古今採（Tchoung-Hoa Kou-Kin Tsaï, Textes chinois anciens et modernes traduits pour la première fois dans une langue européenne）』1874年刊　1冊（SRF471700033）





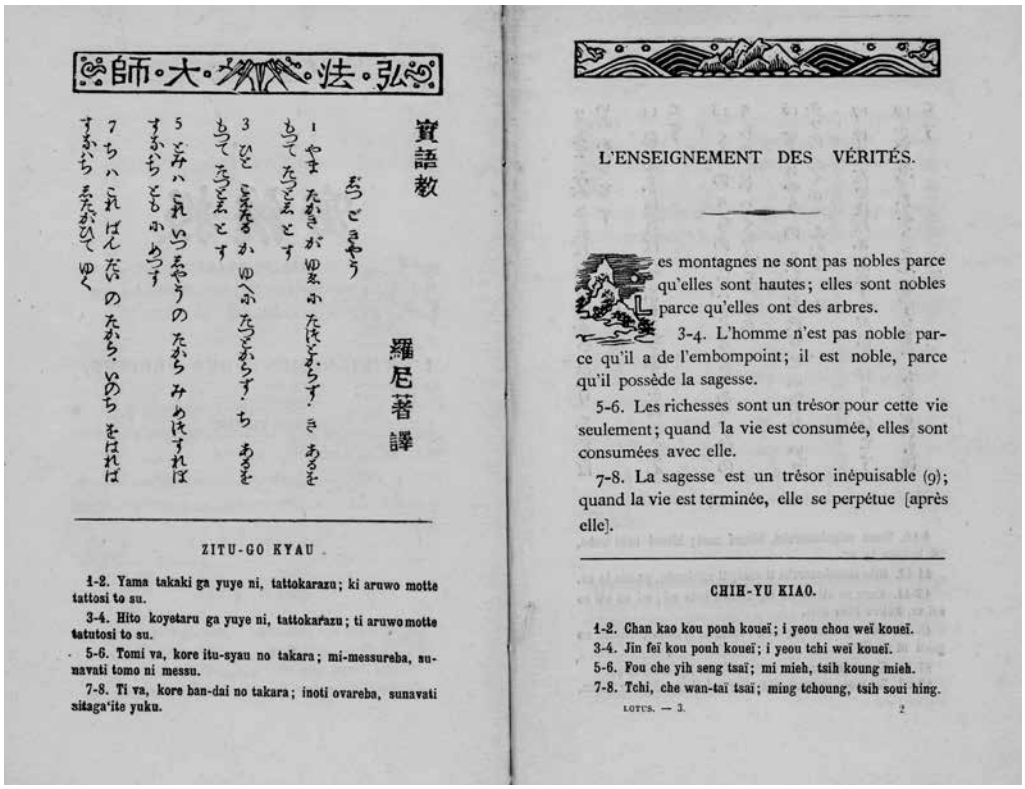


「孔子教」、「妙法蓮花経」、「仏教」、「東方島」、「諸番志」、「三才図会」など、中国のいくつかの代表的なテキストがフランス語で紹介されて翻訳されている。序文には中国語を20年間勉強したと説明し、「事前に中国語の基礎をしっかり学ばないと、日本の文学傑作の意味が理解できない」と主張する（5頁）。翻訳文の後に、石版刷によって原本のテキストも載せられている。

B－⑤ レオン・ド・ロニー訳『実語教・童子教(Zitu-go kyau, L'Enseignement des vérités et Dô-zi kyau, l'Enseignement de la Jeunesse)』1878年刊　1冊(SRF471700034)

『実語教』と『童子教』の仏訳であり、ロニーは「実語教」の著者を空海であると序文に説明している。また、この翻訳は児童教訓書というジャンルの紹介でありながら、日本の思想の変遷のイントロダクションでもある。

以下は左に本文の書き下し文（左上）と翻字（ローマ字化、左下）、右にフランス語訳（右上）と、翻字（拼音化、右下）。



C クラプロート書簡

ユリウス・ハインリヒ・クラプロート（Julius Heinrich Klaproth, 1783－1835）は、ドイツに生まれ、フランスで活躍した東洋学者。文献学、 歴史学、地理学の専門家でもある。14歳ごろ、ベルリンの王立図書館に所蔵されていた中国書籍に興味を持ち、独学で中国語を勉強し始める。1802年に『アジア雑誌（Asiatisches Magazin）』を刊行し、東洋学者の注目を引く。1804年はポーランドの貴族ポトツキ伯爵の知遇を得、サンクスペテルブルク科学アカデミーに招かれて、当アカデミーの会員になり、東洋語の教授に任じられる。翌年、アムール川の航行権の交渉のためロシアが使節団を清国に派遣する際に、クラプロートが随行学術隊員としてポトツキ伯爵に招かれる。使節団が5ヶ月間イルクーツク（Irkutsk）に滞在する間に、クラプロートはロシアに漂着した新蔵（ニコライ・コロトゥイギン、1758-1810）から日本語の手ほどきを受け、また大量の中国語・蒙古語・満州語の本と、若干の日本語の本を入手する。1807年にはロシアのコーカサス探検隊にも随行し、そこでの調査結果を後年いくつかの著書に報告する。1815年にパリに移り、当初はアベル・レミュザと同居した。1835年に世を去るまでパリで活躍をした。

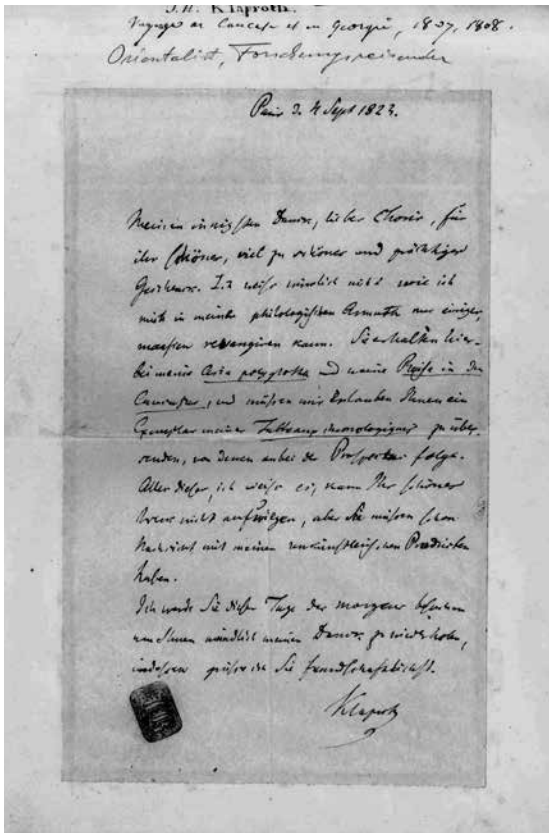
主な著作は次のようなものがある：

『1807・08年のコーカサス及びグルジア旅行（Reise in den Kaukasus und Georgien in den Jahren 1807 und 1808）』（1812–1814, 独文. 1814年英訳, 1823年仏訳）
『東コーカサスの歴史と地理（Geographisch und historische Beschreibung des östlichen Kaukasus）』（1814, 独文. 1827年仏訳）
『紙幣の起源（Origin of paper-money）』（1823, 英文）
『アジア歴史地図（Tableaux historiques de l'Asie）』（1823, 仏文）
『アジア・ポリグロッタ（Asia polyglottal）』（1823, 仏文. 1829年独訳）
『アジア論集（Mémoires relatifs à l'Asie）』（1826-1828, 仏文）
『グルジア語彙と文法（Vocabulaire et grammaire de la langue géorgienne）』（1827, 仏文）
『満文選（Chrestomathie mandchou）』（1828, 仏文）
『日本王代一覧（Annales des empereurs du Japon）』（1834, 仏文）

＊＊＊

二松学舎大学が所蔵するクラプロート自筆書簡は22通あり、21通はフランス語で、１通はドイツ語で書かれている。22通のうち、11通の受信者がわかる。その中の６通がアントワーヌ＝ジャン・サンマルタン（Antoine-Jean Saint-Martin, 1792-1832）へ送られた。サンマルタンはアルメニア学の専門家であり、クラプロートとともに「アジア協会」の創設メンバーで、1832年コレラで急逝するまで機関誌の編者を勤めている。これ以外の書簡は、『人名大事典』（Biographie Universelle, 1811-62）を編集し、出版した作家・歴史家のルイ＝ガブリエル・ミショー（Louis Gabriel Michaud, 1773-1858）、ドイツの画家、探検家であるルイ・ホリス（Louis Choris, 1795-1828）、植字工、言語学者であるジャン＝ジョゼフ・マルセル（Jean-Joseph Marcel, 1776-1854）などへ送られたものである。また、1832年８月10日付の書簡は受信者の名前が書かれていないが、内容から判断してフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトと思われる。書簡の主な内容は書籍の貸借、雑誌への寄稿、活字の製作などである。

C－① 1823年９月４日付　ルイ・ホリス宛　クラプロート書簡（SRF）


J. H. Klaproth.
Voyages au Caucase et en Georgie, 1807, 1808.
Orientalist, Forschungsreisender

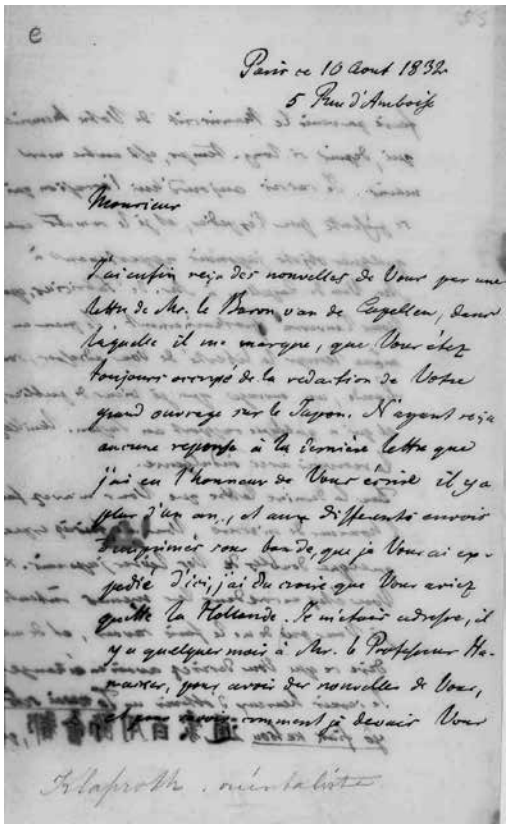
Paris 2. 4 Sept 1823.

Meinen innigsten Dank, lieber Choris, für
Ihr schönes, viel zu schönes und prächtiges
Geschenk. Ich weiß wirklich nicht wie ich
mich in meinen philologischen Armuth nur einiger
massen revangiren kann. Sie haben hier
bei meine Asia polyglotta und meine Reise in den
Caucasus, und müssen mir erlauben Ihnen ein
Exemplar meiner Tabellen chronologiques publiciren,
von denen anbei der Prospectus folgt.
Aller dieser, ich weiß es, kann Ihr schönes
Werk nicht aufwägen, aber sie müssen Ihnen
Nachricht mit meinen unverfälschten Freundschaft
haben.
Ich werde Sie diese Tage des morgens besuchen
um Ihnen persönlich meinen Dank zu wiederholen,
indessen grüße ich Sie freundschaftlichst.
Klaproth

ドイツ語で書かれている。ドイツの画家と探検家であるルイ・ホリス（Louis Choris, 1795-1828）から贈られた物に対する礼状である。ホリスへの返礼として、自著『1807・08年のコーカサス及びグルジア旅行（Reise in den Kaukasus und nach Georgien in den Jahren 1807 und 1808）』（1812）、『アジア・ポリグロッタ（Asia polyglotta）』（1823）と、『アジア歴史地図（Les tableaux historiques de l'Asie）』（1826）を送っている。

C－② 1832年８月10日付　〔シーボルト〕宛クラプロート書簡（SRF）

受信者の名前が書かれていないが、フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトであると思われる。クラプロートはファン・デル・カペレン（Le Baron van de Capellan, 前蘭領東インド総督）からシーボルトが日本に関する大著の準備で余裕がないと聞いた。またクラプロートはシーボルトへ１年以上前に手紙と刊行物を送ったが何も返事がなかったから、既にオランダを去ったのではないか訊ねている。クラプロートが預かっているシーボルトの原稿を返送し、併せてファン・デル・カペレンとファブリカス（Fabricius？）が所有する日本に関する資料と、自著の論文を送る。続けて、クラプロートは以前シーボルトとの交信を通じて何冊か日本の書物を譲ってもらうという話があったが、『都会節用百家通』も頂きたいと伝え、日本の神話史に関する論文がすでに刊行されたこと、現在印刷中の『日本王代一覧』も年末までに刊行できることを報告する。さらに日本人の起源に関する論文も刊行して送るつもりだと伝える。

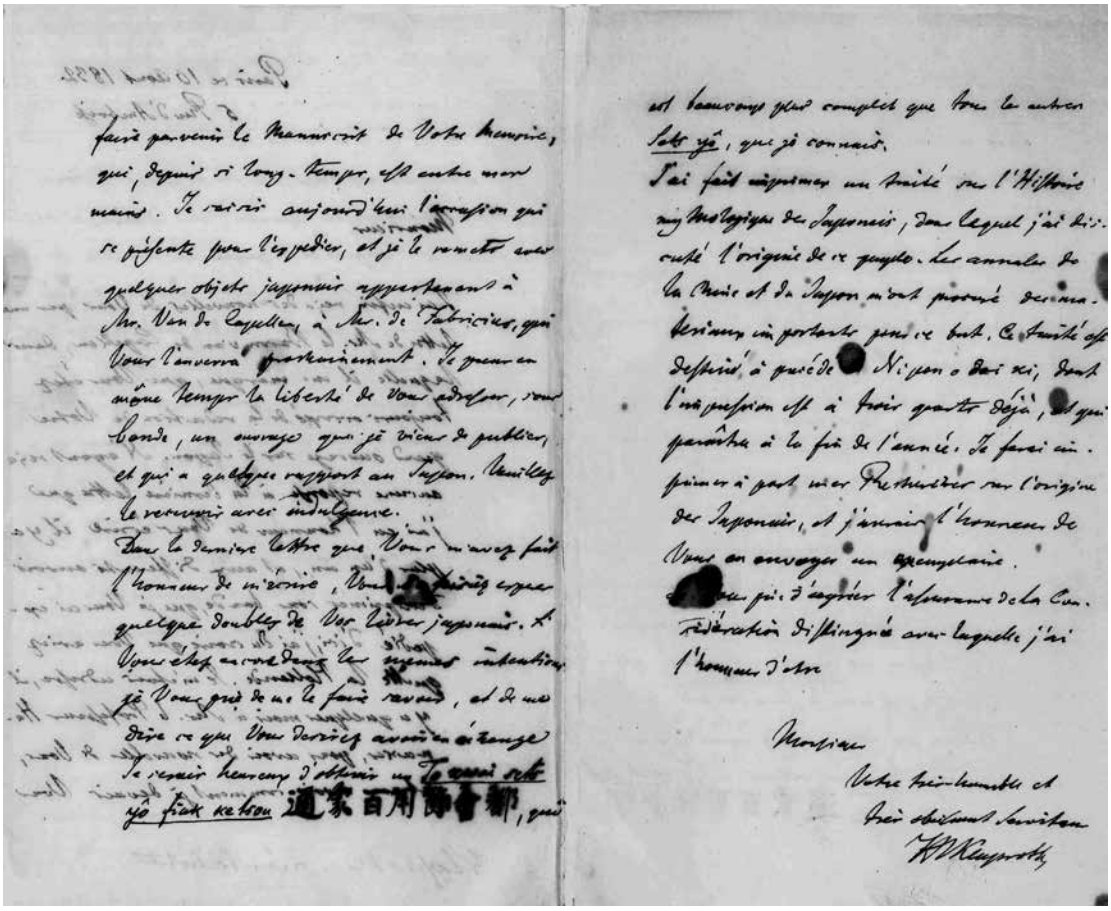

e

Paris ce 10 Août 1832.
5 Rue d'Amboise

Monsieur

J'ai enfin reçu des nouvelles de Vous par une
lettre de Mr. le Baron van de Capellen, dans
laquelle il me marque, que Vous êtes
toujours occupé de la rédaction de Votre
grand ouvrage sur le Japon. N'ayant reçu
aucune réponse à la dernière lettre que
j'ai eu l'honneur de Vous écrire il y a
plus d'un an, et aux différents envois
d'imprimés sous bande, que je Vous ai ex-
pédié d'ici, j'ai du croire que Vous aviez
quitté la Hollande. Je m'étois adressé, il
y a quelques mois à Mr. le Professeur He-
mmer, pour avoir des nouvelles de Vous,
[illegible] comment je devais Vous
Klaproth. orientaliste

C-②つづき



faire parvenir le Manuscrit de Votre Mémoire, qui, depuis si long-temps, est entre mes mains. Je saisis aujourd'hui l'occasion qui se présente pour l'expédier, et je le remets avec quelques objets japonais appartenant à Mr. Van de Capellen, à Mr. de Fabricius, qui Vous l'enverra prochainement. Je prends en même temps la liberté de Vous adresser, sous bande, un ouvrage que je viens de publier, et qui a quelque rapport au Japon. Veuillez le recevoir avec indulgence.

Dans la dernière lettre que Vous m'avez fait l'honneur de m'écrire, Vous [illegible] espérez quelque doublets de Vos livres japonais. Si Vous êtes encore dans les mêmes intentions, je Vous prie de me le faire savoir, et de me dire ce que Vous devriez avoir en échange. Je serais heureux d'obtenir un 五倫書 yo fiak ke tsou 通家百用 [illegible], qui est beaucoup plus complet que tous les autres Sotz yé, que je connais.

J'ai fait imprimer un traité sur l'Histoire mythologique des Japonais, dans lequel j'ai discuté l'origine de ce peuple. Les annales de la Chine et du Japon m'ont procuré des renseignements importants pour ce but. Ce traité est dessiné à précéder le Nipon o dai ki, dont l'impression est à trois quarts déjà, et qui paraîtra à la fin de l'année. Je ferai imprimer à part un Prospectus sur l'origine des Japonais, et j'aurais l'honneur de Vous en envoyer un exemplaire.

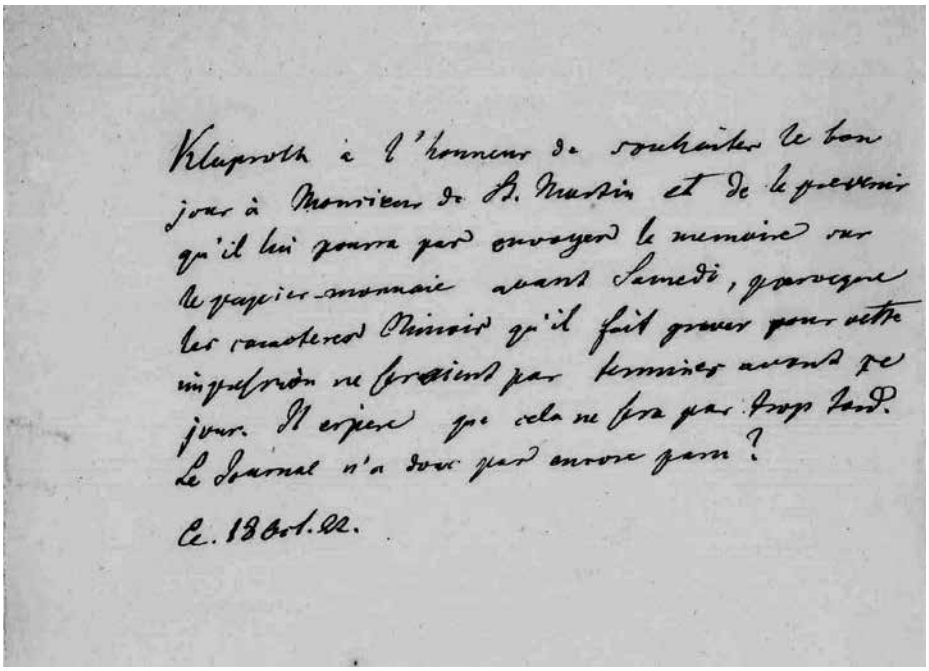
[illegible] prie d'agréer l'assurance de la Considération distinguée avec laquelle j'ai l'honneur d'être

Monsieur

Votre très-humble et très obéissant serviteur

H. Klaproth

C－③ 1822年10月18日付 アントワーヌ＝ジャン・サンマルタン宛 クラプロート書簡（SRF）

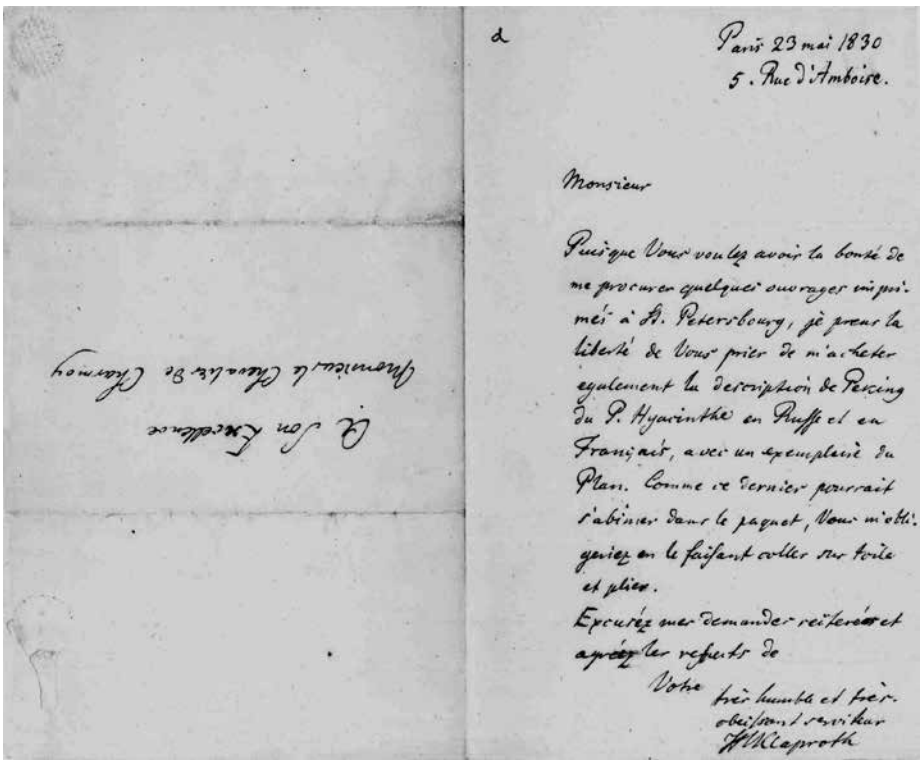


Klaproth a l'honneur de souhaiter le bon jour à Monsieur de St. Martin et de le prévenir qu'il lui pourra pas envoyer le memoire sur le papier-monnaie avant Samedi, parceque les caractères Chinois qu'il fait graver pour cette impression ne seront pas terminés avant ce jour. Il espère que cela ne fera pas trop tard. Le Journal n'a pour pas encore paru?

Ce. 18 Oct. 22.

アントワーヌ＝ジャン・サンマルタンへ送られた書簡。クラプロートは印刷するため中国の活字を彫刻する作業が終わっていないので、土曜日までに紙幣についての論文をサンマルタンに送ることができないと報告している。

C－④ 1830年５月23日付 フランソワ・ベルナール・シャルモワ宛 クラプロート書簡（SRF）



Paris 23 mai 1830
5. Rue d'Amboise.

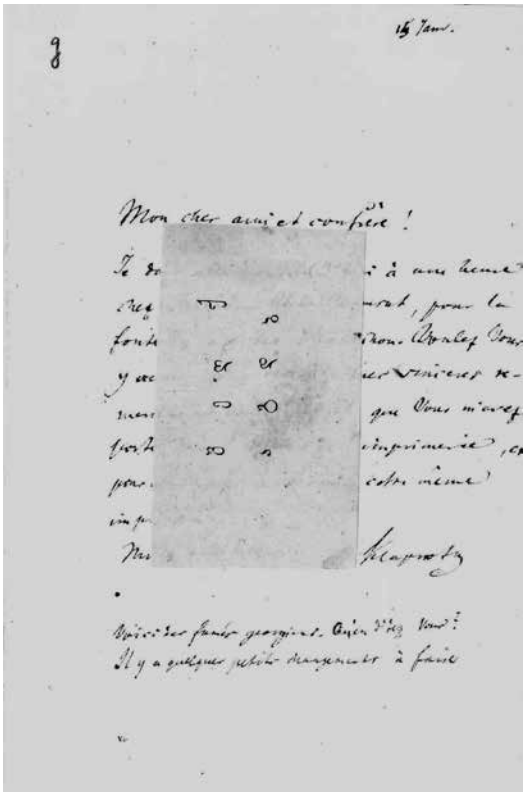
Monsieur

Puisque Vous voulez avoir la bonté de me procurer quelques ouvrages imprimés à St. Petersbourg, je prens la liberté de Vous prier de m'acheter egalement la description de Peking du P. Hyacinthe en Russe et en Français, avec un exemplaire du Plan. Comme ce dernier pourrait s'abîmer dans le paquet, Vous m'obligeriez en le faisant coller sur toile et plier.

Excusez mes demandes reiterées et agréez les respects de

Votre très humble et très obeissant serviteur
H. Klaproth

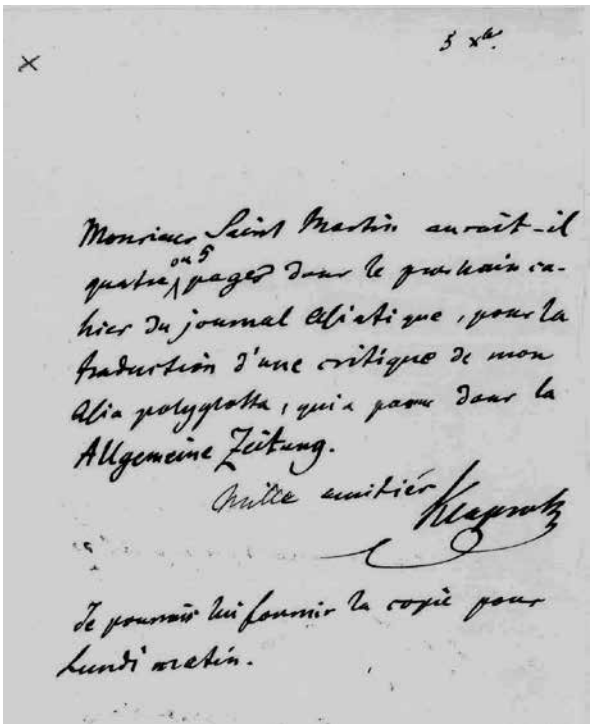
東洋学者のフランソワ・ベルナール・シャルモワ（François Bernard Charmoy, 1793-1869）へ送られた書簡。クラプロートはイアキソフ・ビチューリン（Hyacinth Bichurin）の地図を付録した『北京誌（Description de Péking)』のロシア語版と、フランス語版をサンクトペテルブルクでシャルモワに購入して送ってほしい。しかし地図は破損するおそれがあるので、裏打ちして折り畳んだ上で発送するように指示している。



C－⑤ １月15日付 クラプロート書簡（SRF）

年は不明で、受信者の名前も書かれていない。１ページ目に、グルジア語の文字（８字）が書かれている小さい紙が貼ってある。書簡の内容は、クラプロートが満州語の活字の鋳造のために当日午後１時にアベル・レミュザの家に行くが、受信者が印刷局について興味を見せていたので、一緒にレミュザの家に行った後に印刷局にも行かないかと誘っている。手紙に貼られている紙はグルジア語の字の試し刷りであるが、受信者の意見を求めており、クラプロートは少し訂正が必要だろうと考えているようである。

C－⑥　12月５日付　アントワーヌ＝ジャン・サンマルタン宛 クラプロート書簡（SRF）


5 xbre.

Monsieur Saint Martin aurait-il quatre ou 5 pages dans le prochain cahier du journal Asiatique, pour la traduction d'une critique de mon Asia polyglotta, qui a paru dans la Allgemeine Zeitung.

Votre amitié Klaproth

Je pourrais lui fournir la copie pour lundi matin.

年は不明。アントワーヌ＝ジャン・サンマルタンへ送られた書簡。クラプロートは『アルゲマイネ・ツァイトゥング（Allgemeine Zeitung）』に出版された自作の『アジア・ポリグロッタ（Asia Polyglotta）』の書評を翻訳し、その翻訳文を次回の『アジア協会機関誌（Journal Asiatique）』に載せたいので、サンマルタンに４～５ページの余裕があるかどうかを聞いている。追伸に月曜日の朝に論文のコピーも渡せると記述されている。

その他のクラプロート書簡のリストと概要

⑦1816年5月16日付　ルイ＝ガブリエル・ミショー（Louis Gabriel Michaud, 1773-1858）宛
『人名大事典（Biographie Universelle）』（1811-62）の項目について。ルイ＝ガブリエル・ミショーは作家、歴史家、ブックセラーであり、『人名大事典』を編集し、出版した。『人名大事典』にはアベル・レミュザの手になるアジア関係の項目が多いが、アルファベット「T」以降は殆どクラプロートが執筆したものである。

⑧1820年５月12日付　アントワーヌ＝ジャン・サンマルタン宛。ロシア語のグルジア地図の返却について。

⑨1823年３月17日付　受信者の名前が書かれていない。「タルクの銘刻（Inscription de Tarkou）」について。

⑩1823年６月２日付　受信者の名前が書かれていない。グルジア語活字の鋳造について。

⑪1823年10月９日付　受信者の名前が書かれていない。『アジア学雑誌（Asiatic Journal）』の貸出と、「中国への使節（Les Ambassades en Chine）」の印刷のためにプロスパー・ドンデ・デュプレ（Prosper Dondey Dupré）に活字の郵送。プロスパー・ドンデ・デュプレ（1794-1834）は印刷家、東洋語の専門家、アジア協会のメンバーであり、東洋語を専門とする出版社を設立した。私企業としてフランスでは初めてである。

⑫1824年６月26日付　受信者の名前が書かれていない。アルスナル図書館（Bibliothèque de l'Arsenal）から借りた『アナミティク辞典（Dictionnaire Anamitique)』の郵送、マルティノ・マルティニ（Martin Martini, 1614-1661）の『中国地図帳（Atlas Sinensis)』の貸出などについて。

⑬1824年７月７日付　受信者の名前が書かれていない。マルティノ・マルティニの『中国地図帳』の貸出などについて。

⑭1824年９月付　受信者の名前が書かれていない。「ノヴゴロドの門（Les portes de Nowgorod)」について。

⑮1827年１月26日付　ジャン＝ジョゼフ・マルセル（Jean-Joseph Marcel, 1776-1854）宛。コプト語新約聖書の購入、ピエリオ・ヴァレリアーノ（Pierio Valeriano）の『ヒエログリフィカ（Pierii Hieroglyphica)』（1556年）の貸出について。ジャン＝ジョゼフ・マルセルは植字工、技師、言語学者である。ナポレオンのエジプト遠征に随行し、ロゼッタ・ストーンを調査した最初の研究者の一人である。

⑯1829年８月31日付　受信者の名前が書かれていない。ジョージアのイメレティ州の地図について。

⑰３月25日付　受信者の名前が書かれていない。送られた雑誌の一枚の返送、ロシア語の文献の目録の貸出について。

⑱６月３日付　アントワーヌ＝ジャン・サンマルタン宛。ドイツ語で刊行されたクラプロートの『東コーカサスの歴史と地理』の郵送について。

⑲７月24日付　受信者の名前が書かれていない。サンクトペテルブルグからフラエン氏（Monsieur Fraehn）から手紙の受領などについて。

⑳10月８日付　アントワーヌ＝ジャン・サンマルタン宛。バルック（Barque？）の返却と、「Mayren Armenien」という単語の意味について。

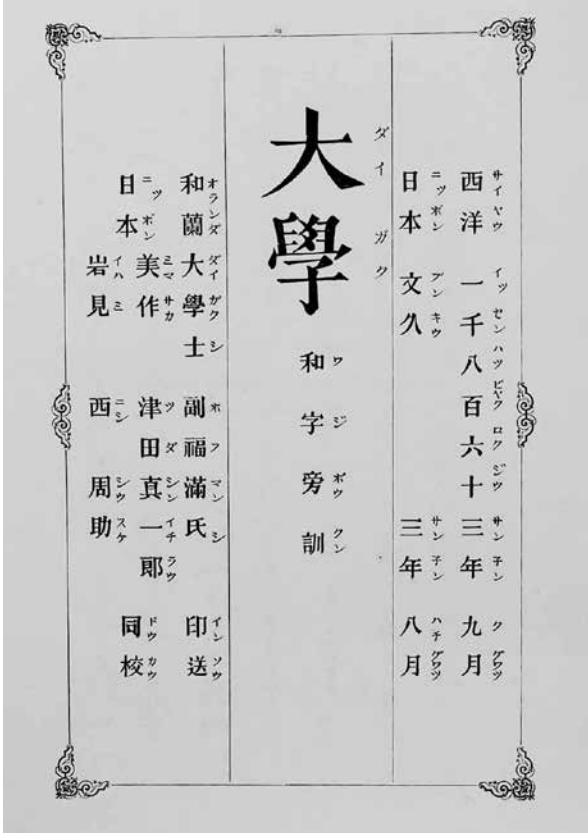
㉑12月８日付　アントワーヌ＝ジャン・サンマルタン宛。『アルゲマイネ・ツァイトゥング(Allgemeine Zeitung)』の記事の郵送、『ロンドンのアジア協会雑誌（Journal Asiatique de Londres)』12月号の貸出について。

㉒日付と受信者の名前が書かれていない。キルヒャー（Kircher）のコプト語の辞書の貸出、雑誌（『アジア協会機関誌』？）の値段などについて。アタナシウス・キルヒャー（Athanasius Kircher, 1601-1680）は17世紀のドイツ出身の学者、イエズス会司祭。ヒエログリフの科学的研究と読解に取り組んだパイオニアとしても有名である。

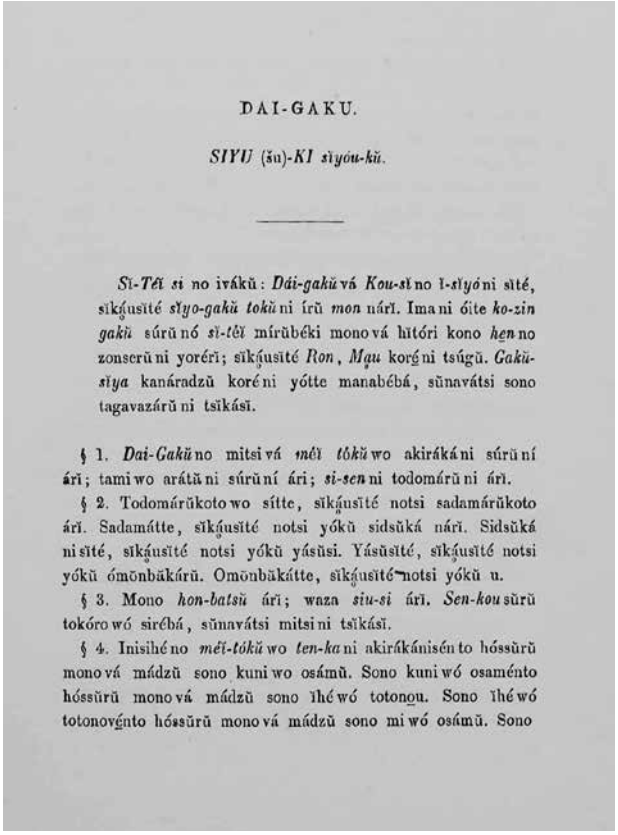
D 欧州刊行漢籍類

D－① 蘭・ヨハン・ヨーゼフ・ホフマン編　津田真一郎・西周助同校『大学和字旁訓』

1864年　ライデン刊　1冊（SRF471800050）



ヨハン・ヨーゼフ・ホフマン（Johann Joseph Hoffmann、1805-1878）はドイツ・ヴュルツブルクに生まれ、ヴュルツブルク大学で文献学を学んだのち、オランダでフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（Philipp Franz Balthasar von Siebold、1796-1866）に出会い、以後、シーボルトの助手、協力者となり、東洋学、日本語学の研究者として活躍した。1868年にはその研究をまとめ『日本語文典（Japansche Spraakleer）』を出版したほか、日本語研究の著作には『日本研究』『日本書誌』（シーボルトと共著）などがあり、その研究はロニーの師ジュリアンらから注目された。展示品は、ホフマンが、当時日本から留学していた津田真一郎（真道、1829-1903）、と西周（周助、1829-1897）の協力を得て出版したもので、朱熹章句『大学』に返点を付し、書き下しを片仮名で傍訓にした漢文部と、その訓読をローマ字表記したローマ字部の２部構成となっている。ホフマンは、1855年にライデン大学の初代日本学教授となり、津田真道、西周は1862年（文久2）にライデンに留学し、ホフマンやシモン・フィッセリングからその教授を受けた。



DAI-GAKU.

SIYU (šu)-*KI sĭyóu-kŭ.*

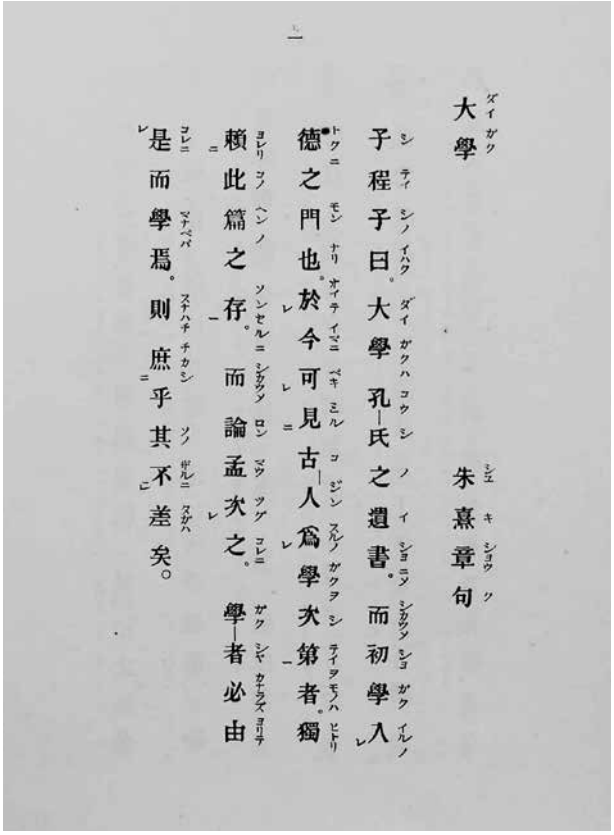
Sĭ-Téĭ si no ivákŭ: *Dái-gakŭ* vá *Kou-sĭ* no ĭ-*sĭyó* ni sĭté, sĭkáusĭté *sĭyo-gakŭ tokŭ* ni írŭ *mon* nárĭ. Ima ni óite *ko-zin gakŭ* súrŭ nó *sĭ-téĭ* mírŭbéki mono vá hĭtóri kono *hen* no zonserŭ ni yoréri; sĭkáusĭté *Ron*, *Mau* koré ni tsúgŭ. *Gakŭ-sĭya* kanáradzŭ koré ni yótte manabébá, sŭnavátsi sono tagavazárŭ ni tsĭkásĭ.

§ 1. *Dai-Gakŭ* no mitsi vá *méĭ tókŭ* wo akirákáni súrŭ ní árĭ; tami wo arátŭ ni súrŭ ní ári; *si-sen* ni todomárŭ ni árĭ.

§ 2. Todomárŭkoto wo sítte, sĭkáusĭté notsi sadamárŭkoto árĭ. Sadamátte, sĭkáusĭté notsi yókŭ sidsŭká nárĭ. Sidsŭká ni sĭté, sĭkáusĭté notsi yókŭ yásŭsi. Yásŭsĭté, sĭkáusĭté notsi yókŭ ómōnbăkárŭ. Omōnbăkátte, sĭkáusĭté notsi yókŭ u.

§ 3. Mono *hon-batsŭ* árĭ; waza *siu-si* árĭ. *Sen-kou* sŭrŭ tokóro wó sirébá, sŭnavátsi mitsi ni tsĭkásĭ.

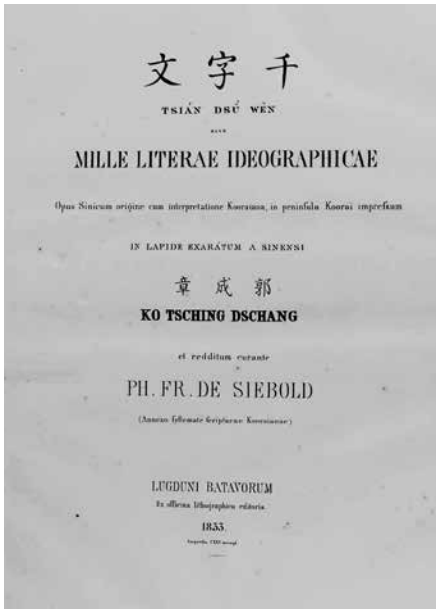
§ 4. Inisihé no *méĭ-tókŭ* wo *ten-ka* ni akirákánisén to hóssŭrŭ mono vá mádzŭ sono kuni wo osámŭ. Sono kuni wó osaménto hóssŭrŭ mono vá mádzŭ sono ĭhé wó totonou. Sono ĭhé wó totonovénto hóssŭrŭ mono vá mádzŭ sono mi wó osámŭ. Sono



大學　朱熹章句

子程子曰。大學孔氏之遺書。而初學入德之門也。於今可見古人爲學次第者。獨賴此篇之存。而論孟次之。學者必由是而學焉。則庶乎其不差矣。

D－② 梁・周興嗣撰『千字文（Tsian dsü wen）』　1840年ライデン刊　1冊（SRF471800048）



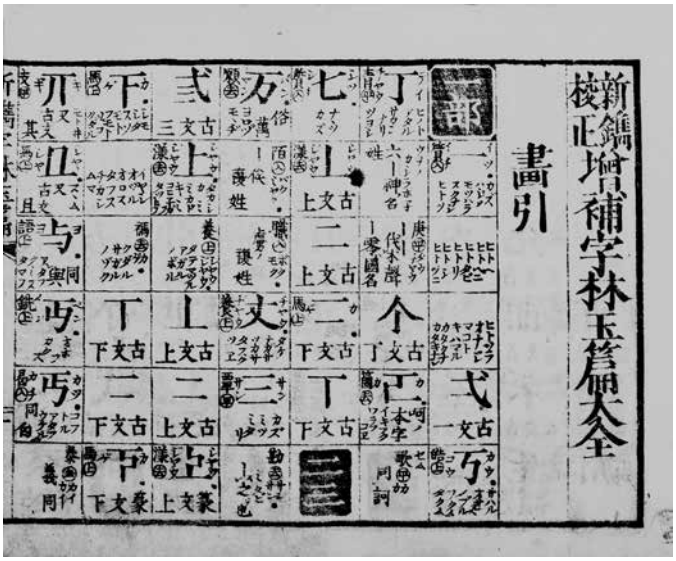
『千字文』は、初学者を対象とする書道の手本、また漢字習得用の教材で、南朝・梁の武帝が文官の周興嗣に作らせたものである。周興嗣は、能書家として知られる東晋の王羲之の真蹟から１字の重複もなく1,000字を選び、「天地玄黄　宇宙洪荒」からはじまり「謂語助者　焉哉乎也」で終わる四字句計250句の韻文とした。その内容は天文、地理、政治、経済、社会、歴史、倫理など森羅万象に及ぶ。日本にも早くから齎来し、漢字を学ぶ際の手本とされ、江戸時代には各句の右側に音、左側に訓を付した和刻本も出版された。朝鮮では各字に朝鮮語による訓と朝鮮漢字音をハングルで記したものが出版され、日本でもそれをもとにした和刻本が出版された。この朝鮮版『千字文』の和刻本を目にしたシーボルトは自国に持ち帰り、それをもとにライデンで出版したものが展示品の『千字文（Tsian dsü wen）』で、ハングルと片仮名による音訓が付されている。本書はシーボルトが助手のホフマン、郭成章の協力を得て、1833～41年にかけてオランダのライデンで刊行した『Bibliotheca Japonica（日本叢書）』のひとつで、本書のほか後出『新増字林玉篇』など6種の辞書類が刊行された。

参考：〔尼崎屋吉兵衛〕書『世話千字文』
天保５年（1835）刊　弘化３年（1846）大坂河内屋喜兵衛等印本　1冊（SRF471600124-7）

周興嗣の『千字文』は、相異なる1,000字の四字句からなり、その読み書きを通してそれを習得する教学書として広く普及した。日本に伝来後、特に江戸期には時世に合わせたさまざまな「千字文」が往来物として出版された。そのひとつ『世話千字文』にもまた同名異書が複数あり、またそれらの注釈書も出版された。展示品は、草書楷書二体に音訓２種の傍訓と、巻頭に絵入りの和文を付して出版されたもので、ロニーも同版を所蔵していた。ロニーは漢籍のほか日本文献も多く所蔵し、『千字文』関係には本書のほか『千字文講釈』『世話万字文』などがある。

D－③『新増字林玉篇（Thesaurus literarum ideographicarum）』　1833年ライデン刊　1冊（SRF471800049）

南朝梁・顧野王（519-581）の撰により大同9年（543）に成立した字書『玉篇』は、16,900余字を542の部首に分け、各字に反切と古字書の注解などによる字義を示したものである。原本は一部日本に古写本が伝わるのみで散逸し、現在通行する『玉篇』は北宋の陳彭年、呉鋭らが勅命により編した『大広益会玉篇』である。日本に与えた影響は大きく、空海（774-835）の『篆隷万象名義』は原本『玉篇』を抜粋したもので、室町時代に成立した部首引き漢和辞典『倭玉篇』は慶長年間以降『大広益会玉篇』に倣い部首が整理された。また江戸時代には『大広益会玉篇』を改訂増補した毛利貞斎（生没年不詳）による『増続大広益会玉篇大全』（安永9〈1780〉刊）が出版されたほか、鎌田環斎（1753-1822）による『字林玉篇（字林玉篇大全）』（安永9〈1780〉刊）など『玉篇』に基づく漢和辞典が出版された。『字林玉篇』はその後、環斎自身の改訂増補のほか、幾種もの新版が出版された。展示品はその『字林玉篇』の改訂版『新増字林玉篇大全』のライデン版で、前出『千字文』と同じく、シーボルトが刊行した『Bibliotheca Japonica（日本叢書）』のひとつで、ホフマンと郭成章にかかるものである。ホフマン旧蔵には毛利貞斎『増続大広益会玉篇大全』（安永9〈1780〉刊）、三浦道斎（茂樹、1778-1860）『（新鐫／校正）増補字林玉篇大全』（安政3〈1856〉刊）があり、それらをもとにしたのであろう。ロニーはこの２書の他『大広益会玉篇』、朝鮮版『全韻玉篇』などの『玉篇』関連文献を所蔵していた。

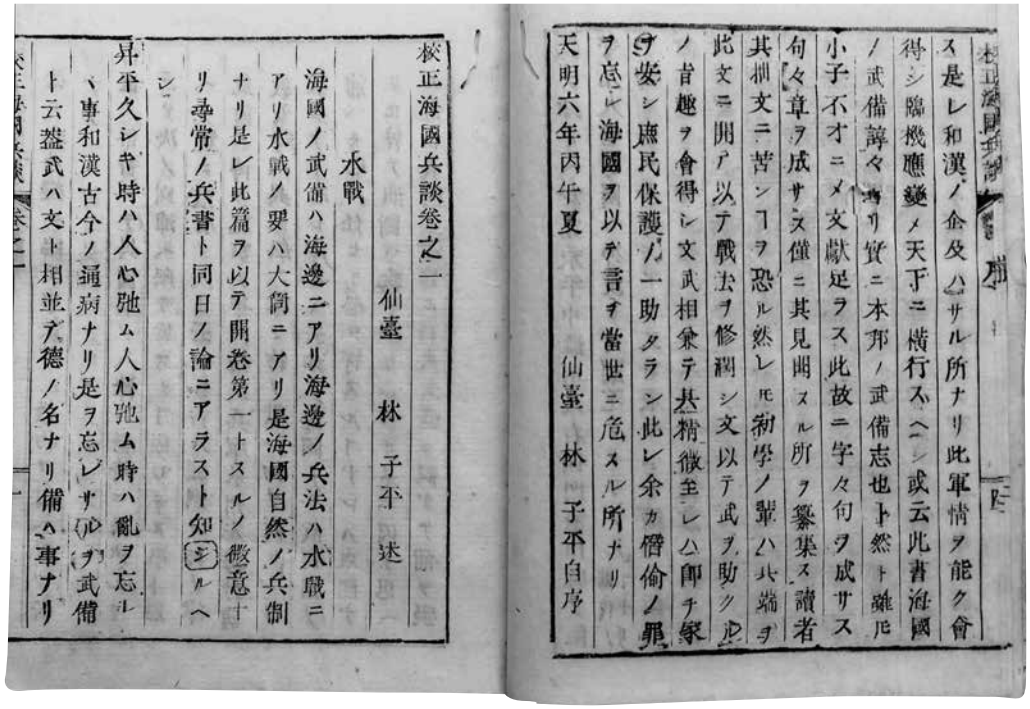


参考：三浦茂樹（道斎）編
『新鐫校正増補字林玉篇大全』
安政３（1856）年大坂敦賀屋九兵衛等刊本
1冊（SRF471600126）

鎌田環斎『字林玉篇』の改訂版。
ホフマン、ロニー旧蔵と同版。

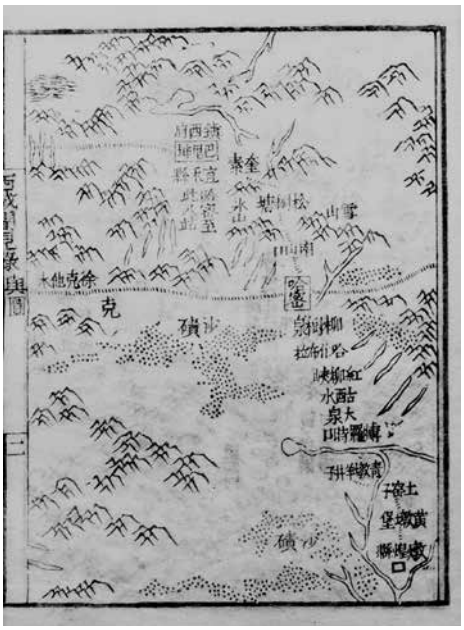
II 幕末期の海外情報

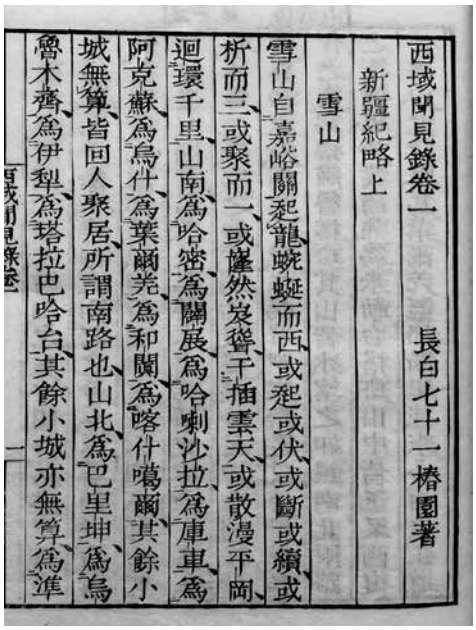
① 林子平著『校正海国兵談』10巻　天明6年（1786）成、嘉永6年（1853）序　木活印本 10冊（SRF471500352）

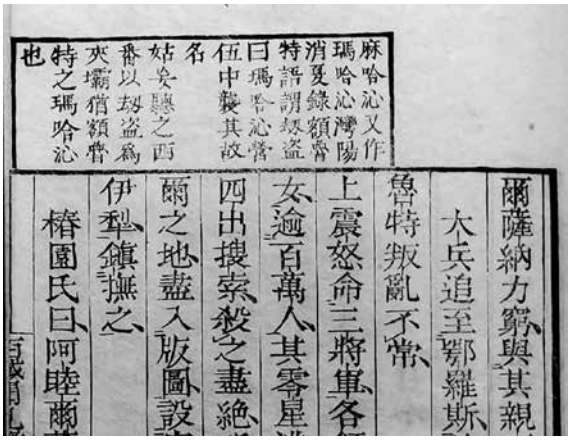


林子平（はやし しへい、1738～1793、名は友直、別号六無斎主人）は、洋学者・海防論者。元幕臣岡村良通の子で、姉が仙台藩主の側室となった縁で、自身も仙台藩士となる。同藩医工藤平助や塩釜神社神官藤塚知明らと交わり、長崎・江戸等に遊学して、他に先駆けて海防の重要性を唱えた。その著書『三国通覧図説』『海国兵談』は国事への容喙を咎められて幕府から発禁・絶版とされ、林子平も蟄居処分のなか没した。しかし『三国通覧図説』はヨーロッパに伝えられて、アベル・レミュザは同書から引用して小笠原諸島（ボニン島）の存在を紹介し、クラプロートは同書をフランス語訳した。国内でも写本によってひそかに流通し、『海国兵談』は幕末期に木活字本として再刊されている。

② 清・七十一撰『西域聞見録』8巻　乾隆42年（1777）序原刊、寛政13年（1801）畑金雞加点再刊
3冊（SRF471800099）

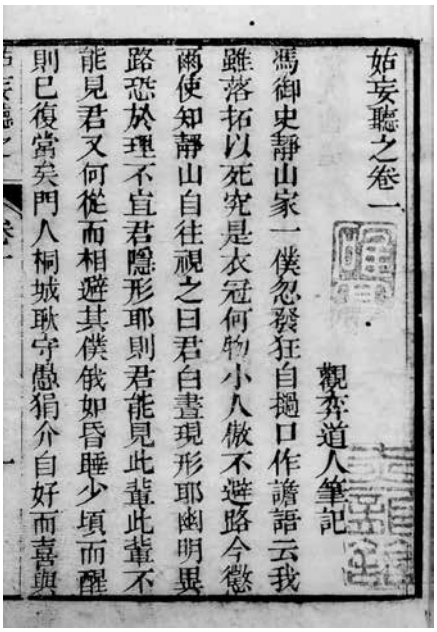



西域聞見錄卷一　長白七十一椿園著
新疆紀略上
雪山
雪山自嘉峪關起龍蜿蜒而西或起或伏或斷或續或
析而三或聚而一或巃然岌聳干插雲天或散漫平岡
迴環千里山南爲哈密爲關展爲哈喇沙拉爲庫車爲
阿克蘇爲烏什爲葉爾羌爲和闐爲喀什噶爾其餘小
城無算皆回人聚居所謂南路也山北爲巴里坤爲烏
魯木齊爲伊犁爲塔拉巴哈台其餘小城亦無算爲準


麻哈沁又作瑪哈沁灣陽消夏錄額魯特語謂刼盜曰瑪哈沁營伍中襲其故名姑妄聽之西番以刼盜爲夾壩猶額魯特之瑪哈沁也
爾薩納力窮與其親
大兵追至鄂羅斯
魯特叛亂不常
上震怒命三將軍各
女逾百萬人其零星
四出搜索殺之盡絶
爾之地盡入版圖設
伊犁鎮撫之
椿園氏曰阿睦爾

▲『姑妄聽之』からの引用（巻5）

大田錦城の序によれば、本書は考証学者吉田篁墩が清朝新刊書籍の中で余蕭客撰『古経解鉤沈』、盧文弨校『逸周書注』と並んで高く評価した著作であった。和刻本『西域聞見録』には、上欄に西域の地名等に関する加注があり、しばしば紀昀撰『閲微草堂筆記』からの引用がある。また本書は、その改題後印本『西域記』がレオン・ド・ロニーの旧蔵書中に見出され、19世紀欧州東洋学者の間でもよく読まれた著作であった。日本では天明期の北方問題以降、辺境への関心が高まっており、欧州学者の東洋学研究においても東西の境界域に対する関心が高く、漢籍を媒介として期せずして両者の関心が交差していると言える。


姑妄聽之卷一
觀弈道人筆記
馮御史靜山家一僕忽發狂自撾口作譫語云我
雖落拓以死究是衣冠何物小人傲不避路今懲
爾使知靜山自往視之曰君白晝現形耶幽明異
路恐於理不宜君隱形耶則君能見此輩此輩不
能見君又何從而相避其僕俄如昏睡少頃而醒
則已復當矣門人桐城耿守愚狷介自好而喜與

参考：清・紀昀撰『姑妄聽之』4巻『閲微草堂筆記』之一
乾隆58年（1793）序刊本　4冊　☆

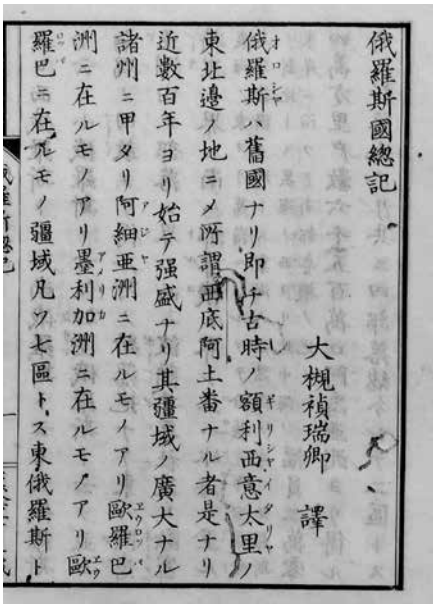
紀昀の文言小説『閲微草堂筆記』は、単刊された５種の筆記を合刻して出版（嘉慶5年（1800）寛政12年）する際に、著者自身が命名した書題。その単刊本とは、『灤陽消夏録』12巻（1790）、『如是我聞』4巻（1791）、『槐西雑志』4巻（1792）、『姑妄聽之』4巻（1793）。同書には著者のウルムチ配流時期の見聞を反映してか、辺境の話が散見される。異境の風聞は、清朝の読書人のみならず、江戸後期の読書人にとっても、その知的興味を刺激するものであったと想像され、発刊後すぐに伝来し、寛政中から我が国でよく読まれた。

③ 清・魏源撰『海国図志』　嘉永7年（1854）安政元年至3年（1854-56）刊
（SRF471500357、471500358、471500354、471500360）

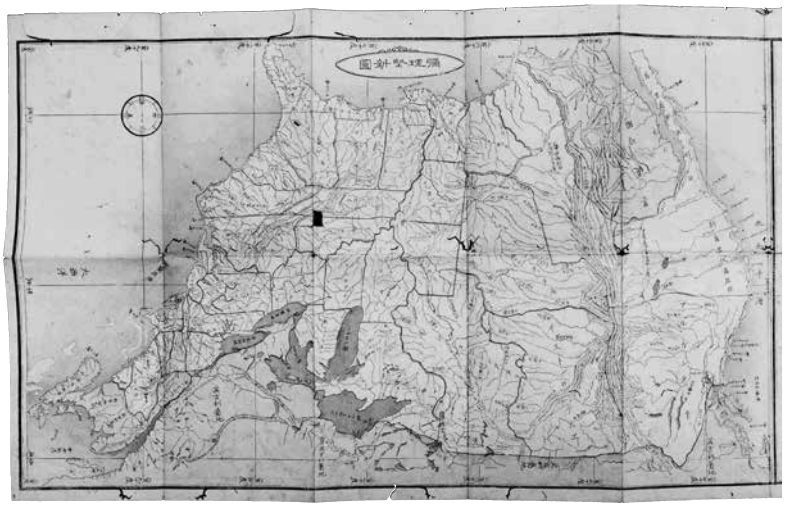
海國圖志卷三十六
歐羅巴人原譔
侯官林則徐譯
邵陽魏源重輯
俄羅斯國總記原本
俄羅斯舊國即古時額利西意太里之東北邊地所謂西底阿士番是也近數百年始強盛疆域甲於諸洲有在阿細亞洲者有在歐羅巴洲者有在墨利加洲者其在歐羅巴之疆域七區曰東俄羅斯西俄羅斯南俄羅

歐羅巴人原譔
侯官林則徐譯
邵陽魏源重輯
魯西亞國部
海國圖志
宕陰鹽谷先生
逢谷箕作先生
仝校
青藜閣發兌

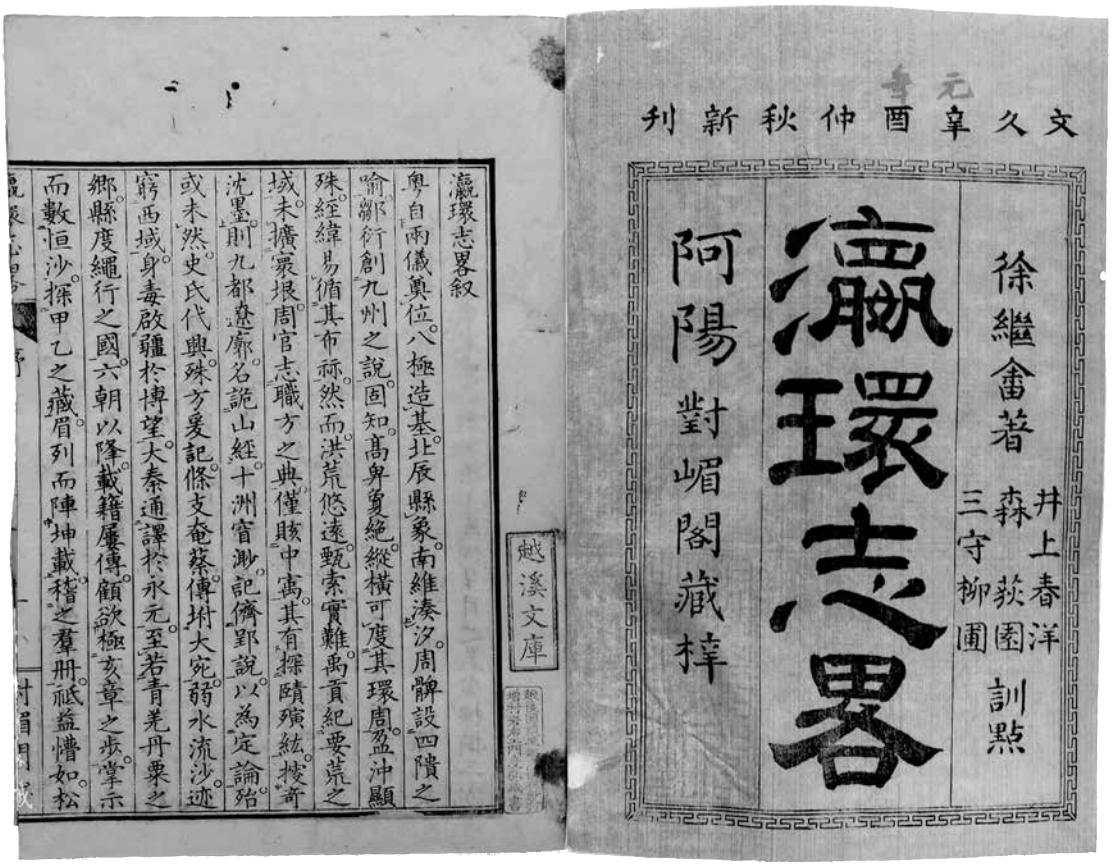
海國圖志卷之一
籌海篇一 議守 上
邵陽魏源撰
自夷變以來幃幄所擘畫疆場所經營非戰即款非款即戰未有專主守者未有善言守者不能守何以戰不能守何以款以守爲戰而後外夷服我調度是謂以夷攻夷以守爲款而後外夷範我馳驅是謂以夷款夷自守之策二曰守外洋不如守海口守海口不如守內河二曰調客兵不如練土兵調水師不如練水勇攻夷

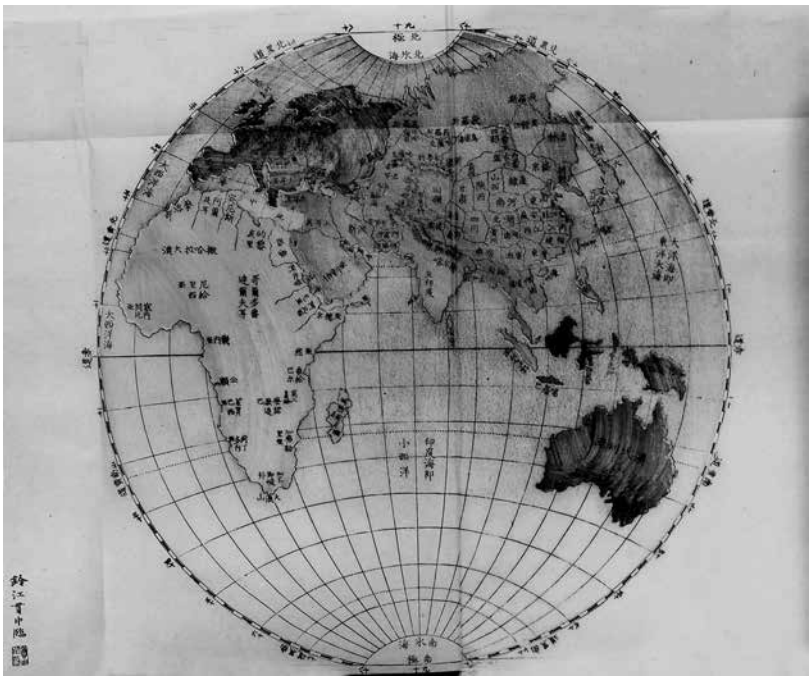

俄羅斯國總記
大槻禎瑞卿　譯
俄羅斯ハ舊國ナリ即チ古時ノ額利西意太里ノ東北邊ノ地ニメ所謂西底阿士番ナル者是ナリ近數百年ヨリ始テ強盛ナリ其疆域ノ廣大ナル諸州ニ甲タリ阿細亜洲ニ在ルモノアリ歐羅巴洲ニ在ルモノアリ墨利加洲ニ在ルモノアリ歐羅巴ニ在ルモノ疆域凡ソ七區トス東俄羅斯ト

対外問題に揺れる清朝にあって、阿片戦争（1840-1842）勃発の引き金となった林則徐（1785-1850）は、海外事情を理解するため、西洋の地理書、法律書に通じ、自ら漢訳書『四洲志』を著した。そしてその書を盟友魏源（1794-1856）に託し、地誌書の編纂を依頼した。魏源は『四洲志』はじめ複数の漢訳洋書をもとに、道光22年（1842）、世界情勢の紹介と自国の近代的軍備、富国強兵を訴えた世界地誌書『海国図志』50巻を完成させた。該書はその後増補され、同27年（1847）に60巻本、咸豊2年（1852）には100巻本が刊行された。日本には嘉永4年（1851）に将来し、同7年（1854）に塩谷宕陰（1809-1867）、箕作阮甫（1799-1863）の訓点が付された60巻本が和刻されると、それを嚆矢として安政元年（1854）から同3年（1856）にかけて、「籌海篇」（海防について説く）ほか「印度国」「普魯社国」（プロシア）「俄羅斯国」（ロシア）「英吉利国」「墨利加」（アメリカ）などの一部の巻のみを抄出した訓点本、また片仮名漢文交じりの和解本など20種余りの単巻本が相次いで出版された。それらは西洋事情、海防への関心が高まっていた幕末にあって、佐久間象山（1811-1864）や吉田松陰（1830-1859）といった幕末の志士ら日本の政治家や知識人に大きな影響を与えた。展示品は、塩谷、箕作の訓点が付された『海国図志籌海篇』（嘉永7年〈1854〉刊）、『海国図志北洋俄羅斯国』（安政2年〈1855〉跋刊）、大槻瑞卿（1818-1857、名清禎、西磐と号す）により和訳された『海国図志俄羅斯総記』（嘉永7年〈1854〉刊）、そして地図のみを刊行した中山成（元成）『弥利堅国図』（嘉永7年〈1854〉刊）。



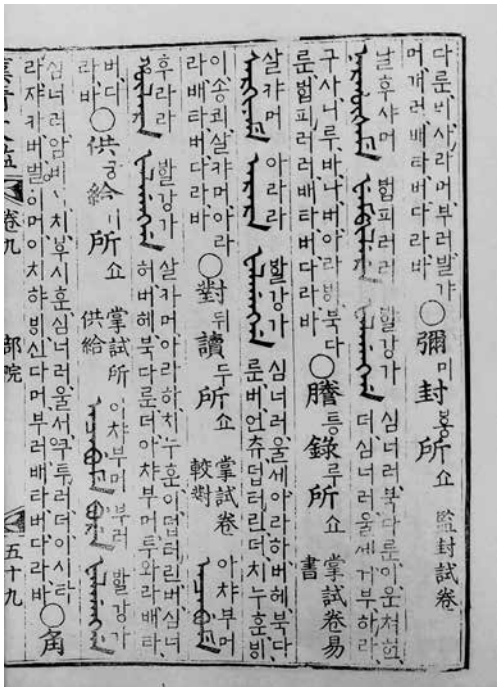
④ 清・徐継畬撰　井上春洋・森荻園・三守柳圃訓点『瀛環志略』
文久元年（1861）阿波対媚閣刊徳島宮嶋屋伊左衛門等後印本　対媚閣蔵版　10冊
（東アジア学術総合研究所51-13）

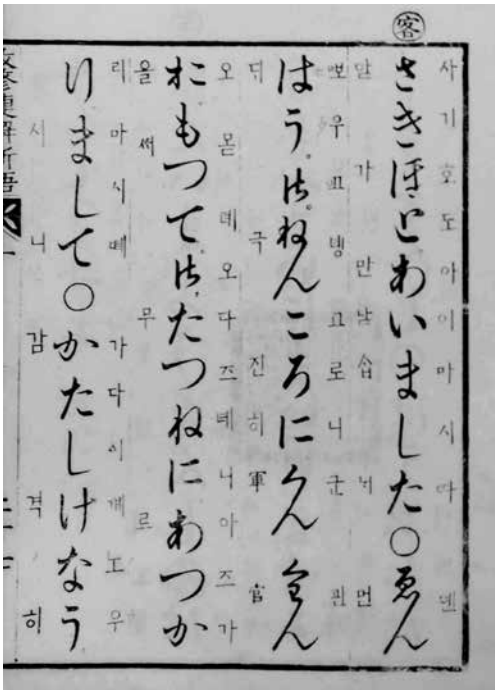


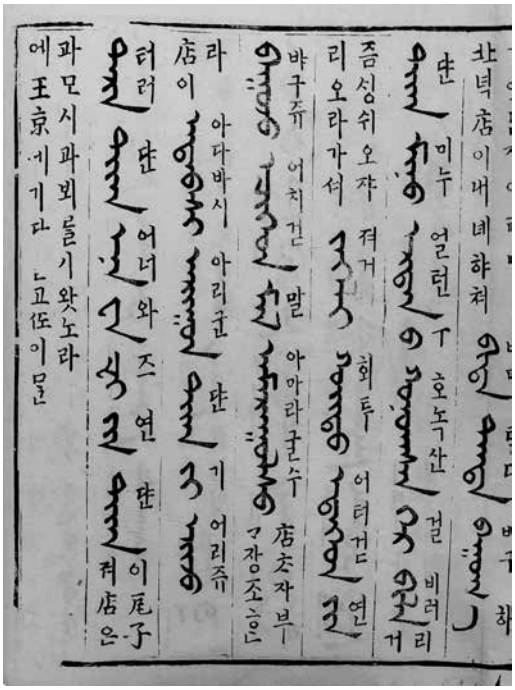


19世紀後半、清朝末期の中国では、阿片戦争（1840-1842）、続くアロー戦争（1856-1860）によって、欧米の近代軍事技術の必要性を感じ、曾国藩、李鴻章ら清朝の官僚らにより、欧米の近代科学技術を導入して、清朝の衰退の回復、国力の増強をはかった洋務運動がおこった。その初期の推進者のひとり徐継畬（1795-1873、字松龕）は、総督として福建省を統治していた頃、アメリカ人宣教師デヴィッド・アビール（雅裨理）、イギリス領事ラザフォード・オールコックとの交流や宣教師たちの著作から西洋の情報を集め、それをもとに道光29年（1849）、世界地誌書『瀛環志略』を著した。「瀛」とは大海、「瀛環」とは全世界の意。「地球図」から始まり、「皇清一統輿地全図」と続き、アジア、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカと各地域ごとに地図と地誌が記されている。その地理の記述は前出『海国図志』より正確であったと言われる。日本にも舶載され、文久元年（1861）和刻本が出版された。展示品は、上越・有恒学舎の創設者、増村朴斎（1868-1942）の父・度弘（信次郎）旧蔵書。

⑤ 京都帝国大学文科大学編『朝鮮司訳院日満蒙語学書断簡』大正7年（1918）刊
1冊（SRF471800052）



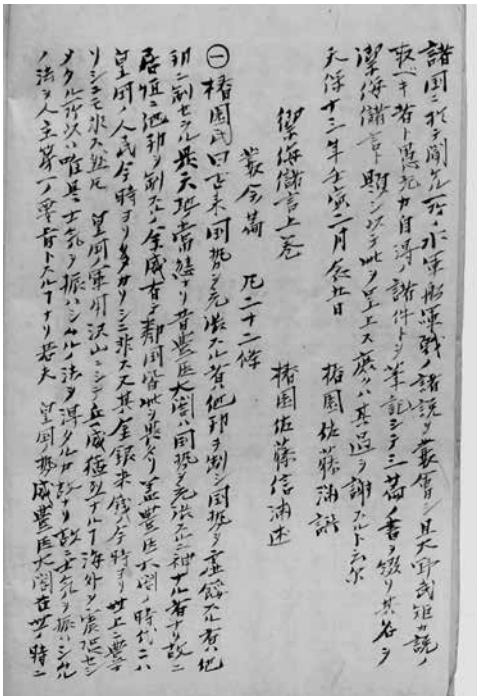




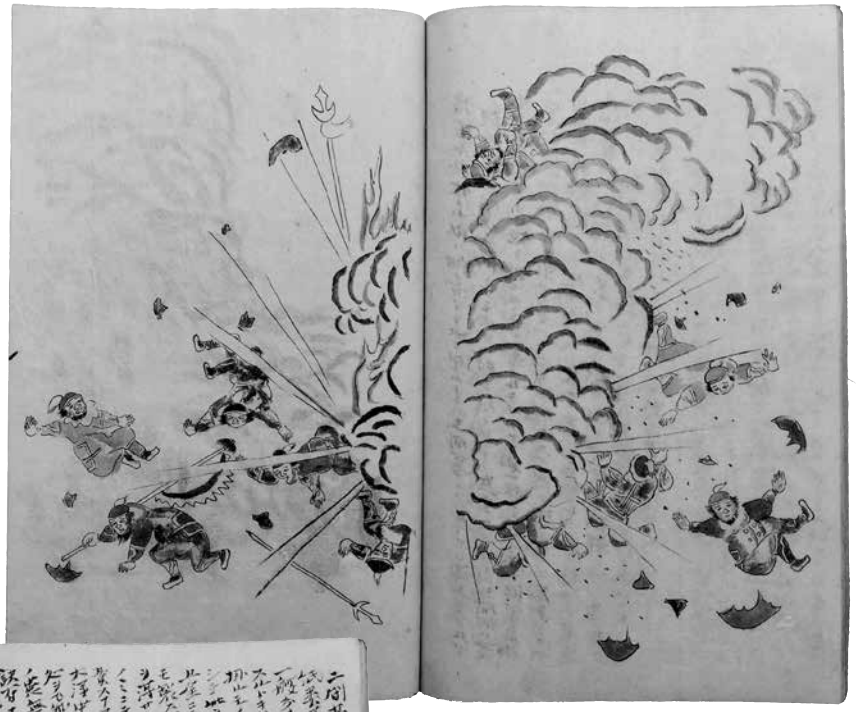
▲上段右：『改修捷解新語』　左：『漢清文鑑』
◀下段：『蒙語老乞大』

仁川の観測所長をつとめた気象学者和田雄治（1859-1918）は、李朝時代の気象観測記録を発見したほか、司訳院の官版7種を含む日満蒙語学書断簡９種の古版木28枚（両面雕板）を発見し、のち京都帝国大学文化大学に寄贈した。司訳院は朝鮮王朝時代、外交実務を担当し、漢語、清語（満洲語）、蒙語（モンゴル語）、そして倭語（日本語）の通訳の養成に資するため、語学書（訳語書）の編纂をしていた部署で、その廃止後、版木が散逸したとみられる。本書はそれら古版木を新たに刷り刊行したもので、日本語学書の『改修捷解新語』（14葉）『捷解新語文訳』（２葉）『隣語大方』（４葉）、満州語学書の『漢清文鑑』（２葉）『（新訳）清語老乞大』（８葉）『（重刊）三訳総解』（18葉）、蒙古語学書の『蒙語類解』（２葉）『蒙語老乞大』（4葉）『蒙語捷解』（２葉）の全９種56葉。いずれも稀覯書で、なかで『漢清文鑑』の一部は、パリの東洋語学校（École spéciale des langues orientales）附属図書館に所蔵されるという。

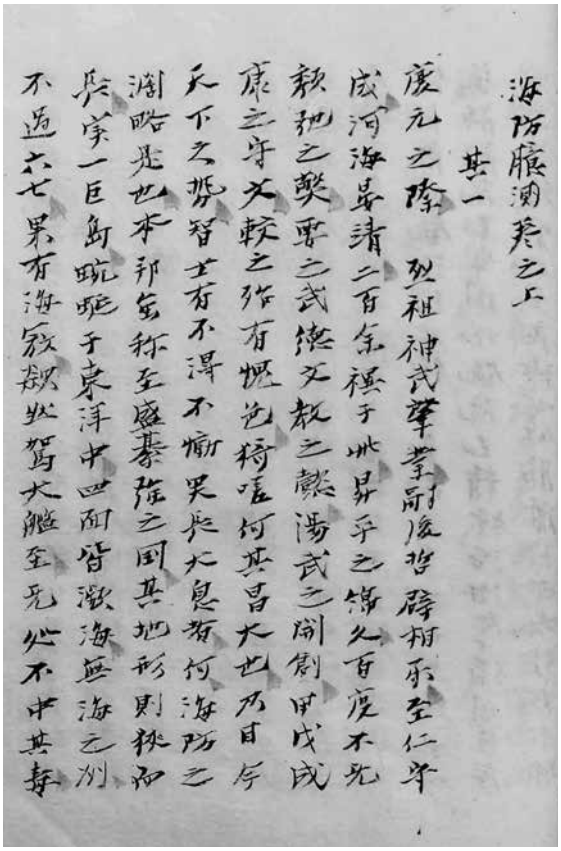
⑥ 佐藤信淵述『禦侮儲言』　芳野金陵写本　1冊（芳野525）



佐藤信淵（1769-1850、字元海、椿園と号す）は経世家として、天保12年（1841）、日本の水軍充実の必要性を説く海防書『禦侮儲言』を著した。本書はロシアとイギリスを仮想敵国とし、その科学技術と軍事力の優位性を認めた上で、その両国の打倒を目的とし、鄭氏台湾軍がオランダ軍船を撃破した例などを絵入りで示し、西洋の大艦に勝つためには、多数の小舟による連携と大砲の運用が有効であると唱えた。展示品は昌平黌の教授で文久三博士の一人、芳野金陵（1803-1878）が書写したもので、この他金陵の旧蔵には後出の古賀侗庵『海防臆測』と田中万春『禦虜索』、同じく万春の『恢国論』などの海防、外事関係資料が散見し、外事、海防についての関心の高さが窺える。

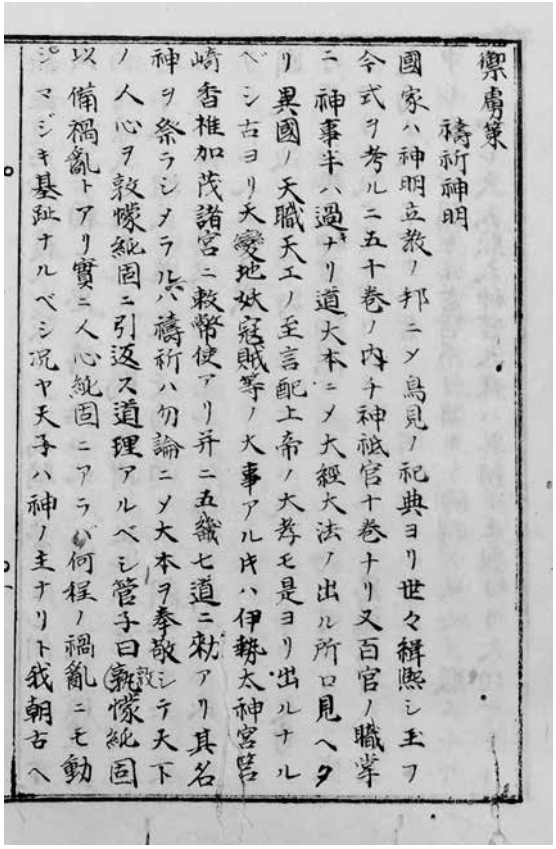


⑦ 古賀侗庵著『海防臆測』(「極論時事封事」合収)　芳野金陵写本　1冊（芳野524）


海防臆測　巻之上
其一
慶元之際　列祖神武肇基耐度哲辟相承至仁宇
成河海晏清二百年禍于此界乎之傳久百度不死
赤弧之獘要之武德文教之懿湯武之剛創甲戌成
康之守文較之殆有慨色猗嗟何其昌大也乃目今
天下之勢智士有不得不慟哭長太息者何海防之
闊略是也本邦全称至盛纂強之国其地形則狹而
長実一巨島眈眈于東洋中四面皆瀕海無海之別
不過六七果有海寇欲駕大艦至兵必不中其毒

寛政の三博士の一人古賀精里（1750-1817）の三男で幕府の儒者を務めた古賀侗庵（1788-1847、名煜）は、渡辺崋山（1793-1841）や高野長英（1804-1850）らと交流し、独自の開国論を展開した。天保９年（1838）に著した『海防臆測』では、イギリスの対外政策に着目し、それを範として日本は海軍力を強化して貿易による富国をすべきと述べている。展示品は、前出『禦侮儲言』と同じく芳野金陵の手になるもので侗庵父精里が蝦夷・長崎におけるロシア・イギリス両国の不法行為を記した「極論時事封事」と同時期に書写し合綴している。

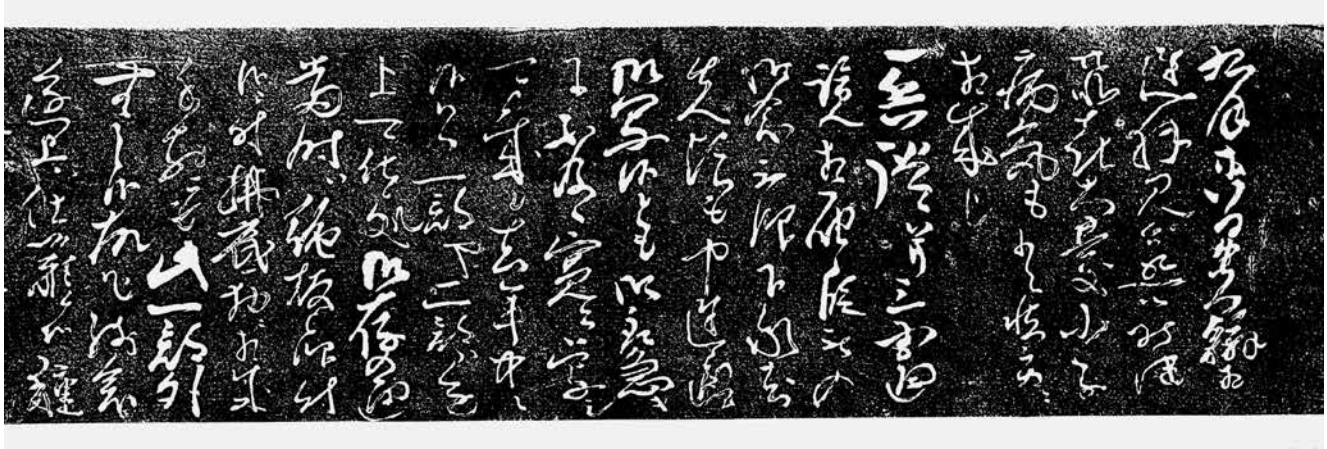
⑧ 田中万春著『禦虜策』　明治30年（1897）秋野庸彦写本　1冊（芳野526）


禦虜策
禱祈神明
國家ハ神明立教ノ邦ニメ鳥見ノ祀典ヨリ世々繙熙シ玉フ
令式ヲ考ルニ五十卷ノ内ヲ神祇官十卷ナリ又百官ノ職掌
ニ神事半ハ過ナリ道大本ニメ大經大法ノ出ル所ロ見ヘタ
リ異國ノ天職天工ノ至言配上帝ノ大孝モ是ヨリ出ルナル
ベシ古ヨリ天變地妖寇賊等ノ大事アル代ハ伊勢太神宮皆
崎香椎加茂諸宮ニ敕幣使アリ并ニ五畿七道ニ勅アリ其名
神ヲ祭ラシメラレ禱祈ハ勿論ニメ大本ヲ奉敬シテ天下
ノ人心ヲ敦懐純固ニ引返ス道理アルベシ管子曰敦懐純固
以備禍亂トアリ實ニ人心純固ニアラバ何程ノ禍亂ニモ動
ジマジキ基址ナルベシ況ヤ天子ハ神ノ主ナリト我朝古ヘ

田中万春（1772-1822、名は政均〈まさひら〉）は、出羽鶴岡に生まれ、暦算、地理、また西洋事情に通じ、文化4年（1807）、ロシアの蝦夷地侵攻に際し、その対処策『禦虜策』を著し、幕府に提出した。また渡辺崋山と親交があり、「万国形勢大編年」を著した。展示品は前出『禦侮儲言』『海防臆測』と同じく芳野金陵旧蔵。

Ⅲ 幕末明治期の洋学者・対外関係者の筆跡

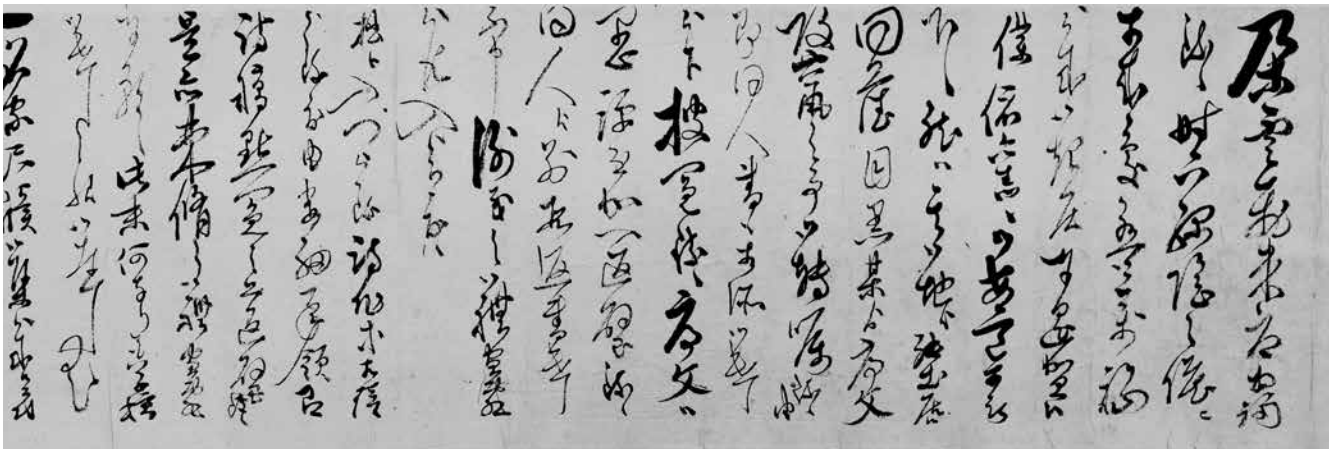
① 林子平書簡拓本　（寛政4年〈1792〉10月5日付、亘理右仲宛、明治期作成）☆

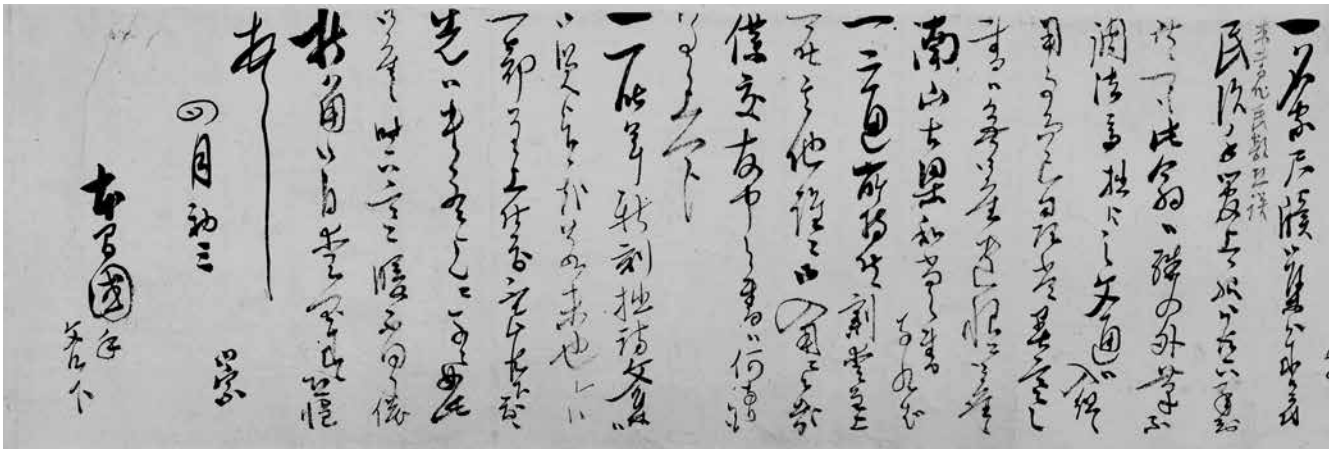


前掲・林子平著作『海国兵談』『三国通覧図説』は、幕府によって発禁・絶版処分となったが、その見識を評価する人々も少なくなかった。展示品は、『海国兵談』『三国通覧図説』の借覧希望に応えて、林子平が手元に残してあった一部を貸与して書写せしめた時の書簡。この拓本は、仙台郷土史料の保存に尽くした飯川勤の作成にかかるもので、支倉常永らの慶長遣欧使節の文書の複製と合綴して１巻とされている。

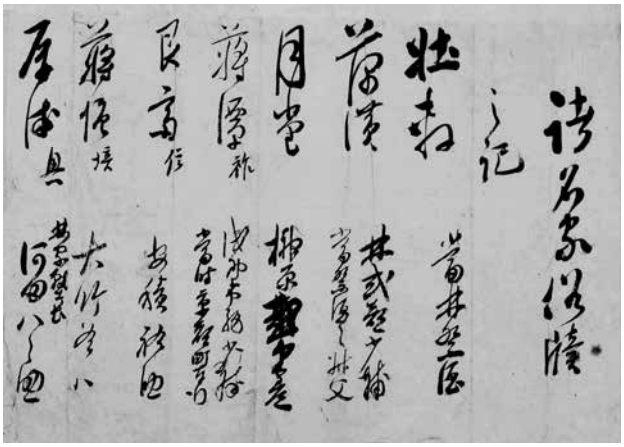
（翻印）九月廿八日貴翰相達、拝見仕候。愈御壮健、恭喜大慶。小子病気も少々快方ニ相成申候。
一兵談幷三国通覧相届候段、被入御念被仰下、承知。先頃も申達候通り、御写候とも御取急キに不及候。寛々御写シ可被成候。去年中ニ候ハヽ一部や二部ハ進上可仕候処、御存の通、当時ハ絶板被仰付候ニ付、払底物ニ相成、手前ニも此一部外無之候故、乍残念進上ハ仕難候。種本ニ残し置可申候。必御急キニ不及候間、ゆるゆる御うつし可被成候。
一石搨の御礼被仰下、被入御念候御事。又々段々すり候間、たまり候ハヽ追々進上可仕候。逐日上手ニ相なり申、此中尊父公へも宜ク御申達可被下候。萬々御登仙之節、寛々可得芳慮候。草々御報申達候。御登仙候ハヽ、必御立より可被下候。以上。十月五日　林子平
亘理右仲様

② 大槻磐渓書簡　（おおつき ばんけい　1801～1878、名は清崇）☆

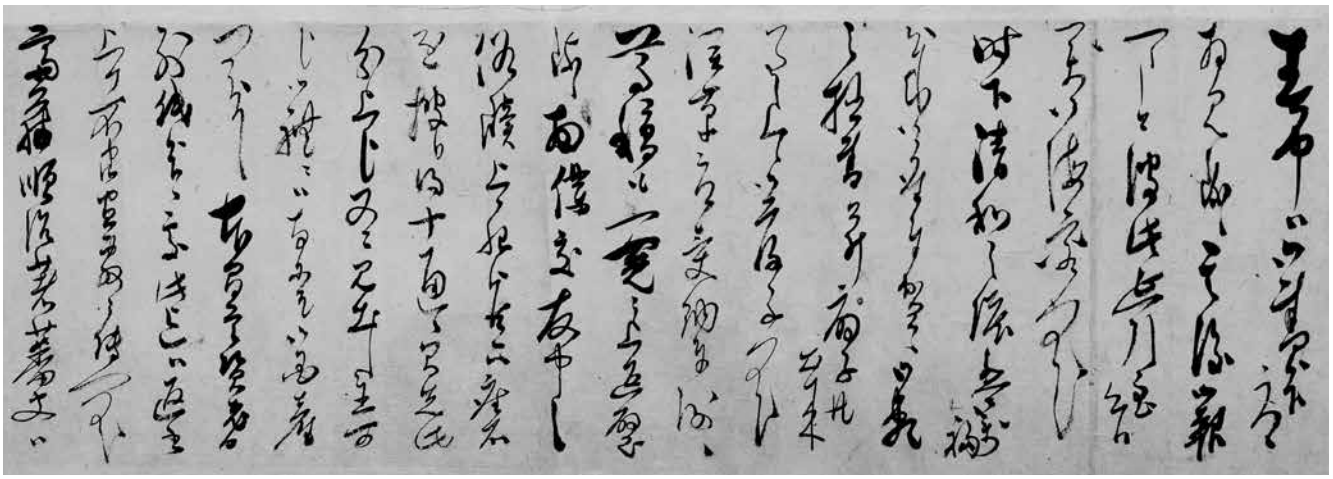


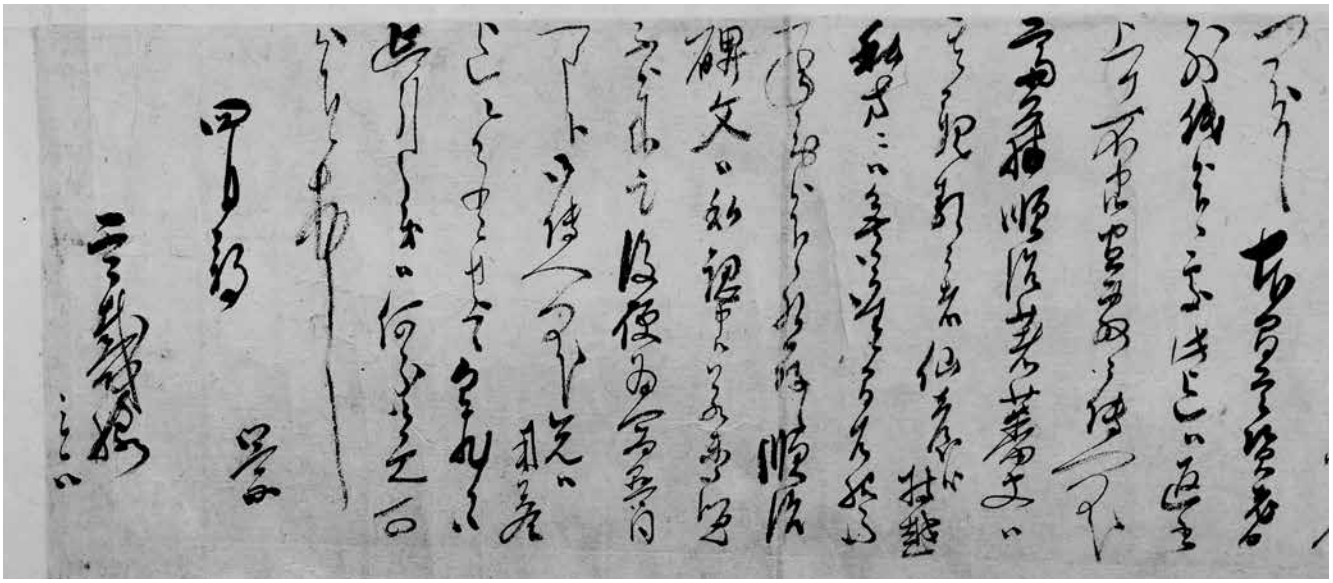


（翻印）朶雲飛来忝拝誦致候。時下緑陰之候ニ相成候處、愈御萬福被成御起居、奉遥賀候。僕依舊候。御安意可被下候。然ハ其御地江罷出居候同藩目黒某ゟ序文改竄之事御轉囑致候由、即同人書も相添御遣被下、披閲致候。序文ハ愚評を加へ返璧致候。同人江別段返書遣し不申、謝儀之御禮宜敷被仰入被下度候。
拙江入門被致、詩作等相談被致度由、委細承領。即詩稿點閲之上返璧致候。是亦束脩之御禮宜敷奉願候。此末何なりとも草稿御遣し候様御達し可被下候。
一　名家尺牘御集被成候ニ付、民治手簡上候様被仰下、承知仕候へとも、此翁ハ殊の外筆不調法ニ而、拙江之文通ハ入組候用事而已。尋常暑寒之書ハ無御座、遺恨ニ御座候。南山古梁和尚之書なれば一二通所持仕候。割愛呈上可仕、其他誰々御入用ニ候哉、僕交友中之書ハ何なりとも差上可申候。
一　一昨年新刻拙詩文集ハ御覧被下候哉。若未也レハ一部呈上仕度候。右被仰下度候。先ハ貴答迄ニ草々如此御座候。時下寒暖不同之候、折角御自愛可被成候。恐惶頓首。　　崇　　四月初三　　本間国手　文几下



諸名家俗牘之記
壯軒　當林祭酒
藕潢　林式部少輔／當祭酒之叔父
月堂　榊原越中守殿
蔣潭 祚　浅野中務少輔／當時京都町奉行
艮斎 信　安積祐助
蔣塘 培　大竹冬八
屏淑 興　林家塾長／河田八之助





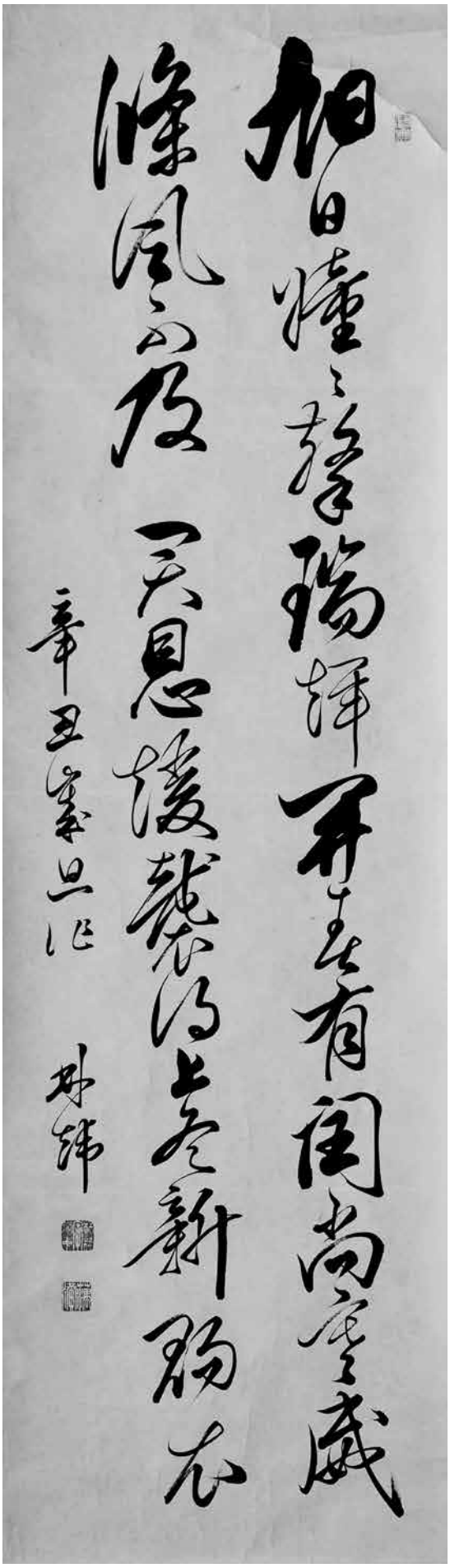
大槻磐渓は儒者・洋学者。奥州一ノ関出身の蘭学者大槻玄沢の子として江戸に生まれ、葛西因是・松崎慊堂らに漢学を学び、仙台藩士となり、傍ら早くから開国論を唱えて西洋砲術を学ぶ。黒船来航など幕末外患の時期に藩命を受けて江戸で活動し、また藩校養賢堂の学頭となった。戊辰戦争後に罪を問われて投獄され、出獄後は東京で文雅の晩年を送った。展示品は大槻磐渓が水戸藩医本間棗軒や相田玄裁（未詳）に需められて、諸家の来翰を割譲した時の書簡。大槻磐渓（本間棗軒宛）、安積艮斎（大槻磐渓宛）、大竹蒋塘（大槻磐渓宛）、広瀬旭荘（大槻磐渓宛）、榊原月堂（大槻磐渓宛）、未詳、後藤松陰（大槻磐渓宛）、浅野梅堂（大槻磐渓宛）、大槻磐渓（相田玄裁宛）、大槻磐渓（相田玄裁宛）、会沢正志斎（本間棗軒宛）の書簡を収録し、大槻磐渓の多彩な交際を窺わせるに十分である。

（翻印）春中ハ御書被下、忝拝見致候。其後御報可申も、彼此延引至今日、萬御海容可被下候。時下清和之候、愈御萬福被成御座奉賀候。御頼之拙書幷扇子共出来、差上候。御落手可被下候。潤筆忝受納、奉謝候。尊稿も一閲之上返璧致候。扨僕交友中之俗牘上候様被仰下、座右を捜り、得十通候間、先此分上申候。又々見出し置可申候。御禮ニハなにそ御国産可被下候。本間玄資老ゟ別紙被下候處、此迄ハ返書上ケ不申候。宜敷御傳可被下候。斎藤順治著「蕃史」ハ、其親類之者仙臺江持越、私方ニハ無御座候間、左様御承知被下候様存候。順治碑文ハ私認申候。若未タ御覧不被成候ハヽ、後便為寫懸御目可申候。御傳へ可被下候。先ハ用答迄ニ草々申上候。延引之儀ハ何分御免可被下候。頓首。　四月朔　　崇　　玄裁様 足下

③ 林復斎七絶書幅（はやしふくさい　一八〇一～一八五九、名は韙、字は弼中、別号梧南・藕潢）☆

林復斎は儒者。幕府儒官の筆頭林大学頭家を中興した述斎の六男。能吏として知られ、一八五三年に第一一代大学頭を継承し、翌一八五四年のペリー艦隊再来航に際して幕府側全権として日米交渉に臨んだ。対外関係資料を編纂した『通航一覧』三五〇巻（一八五三年序）や『墨夷応接録』を残している。展示品は、天保一二年（一八四一）元旦作の七絶を揮毫したもの。

旭日瞳々撃瑞輝　開春有閏尚寒威　條風不及君恩煖　襲得上冬新賜衣
辛丑歳旦作　林韙　（印記）「寫懐」「林韙字弼中」「藕潢」
（旭日瞳々として瑞輝を撃ち　開春有閏 尚ほ寒威あり　條風 君恩の煖きに及ばず　襲ね得たり 上冬新たに賜はる衣）

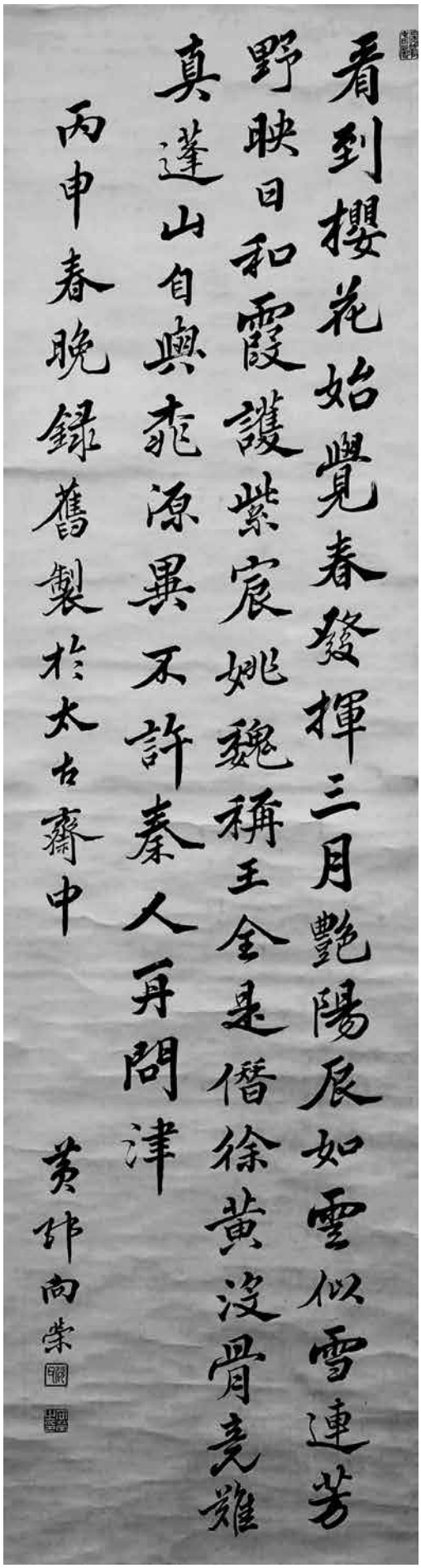


④ 向山黄村七律書幅（むこうやまこうそん　一八二六～一八九七、名は一履、字は欣父、通称栄五郎・隼人正）☆

向山黄村は幕臣・漢詩人。昌平坂学問所に学んで頭角を現わし、箱館奉行所勤務を経て目付に昇進し、更に一八六六年に外国奉行、次いで若年寄格となりフランス駐箚を命じられ、徳川昭武の渡欧・留学を補佐した。維新後は静岡学問所頭取となり、旧幕臣の節を守って明治政府に仕えず、晩年は晩翠吟社の盟主として詩作に励んだ。展示品は晩年（一八九六年）の揮毫にかかる桜花を詠じた七言律詩。

看到櫻花始覺春　發揮三月艶陽辰　如雲似雪連芳野　映日和霞護紫宸
姚魏稱王全是僭　徐黄沒骨竟難真　蓬山自與桃源異　不許秦人再問津
丙申春晩録舊製於太古齋中　黄邨向榮　（印記）「次第春風」「欣父」「向榮之印」

（桜花を看到って始めて春を覚ゆ　発揮す三月艶陽の辰　雲の如く雪の似く芳野に連なり　日に映じ霞に和して紫宸を護る
姚・魏（＊牡丹の品種）王を称するは全く是れ僭　徐・黄（＊著名な花鳥画家）の没骨も竟に真なり難し　蓬山自ら桃源と異なり　許さず　秦人の再び津を問ふを）

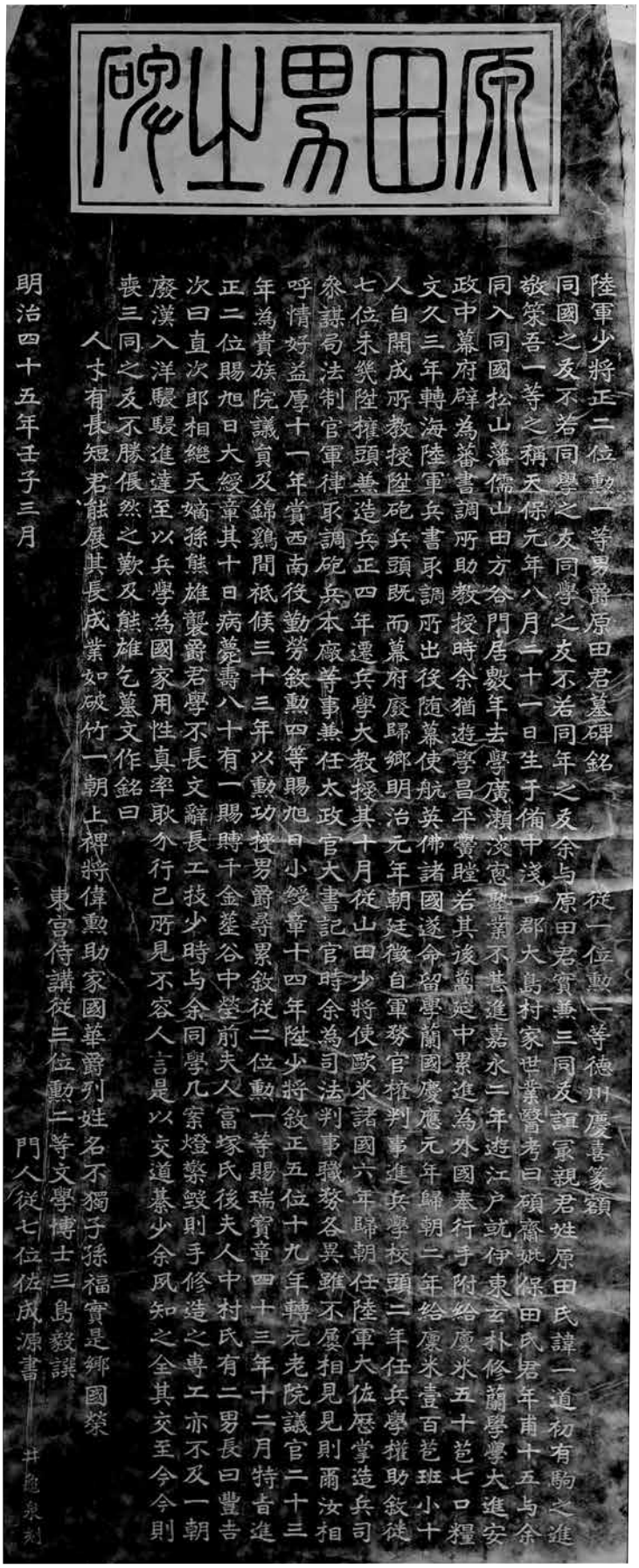


⑤

原田一道の墓碑銘拓本と肖像写真

（はらだ かずみち　一八三〇～一九一〇、幼名駒之進、のち敬策・吾一。三島中洲撰文・徳川慶喜篆額）☆

原田一道は医者・洋学者・軍人。原田は、備中鴨方藩領（現笠岡市西大島）の在村医原田碩斎の長男に生まれ、備中松山藩儒山田方谷に入門し、江戸に出て伊東玄朴に洋方を学んで蕃書調所出役となり、一八六三年に幕府遣仏使節に随って渡欧しオランダ陸軍士官学校に学ぶ。沼津兵学校教授を経て新政府に出仕し、岩倉使節団に随行して米欧回覧。兵器・兵学の専門家として砲兵工廠長等を歴任し、男爵に叙される。長男豊吉は東京大学理学部教授、二男直次郎は洋画家、嗣孫熊雄は西園寺公望の側近として知られる。原田一道とレオン・ド・ロニーは長年の交流があり、リール市図書館には人類学雑誌を贈られた原田一道の礼状（一九〇三年三月二五日付）が遺されている。展示品は、谷中天王寺墓地にある山田方谷門の同門三島中洲の撰文になる墓碑の拓本と、幕末明治初期に撮影されたと見られる肖像写真で、西大島で原田家の墓域を守る喜多村安正氏（幕府医官喜多村直寛の家系）の所蔵にかかる。



原田男墓碑

陸軍少將正二位勲一等男爵原田君墓碑銘

從一位勲一等德川慶喜篆額

同國之友不若同學之友同學之友不若同年之友余与原田君實兼三同友誼冢親君姓原田氏諱一道初有駒之進敬策吾一等之稱天保元年八月二十一日生于備中淺口郡大島村家世業醫考曰碩齋妣保田氏君年甫十五与余同入同國松山藩儒山田方谷門居數年去學廣瀬淡窓塾業不甚進嘉永二年遊江戸就伊東玄朴修蘭學學大進安政中幕府辟為蕃書調所助教授時余猶遊學昌平黌睦若其後萬延中累進為外國奉行手附給廩米五十苞七口糧文久三年轉海陸軍兵書取調所出役隨幕使航英佛諸國遂命留學蘭國慶應元年歸朝二年給廩米壹百苞班小十人自開成所教授陞砲兵頭既而幕府廢歸鄉明治元年朝廷徵自軍務官權判事進兵學校頭二年任兵學權助敘從七位未幾陞權頭兼造兵正四年遷兵學大教授其十月從山田少將使歐米諸國六年歸朝任陸軍大佐歷掌造兵司參謀局法制官軍律取調砲兵本廠等事兼任太政官大書記官時余為司法判事職務各異雖不屢相見見則爾汝相呼情好益厚十一年賞西南役勤勞敘勲四等賜旭日小綬章十四年陞少將敘正五位十九年轉元老院議官二十三年為貴族院議員及錦鶏間祗候三十三年以勲功授男爵尋累敘從二位勲一等賜瑞寶章四十三年十二月特旨進正二位賜旭日大綬章其十日病薨壽八十有一賜賻千金葬谷中瑩前夫人富塚氏後夫人中村氏有二男長曰豊吉次曰直次郎相繼夭嫡孫熊雄襲爵君學不長文辭長工技少時与余同學几案燈檠毀則手修造之專工亦不及一朝廢漢入洋駸駸進達至以兵學為國家用性真率耿介行己所見不容人言是以交道綦少余夙知之全其交至今令則喪三同之友不勝悵然之歎及熊雄乞墓文作銘曰

人寸有長短君能展其長成業如破竹一朝上裨將偉勲助家國華爵列姓名不獨子孫福實是鄉國榮

明治四十五年壬子三月

東宮侍講從三位勲二等文學博士三島毅謹

門人從七位佐成源書

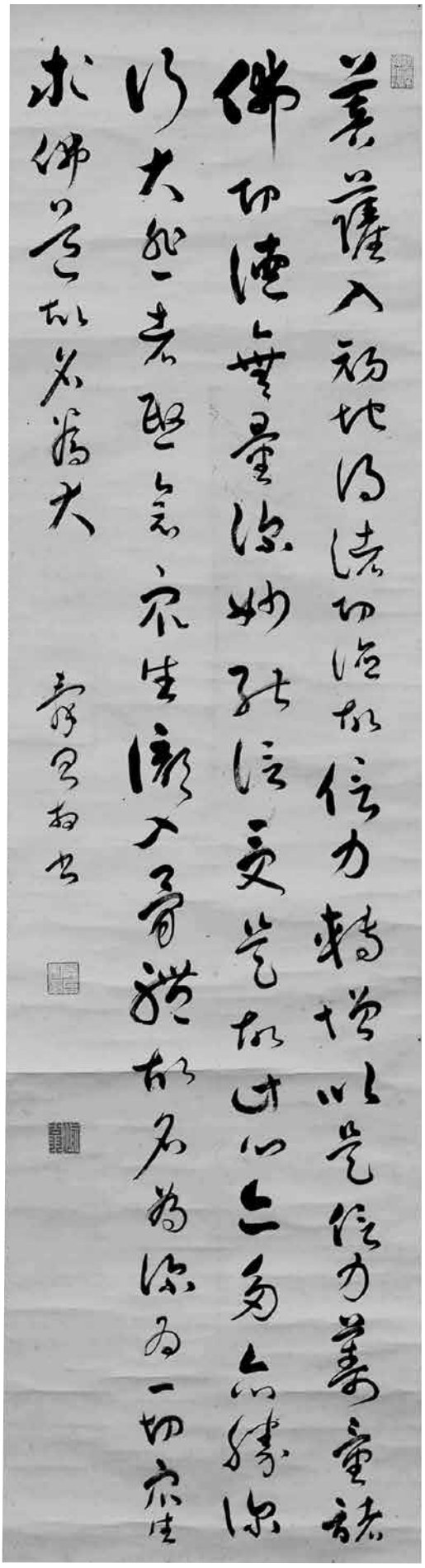
井魁泉刻

⑥ 石川舜台書幅（いしかわしゅんたい　一八四一～一九三一）☆

石川舜台は石川県出身の浄土真宗大谷派の僧侶。一八七二年に新門主大谷光瑩（現如）・成島柳北・松本白華・関信三らと共に宗教事情視察のために渡欧。同時期にパリに滞在した西本願寺派の島地黙雷らと共にレオン・ド・ロニーと交流をもった。大谷派内では保守派の渥美契縁と覇を競い、巣鴨監獄教誨師事件や第一次宗教法案反対運動などの政治的運動を指揮し、また海外布教や佛骨将来など積極的な宗政改革を進めた。展示品は宗祖親鸞の『顕浄土真実行文類（教行信証）』の一節を揮毫した書。

菩薩入初地、得諸功徳故、信力轉増。以是信力、籌量諸佛功徳無量深妙、能信受。是故此心亦多亦勝。深行大悲者、愍念衆生徹入骨體、故名為深。為一切衆生求佛道、故名為大。舜台拝書　（印記）「河海不擇細流」「舜台私印」「愉翁」

（菩薩 初めの地に入れば、諸の功徳を得るが故に、信力轉た増す。是の信力を以て、諸佛の功徳の無量深妙なるを籌へ量りて、能く信受す。是の故に此の心亦多なり亦勝なり。深く大悲を行ずる者は、衆生を愍み念ふこと骨體に徹し入るが故に名づけて深と為す。一切の衆生の為に佛道を求むるが故に名づけて大と為す。）



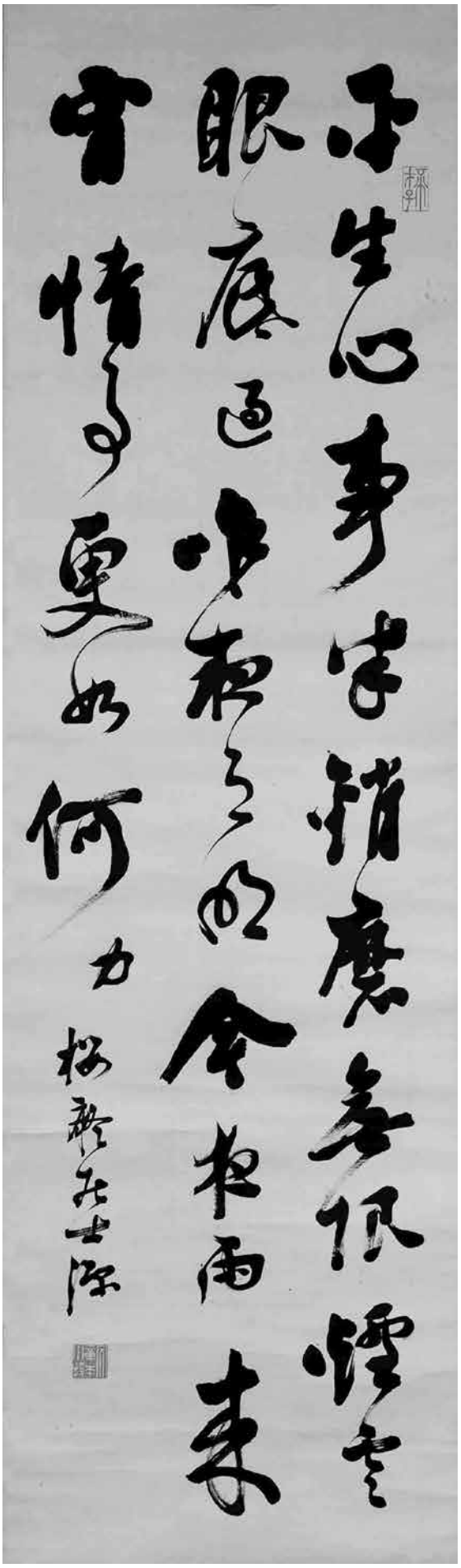
⑦ 福地桜癡七絶書幅（ふくちおうち　一八四一～一九〇六、名は源一郎）☆

福地桜癡は、洋学者・ジャーナリスト・政治家。儒医福地苟庵の子として長崎に生まれ、漢学・蘭学を学び、海軍伝習生に従い江戸に出る。文久と慶應の幕府遣欧使節に外国奉行柴田剛中に従って通訳として随行。福地は福沢諭吉・松木弘安（寺島宗則）らとともにレオン・ド・ロニーと最も早く交流をもった日本人の一人である。維新後は新聞人として活動し、次第に伊藤博文・山県有朋ら政治家にも近づき、晩年は演劇改良運動にも取り組んだ。展示品は七言絶句を揮毫したもの。

平生心力半銷磨　無限煙雲眼底過　昨夜月明今夜雨　来宵情事更如何　桜癡居士源

（印記）「不才子」「文章本小技」

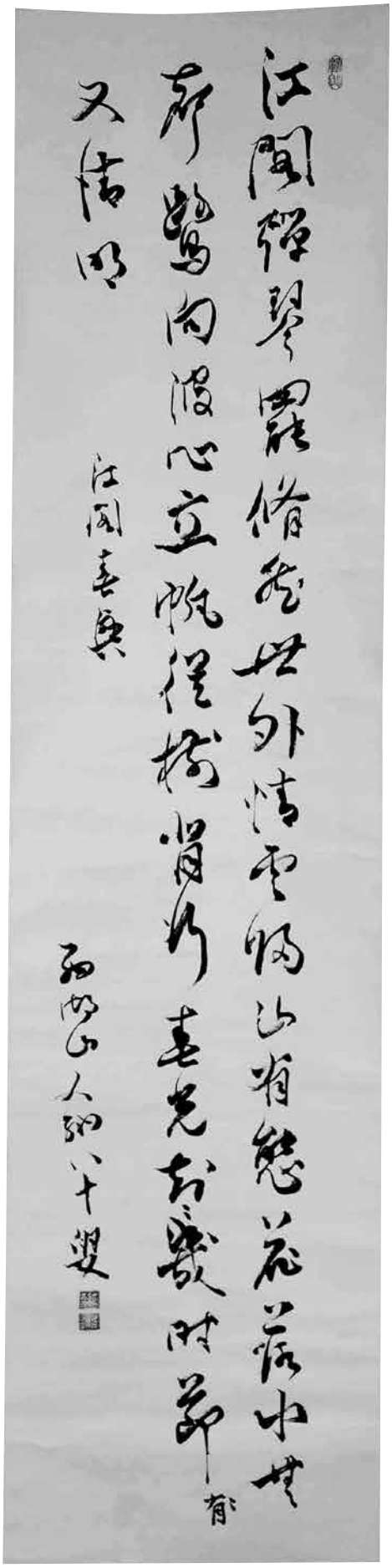
（平生の心力 半ば銷磨し　無限の煙雲 眼底に過ぐ　昨夜は月明 今夜は雨　来宵の情事 更に如何）



⑧ 飯塚西湖五律書幅（いいづかせいこ　一八四五～一九二九、名は納、字は修平）☆

飯塚西湖は洋学者・漢詩人・ジャーナリスト・右翼思想家。出雲国松江藩の出身で、幕末に江戸鉄砲洲の慶應義塾に入り洋学を学ぶ。勝海舟の推挙によって明治政府の徴士となり、一八七〇年にフランスに留学し、一八八〇年に帰朝。フランス滞在中、西園寺公望と親交を結び、カール・マルクスに学ぶ。帰国後は「東洋自由新聞」に入って民権運動に加わったが、次第に国家主義に傾斜し、大井憲太郎・権藤成卿・内田良平らと活動を共にした。漢詩に堪能で、専ら五言律詩を作り、奇士として知られた。漢詩集『西湖四十字詩集』（権藤成卿編）を遺している。展示品は、五言律詩を揮毫したもの。刊本所収作と若干の異同がある。

江閣彈琴罷　脩然世外情　雲歸山有態　花落水無聲
鷺向波心立　帆從樹背行　春光知有幾　時節又清明　江閣春興　西湖山人納八十叟
（印記）「書心畫也」「納印」「伯通」
（江閣に琴を弾じ罷り　脩然たり 世外の情　雲は山に帰って態有り　花は水に落ちて聲無し
鷺は波心に向って立ち　帆は樹背に従って行く　春光 知る 有幾ぞ　時節 又た清明なり）



レオン・ド・ロニー関連年表

西暦	和暦	事　項（●ロニー ○クラプロート ◇その他）	備　考
1738	元文2		▼林子平生（Ⅱ①Ⅲ①）。
1777	安永6		▼清・七十一撰『西域見聞録』中国刊（Ⅱ②）。
1783	天明3	○ハインリヒ=ユリウス・クラプロート、ベルリンに生まれる。	
1786	天明6		▼林子平著『校正海国兵談』成立（Ⅱ①）。
1788	天明8	◇ジャン=ピエール・アベル=レミュザ、パリに生まれる。	
1793	寛政5		▼清・紀昀撰『閲微草堂筆記』中国刊（Ⅱ②参考）▼林子平（56）没。
1794	寛政6		▼魏源生（Ⅱ③）。
1795	寛政7		▼徐継畬生（Ⅱ④）。
1796	寛政8	◇フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト、ヴュルツブルクに生まれる。	
1797	寛政9	◇エニャン=スタニスラス・ジュリアン、フランス中部オルレアンに生まれる。 ○クラプロート（14）、この頃、独学で中国語の勉強を始める。	
1801	享和元		▼『西域見聞録』和刻（Ⅱ②）▼大槻磐渓生（Ⅲ②）▼林復斎生（Ⅲ③）。
1802	享和2	○クラプロート（19）『アジア雑誌（Asiatisches Magazin）』を刊行し、東洋学者の注目を引く。 ◇マリー=フェリシテ・ブロッセ、パリに生まれる。	
1804	文化元	○クラプロート（21）ポーランドの貴族ポトツキ伯爵の知遇を得、サンクスペテルブルク科学アカデミーに招かれ、会員となり、東洋語の教授に就任。	
1805	文化2	○クラプロート（22）ロシアのアムール川航行権交渉のための使節団を清に派遣した際、随行学術隊員として参加○使節団がイルクーツク滞在中、ロシアに漂着した新蔵（ニコライ・コロトゥイギン,1758-1810）から日本語の手ほどきを受け、大量の中国語・蒙古語・満州語の本と、若干の日本語の本を入手する。◇ヨハン・ヨーゼフ・ホフマン、ヴュルツブルクに生まれる。	
1807	文化4	○クラプロート（24）ロシアのコーカサス探検隊に随行。	▼田中万春著『禦虜策』成立（Ⅱ⑧）
1815	文化12	○クラプロート（32）パリに移住。当初はレミュザと同居。◇ヨーロッパで初めてコレージュ・ド・フランス（Collège de France）で中国語の講座が開かれ、レミュザ（28）初代教授に就任。	
1816	文化13	○クラプロート（33）5月16日付ルイ=ガブリエル・ミショー（Louis Gabriel Michaud, 1773-1858）宛書簡（IC⑦）。	
1820	文政3	○クラプロート（37）5月12日付アントワーヌ=ジャン・サンマルタン宛書簡（IC⑧）。 ◇ジュリアン（23）この頃、コレージュ・ド・フランス入学。	
1821	文政4	◇ジュリアン（24）、レミュザに中国語と満州語を学び、ギリシャ語の助手に就任。	
1822	文政5	○クラプロート（38）10月18日付アントワーヌ=ジャン・サンマルタン宛書簡（IC③）。 ◇「アジア協会」（Société Asiatique）創立。	
1823	文政6	○クラプロート（40）3月17日付受領者不明書簡（IC⑨）○6月2日付受領者不明書簡（IC⑩）○9月4日付ルイ・ホリス宛書簡（IC①）○10月9日付受領者不明書簡（IC⑪）。◇シーボルト（27）来日。	
1824	文政7	○クラプロート（41）6月26日付受領者不明書簡（IC⑫）○7月7日付受領者不明書簡（IC⑬）○9月付書簡（IC⑭）。	
1826	文政9	◇ブロッセ（14）アルメニア語とグルジア語を専攻。	▼向山黄村生（Ⅲ④）。
1827	文政10	○クラプロート（44）1月26日付ジャン=ジョゼフ・マルセル（Jean-Joseph Marcel,1776-1854）宛書簡（IC⑮）。	
1828	文政11	◇シーボルト日本より帰国。	
1829	文政12	○クラプロート（46）8月31日付受領者不明書簡（IC⑯）。	▼津田真一郎生（ID①）▼西周生（ID①）。
1930	天保元	○クラプロート（47）5月23日付フランソワ・ベルナール・シャルモワ宛書簡（IC④）。	▼原田一道生（Ⅲ⑤）。
1832	天保3	◇レミュザ（44）没◇ジュリアン（35）レミュザをついでコレージュ・ド・フランス教授就任。○クラプロート（49）年8月10日付〔シーボルト〕宛書簡（IC②）。	
1833	天保4	◇シーボルト（37）ホフマン（28）『新増字林玉篇（Thesaurus literarum ideographicarum）』出版（ID③）	▼アヘン戦争（～1842）。
1835	天保6	○クラプロート没（52）。	▼〔尼崎屋吉兵衛〕書『世話千字文』刊（ID②参考）。
1836	天保7	◇ブロッセ（26）帝国サンクトペテルブルク科学アカデミーに招かれ書記に就任。	
1837	天保8	●ロニー、北フランスのロースに生まれる。	
1838	天保9		▼古賀侗庵著『海防臆測』成立（Ⅱ⑦）。
1840	天保11	◇シーボルト（44）ホフマン（35）梁・周興嗣撰（シーボルト編）『千字文（Tsian dsü wen）』出版（ID②）	▼アヘン戦争（～1842）。
1841	天保12		▼石川舜台生（Ⅲ⑥）▼福地桜癡生（Ⅲ⑦）▼佐藤信淵述『禦侮儲言』成立（Ⅱ⑥）。
1842	天保13		▼清・魏源撰『海国図志』50巻本成立（Ⅱ③）
1843	天保14	◇東洋語学校に中国語の講座が加えられ、ジュリアンの弟子のアントワヌ・バザン（Antoine Bazin, 1799-1862）が教授に就任。	
1845	弘化元	◇ジュリアン（58）、王立図書館の漢籍の管理者に従事。	▼飯塚西湖生（Ⅲ⑧）。
1847	弘化2		▼清・魏源撰『海国図志』60巻本中国刊（Ⅱ③）。
1849	嘉永2		▼清・徐継畬撰『瀛環志略』中国刊（Ⅱ④）。
1850	嘉永3	●ロニー（13）国立自然史博物館で開かれた植物学の講座を受講。	
1851	嘉永4	●ロニー（14）製本工と植字工の職を学ぶ。◇ジュリアン（65）コレージュ・ド・フランスの学長に就任。	▼清・魏源撰『海国図志』日本将来（Ⅱ③）。
1852	嘉永5	●ロニー（15）東洋言語特別学校（École spéciale des langues orientales, 東洋語学校）に入学し、中国語、アラビア語、マレー語など東洋語の学習を始める●論文「インド半島の種々の聖文字について考察」出版。	▼清・魏源撰『海国図志』100巻本中国刊（Ⅱ③）。
1853	嘉永6	●ロニー（16）「アジア協会」（Société Asiatique）のメンバーになる。	▼林子平著『校正海国兵談』刊（Ⅱ①）▼ペリー代将率いるアメリカ合衆国海軍東インド艦隊が日本に来航。

西暦	和暦	事　　項（●ロニー ○クラプロート ◇その他）	備　　考
1854	嘉永7		▼清・魏源撰『海国図志』60巻本和刻▼清・魏源撰『海国図志墨利加洲部』和刻▼大槻西磐『海国図志俄羅斯総記』刊(Ⅱ③)
1854	安政元	●ロニー(17)『日本語研究に必要な主要な知識の概要(Résumé des principales connaissances nécessaires pour l'étude de la langue japonaise)』出版。	▼清・魏源撰『海国図志籌海篇』和刻(Ⅱ③)▼林復斎(54)日本にペリー再来航に際し、幕府側全権として日米交渉▼日米和親条約締結。
1855	安政2	●ロニー(18)「アジア協会」の機関誌にシャム語についての論文を発表。◇ホフマン(50)ライデン大学の初代日本学教授に就任。	▼清・魏源撰『海国図志北洋俄羅斯国』和刻(Ⅱ③)▼『海国図志普魯社国』和刻(Ⅱ③)。
1856	安政3	●ロニー(19)『日本語研究入門(Introduction à l'étude de la langue japonaise)』出版。	▼三浦茂樹(道斎)編『新鐫校正増補字林玉篇大全』刊(ID③参考)▼清・魏源撰『海国図志英吉利国』和刻▼『海国図志印度国』和刻(Ⅱ③)▼魏源(64)没▼アロー戦争(～1860)。
1859	安政6	●ロニー(22)アメリカ・東洋民族学協会(Société d'Ethnographie américaine et orientale, 1864年に民族学協会と改名)創立、終身書記(1873～1879年と1889～1891年会長)になる●ジュリアンと連名で、東洋民族誌学会の名誉会員の称号をブロッセに贈る(7月20日付ブロッセ宛 ロニー書簡〈IA①〉)。	▼林復斎(59)没。
1861	文久元	●ロニー(24)『日本の百科辞典ワカン・サンサイ・ヅエ〔和漢三才図絵〕(Notice ethnographique de l'encyclopédie japonaise Wakan-san-saï-dzou-yé)』出版●レ・タン (Le Temps)紙の常勤編集員に就任●〔10月26日受領〕ブロッセ宛書簡(IA②)。	▼清・徐継畬撰『瀛環志略』和刻(Ⅱ④)。
1862	文久2	●ロニー(25)文久遣欧使節がフランスを訪問、通訳を務め、一行がフランス出国後も同行。この間、福澤諭吉や福地桜痴と親交を重ねる。	▼福地桜癡(22)文久遣欧使節団に参加▼津田真一郎(33)西周(33)ライデンに留学し、ホフマンやシモン・フィッセリングからその教授を受ける。
1863	文久3	●ロニー(26)東洋語学校で初代講師として日本語の講義を担当●『日本文集(Recueil de textes japonais)』出版●10月7日付ブロッセ宛書簡(IA③)。	▼原田一道(64)幕府遣仏使節に随って渡欧し、オランダ陸軍士官学校に学ぶ。
1864	元治元	●ロニー(27)11月6日付ブロッセ宛書簡(IA④)。 ◇ホフマン(60)『大学和字旁訓』出版(ID①)。	
1865	慶応元	●ロニー(28)『日本語会話案内(Guide de la conversation japonaise)』出版。	
1866	慶応2	●ロニー(29)7月22日付ブロッセ宛書簡(IA⑤)。 ◇シーボルト(70)ミュンヘンで没。	▼向山黄村(42)外国奉行、若年寄格となりフランス駐箚。
1867	慶応3	●ロニー(30)パリ万国博覧会で科学委員となり、幕府外国奉行として博覧会を訪問した栗本鋤雲と交流●『和漢字洋訳(Dictionnaire des signes idéographiqes de la Chine)』出版(IB①)●8月25日付書簡(IA⑥)。	
1868	明治元	●ロニー(31)東洋語学校教授就任●『養蚕新説(De l'éducation des vers à soie au Japon)』出版(IB②)●パリにおいて日本字の新聞「よのうわさ(Yo no uwasa)」を発行するも1号限りで廃刊。	▼明治維新。
1869	明治2	●ロニー(32)『日本語講義(Cours de japonais)』出版●11月23日付ブロッセ宛書簡(IA⑦)。	
1870	明治3		▼飯塚西湖(25)フランスへ留学。
1871	明治4	●ロニー(34)『日本詩歌ー日本列島の古代、近代詩歌(Anthologie japonaise, poésies anciennes et modernes des insulaires du Nippon)』●『詩歌撰葉』(Si-Ka-Zen-Yô, Anthologie japonaise, poésies anciennes et modernes des insulaires du Nippon)』出版(IB③)。	
1872	明治5	●ロニー(35)渡欧した石川舜台(32)らと交流。	▼石川舜台(32)渡欧し、ロニーと交流。
1873	明治6	●ロニー(36)『日本語研究のための易しい、段階的な日本語作文(Thèmes faciles et gradués pour l'étude de la langue japonaise)』出版●パリにて第1回国際東洋学者会議を開催●7月4日付ブロッセ宛書簡(IA⑧)●8月12日付ブロッセ宛書簡(IA⑨)。 ◇スタニスラス・ジュリアン没(76)。	▼徐継畬(79)没。
1874	明治7	●ロニー(37)『中華古今採(Tchoung-Hoa Kou-Kin Tsaï, Textes chinois anciens et modernes traduits pour la première fois dans une langue européenne)』出版(IB④)●ロンドンにて第2回国際東洋学者会議に参加。	
1875	明治8	●ロニー(38)第1回アメリカニスト国際会議を開催し、マヤ語などについて研究報告。	
1876	明治9	●ロニー(39)8月28日付ブロッセ宛書簡(IA⑩)。	
1878	明治11	●ロニー(41)『実語教・童子教(Zitu-go kyau, L'Enseignement des vérités et Dô-zi kyau, l'Enseignement de la Jeunesse)』出版(IB⑤)。◇ホフマン(73)没。	▼大槻磐渓(78)没。
1880	明治13	◇ブロッセ(77)フランスに帰国、没。	▼飯塚西湖(35)フランス留学から帰国。
1885	明治18	●ロニー(59)論文「神代巻(Kami yo-no maki Histoire des dynasties divines)」がスタニスラス・ジュリアン賞を授与。	
1897	明治30		▼向山黄村(72)没▼西周(69)没。
1901	明治34	●ロニー(65)『「もみじの葉」日本人の歴史、文学、科学、芸術に関する研究(Feuilles de Momidzi; études sur　l'histoire, la littérature, les sciences et les arts des Japonais)』出版。	
1903	明治36	●ロニー(67)満州語の本をソルボンヌ図書館に寄贈。	▼津田真一郎(75)没。
1906	明治39	●ロニー(71)和漢書をリル市の図書館に寄贈。	▼福地桜癡(66)没。
1907	明治40	●ロニー(71)東洋語学校退職、名誉教授に任命される。	
1910	明治43		▼原田一道(81)没。
1914	大正3	●ロニー(78)パリ南郊のフォンテネー・オ・ローズで世を去る。	
1918	大正7		▼『朝鮮司訳院日満蒙語学書断簡』刊(Ⅱ⑤)。
1929	昭和4		▼飯塚西湖(85)没。
1931	昭和6		▼石川舜台(92)没。

〈参考資料〉

芳賀　徹「文久元年遣欧使節とフランス」『蘭学資料研究会報告』82、一九六一
新村　出「朝鮮司訳院日満蒙語学書断簡解説」『新村出全集』1、筑摩書房、一九七一
佐藤文樹「レオン・ド・ロニー　―フランスにおける日本研究の先駆者」『上智大学仏語仏文論集』7、一九七二
森川　甫「ロニの東洋語学校日本語講座開講」『関西学院大学社会学部紀要』47、一九八三
松原秀一「レオン・ド・ロニ略伝」『近代日本研究』3、慶應義塾福沢研究センター、一九八六
Luc Challieu, « Léon de Rosny et la connaissance du Japon en France », *L'Ethnographe*, Tome LXXXVI, 2, 1990.
中川かず子「ローマ字と日本の近代化―ヘボン式に至るローマ字研究の歴史」『北海学園大学人文論集』10、一九九八
大蔵親志「レオン・ド・ロニー研究―一八六二年遣欧使節の若き洋学者たちとの出会い」『別科論集』1、大東文化大学、一九九九
辻　星児「重刊改修捷解新語の諸本とその版木」『文化共生学研究』6、岡山大学、二〇〇八
阿部修三「『海国図志』と日本―塩谷世弘、箕作阮甫の訓点本」『言語と文化』23、文教大学大学院言語文化研究所、二〇一一
石山禎一・宮崎克則「シーボルトの生涯とその業績関係年表Ⅱ（1833 - 1855年）」『西南学院大学国際文化論集』26-2、西南学院大学学術研究所、二〇一二
奥田倫子「日本語学者ヨハン・ヨーゼフ・ホフマン旧蔵日本書籍目録（試案）」『書物・出版と社会変容』14、「書物・出版と社会変容」研究会、二〇一三
菅原彬州「福沢諭吉とレオン・ド・ロニー　―古歌「植えて見よ」をめぐって」『法学新報』121、中央大学、二〇一四
Bénédicte Fabre-Muller, Pierre Leboulleux, Philippe Rothstein, *Léon de Rosny, 1837-1914: De l'Orient à l'Amérique*, Septentrion, 2014.
オースタカンプ・スエン「シーボルトの朝鮮研究―朝鮮語関係の資料と著作に注目して」『シーボルトが紹介したかった日本：欧米における日本関連コレクションを使った日本研究・日本展示を進めるために：国際シンポジウム報告書』、国立歴史民俗博物館編、二〇一五
小島優里「レオン・ド・ロニー研究 ― "Cours pratique de langue japonaise"（実用日本語講座）の構想をめぐって」『言語コミュニケーション文化』13-1、関西学院大学、二〇一六
井田浩三「伊能図を元にした海外版刊行図」『地図』日本地図学会、二〇一八

編集後記

レオン・ド・ロニーに関する資料展示を二松学舎大学の大学資料展示室で開催できる日が来るとは思ってもみなかった。SRF事業を支えていただいた法人・大学関係各位、SRF事務局の各位、図書館・大学資料展示室の各位に感謝申し上げる。

▼併せて、企画展開催期間中の7月13日・14日に二松学舎大学において講演会・シンポジウム「レオン・ド・ロニーと19世紀欧州東洋学」を開催し、我々の近年の調査成果を報告すると共に、ウィリー・ヴァンドゥワラ氏、高田時雄氏ら内外の研究者をお招きして講演いただく予定である。一人でも多くのご来聴賜りたい。

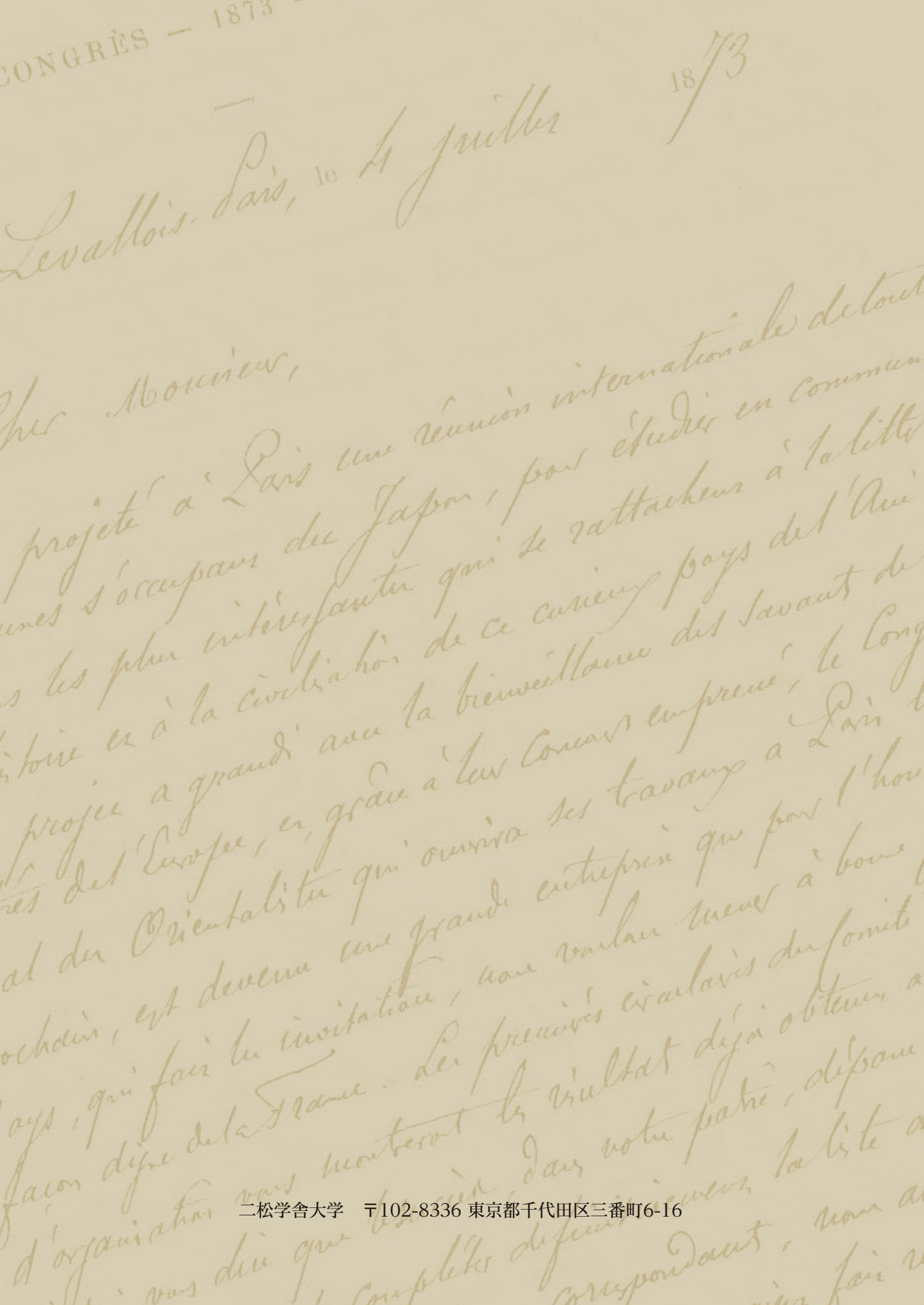
（町　泉寿郎）

企画展

レオン・ド・ロニーと19世紀欧州東洋学

発行日　令和元年六月二九日
編集者・発行者
二松学舎大学私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
「近代日本の「知」の形成と漢学」
本　部　〒一〇二―八三三六
東京都千代田区三番町六―一六
事務局　〒一〇二―〇〇七四
東京都千代田区九段南二―四―一四
印　刷
製　本　株式会社　サンセイ

2019 ©
（非売品）



二松学舎大学　〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16